

クローズド・  
アクアリウム

朝陽遙

誰かと一緒に暮らす、ということが、まずぴんと来なかった。

一ヶ月後に迫ったそれぞれの結婚の話で、教室内は持ちきりだった。想像なんだか妄想なんだか、誰もがまだ顔も知らない花嫁のことを、好き勝手にあれこれ憶測している。

みな冗談を飛ばして笑いあいながら、どことなく落ち着きのないまなざしで、級友たちの表情を探っている。そこに自分の胸にあるのと同じ不安を探り当てようとして。

十五歳。それは僕らにとって、特別な年齢だった。

もう卒業式は目前だった。課程はすべて消化され、あとはセレモニーの予行練習だの、将来に向けてのカウンセリングだのといった、お決まりの日程を残すばかりという時期。

卒業式は慣例で、特別な典礼のときにだけしか使われない市民ホールで大々的に行われる。リハーサルは何度もしつこく繰り返されていた。分厚い樹脂の窓越しにとはいえ、生まれてはじめて本物の宇宙空間と地球を仰ぎながらの、一大イベントだ。

だけど、式のことなんか話題にしているやつは、そのときひとりもいなかった。口を開けばみんな、花嫁の話ばかり。

僕としてはそんなことよりも、将来進みたいと思っている学部の受入れ枠のほうが、よほど気になっている――と言いたいところだったし、実際にそういうような言葉を何度となく口に出しはしていたのだけれど、正直に言えば、そんなものはただのポーズだった。

あまり積極的に認めたくはないことだけれど、僕だって、自分の妻になるはずの、まだ見ぬ女の子のことが気になっていた。

あのころ僕らにとって、女の子っていうのは、常に神秘のヴェールの向こう側の存在だった。テキストの中には登場する。その存在の生物的な仕組みについて、教科書で習いもする。だけどそんな話はいかにも抽象的で、実体は茫洋として知れない。大人に訊いても、みんな言葉を濁して多くを語りたがらない。

「ちょっとくらい、前もって教えてくれてもいいのにな。写真とかさ」

僕の机にひじをついてそうぼやいたのは、委員長だ。手元の端末をいじりながら、顔をしかめている。いくら探したって、参考書の図以外には、何も出てこないだろうに。

「写真なんか、どうだっていいだろ」

「そうか？ 俺は気になるけどな。これから一緒に何年も暮らす相手じゃないか」

「そうだよ。否が応でも何年も顔をつきあわせて生活するんだから、いま知らなかったって一緒じゃないか」

「お前、そういうところ、あんがいクールだよな」

僕は黙って肩をすくめた。もちろん、無関心を装っているだけだ。僕だって皆と同じ。あれこれあらぬ想像をしては自分の思いつきに振り回されて、無為に動揺してばかりいる。そういうことを、態度に出したくないというだけだ。

僕はせいぜい不機嫌そうな、しかつめらしい顔を作った。不安ではなく、不機嫌と見えるよ

うに。

人と一緒に暮らす自分、というのをイメージすることは、どうにも難しかった。

もちろん僕だって子供の頃には、誰かに世話をされていたはずだ。赤ん坊というのは、放っておいても生きられるようには出来ていないらしいから。誕生するまでは『揺り籠』のなかで培養液に浸かって、医療機器の世話になっていたにしても、生まれてからの五年間は、両親に育てられていた。そのはずだ。

級友たちの中には、『家』にいたころのことを覚えているという者もいるけれど、僕にはさっぱり記憶がない。

物心ついたときには学寮にいた。寮ではもちろん同じ建物の中にほかの級友たちが暮らしてはいるけれど、ほとんど個室の中だけで生活に不自由しない。これから先に待っている『同居』とは、やはり勝手が違うだろう。

同居。その言葉を口の中で呟くたびに、憂鬱が増した。台所や、風呂や、寝室や、そんなものを誰かと共有するというのを、具体的に想像しようとしてみると、なんだか薄気味の悪いような気がしてくる。

友達が部屋に泊まりにくるのは違う。毎日、きまって同じ相手と顔をつきあわせて、同じものを食べる。同じ部屋の中で何時間も過ごす。考えただけで飽き飽きしそうだ。

じきに住み慣れた学寮を出て、与えられたまだ見ぬ家で暮らすのだということも、漠然とした不安を呼んだ。生活に必要なものはきちんと与えられるのだし、何か困ったことがあったらこれまで同様、『アドバイザー』に相談すればいい。なんとかなるだろうとは思う。それでも落ち着かない。はじめてのことに弱いのは、性格だ。わくわくするのよりも、心配が勝つ。

それでもみんな十五になったら決まって必ずそうするのだからと言われれば、そうなのかとしが言いようがない。決められていることにいつまでも不満を言っても仕方がない。

せいぜい六年かそこらのことだ。そう思おうとした。どんなにいやな教師に当たったって、二年間さえ乗り切れれば、必ず担任から外れる。それと同じことだ。

我慢していればいつかかならず終わる苦痛というものには、人間、どうにか耐えられるようにできている。

「父さんから聞いたんだけどさ」

学友のひとりが、秘密めかした口ぶりでそう言った。「今年は特別、可愛い子が多いんだとさ。楽しみにしてていいぞ、だって」

言ってから、彼は慌ててきょろきょろとあたりを見回した。父親の立場を心配したのだろう。

彼の父親は『センター』に勤務しているという話を、いつか聞いたことがある。本来その情報を外部に漏らすことは、禁じられているはずだった。たとえその相手が息子であっても。

センター。僕らの住んでいるのは別のコロニーにある、女の子たちの暮らす施設。女そのものと同じくらい、秘密のヴェールに包まれた場所だ。

しかし、この年齢になってもまだ父親と連絡を取り合っているというのは、なかなか珍しい。

いまのクラスでは彼くらいのもんじゃないだろうか。

いつもだったら、それをからかったり、馬鹿にしたりするやつひとりやふたりも出てくるところだけれど、このときに限っては、みなそれどころではなかった。話の聞こえるところにいた級友たちが、そわそわと身じろぎをして、肘でお互いをつつきあう。

おめでたいやつらだ、と思う。期待したってしなかったって、相手はもうとっくに決められているんだから、いまさらそんな情報に、なんの価値があるっていうんだろう。

そう思う一方で、「可愛い女の子」のイメージは、しっかり僕の頭の隅に居座った。

ひどく漠然とした、形にならないイメージだ。可愛い女の子って、どういうものなんだろう。小さいとか、丸いとか。顔が整っているということだろうか。

そもそも女の顔なんて、生まれてこのかたまともに見たこともないのに（記憶に残っていない母親を除けばだけ）、何を基準に、可愛いほうだとか可愛くないほうだとか、判断すればいいんだろう。馬鹿馬鹿しい。

理性ではそう思うのだけれど、ふわふわした形のないイメージは、いつまでも頭の片隅に居座り続けた。

「女って、どんなんだろうなあ」

委員長があきらめきれないようすで端末をいじりながら、ぼそりと言った。さあ、と首をすくめて、僕は興味のないふりを続けた。

おそらくこの教室にいる誰ひとり、その答えを持ってはいない。

月面都市にそのウイルスが蔓延したのは、二百年ばかり前のことだったという。

女性だけが罹る、遺伝子異常をもたらす病気。罹患率、百パーセント。十五歳までの致死率、八十何とかパーセント。二十歳まで生きられる女性は、ほとんどいない。

その凶悪なウイルスのせいで、僕らの社会はいまの形になった。歴史の授業で習ったことを要約すると、そういうことになる。

僕らの知っている女性っていうのは、教科書に出てくるのっぺりした顔と棒のような手足の、妙な体型をした図解だけだ。あとは卒業後、見てのお楽しみというわけ。

昔はそうじゃなかったらしい。男も女も、普通に同じ場所で暮らしていたんだそうだ。どのみち、いま生きている人たちが誰もまだ生まれていなかったころのことなんて、考古学的な過去の話と同じだけど。

卒業式の翌日にはもう引っ越しだった。

とはいえ、ほとんど身一つで移動するだけだ。クラス替えよりも身軽だったかもしれない。私物は指定のカートに放り込んでおけば、あとで新居まで届けてもらえることになっていた。

移動も、トラムに乗り込んで指定された席に座れば、あとはもうほとんど自動的に目的地に運ばれるようなものだった。

これからの数年間を過ごす予定の家、その入り口の前に立って、僕は途方に暮れた。それは、家だった。学寮の二部屋きりの個室とは違う、独立したひとつの地下建造物。それは僕の目には、小さなシェルターのように見えた。

中にはまだ見ぬ花嫁が待っているはずだ。これから数年間をともにする相手。

まだ顔も知らないけれど、名前だけは聞かされていた。マリィ。アマーリア＝ルー。生まれて初めて目にする、同い年の女の子。

一段目に足をかけると同時に、センサーが反応して灯りがついた。

自分の足音が反響して、幾重にも響く。すぐに突き当たりだ。緊張をごまかすためにつばを飲み込んで、おっかなびっくりドアに手をかざすと、手の甲に埋め込まれているIDが反応して、音もなく扉がスライドした。『やあ、君はラッキーだったね、新築だよ』そうって笑った係官の顔が思い出された。

それがどれくらいラッキーなことなのか知らないけれど、だから何だと、聞いたときには思っていた。それでもいざ新しい建物の鋭いようなにおいを嗅ぐと、ちょっとだけわくわくするような気がした。

玄関の向こうには誰もいなかった。ほんの少しほっとして、それから表情を引き締めた。初めて顔を合わせる相手にしょっぱなから舐められるのは、得策じゃない。――スクールのクラス替えの理屈が、花嫁に対しても応用できるかどうかは、考えてみれば少々疑わしいところだけだ。

新しい建材に独特の、鋭く乾いた空気に混じって、機械油と消毒薬のにおいが漂っていた。それから、何か甘いような、嗅いだことのないにおい。

家の中に向かって、何か声をかけようとした。だけど何を言っているかわからなかった。はじめまして？ 今日からよろしく？ 廊下の奥に向かって顔も見ないうちに呼びかけるには、どちらも少々間の抜けた言葉に思えた。

「えっと――入るよ」

とりあえずそれだけを口に出して、おっかなびっくり中に上がり込んだ。自分の声がかすかに反響して、どこかに吸い込まれるように消えた。

誘導灯は足下のほうにある。廊下だけを見ても、中はけっこう広いんじゃないかという気がした。ドアの前を通りかかるたびに、視界の隅で網膜投影式の表示がちかちかと瞬く。ひととおり覚えたら表示をOffにしなければ、うっとうしくてかなわない。

廊下を歩きながら、ずっと考えていた。第一声は何にしようか。礼儀正しく挨拶したほうがいいのかな。同じ年の子なんだから、あんまりかしこまるのも変かもしれない。皆はどんなふうにするんだろう。変に意地を張らないで、もっと相談しておけばよかった――

リビング、と表示されたドアの前で、僕は足を止めた。少しだけためらって、それからもう一度、「入るよ」といった。

返事はなかった。少なくとも僕の耳には聞こえなかった。二呼吸ばかり待ち、制止の声もなかったのだからまあいいかと考えて、ドア脇のセンサーに手をかざした。

やはり音もなくドアが開いた。その向こうには、ゆったりとしたソファがあった。若輩者に貸与されるにしては、やけに豪華なものだ――そう考えてから、違うと気づいた。これは僕ではな

くて、花嫁のために設えられたものなのだ。貴重な女の子のために。

とっさにそんな考えが浮かんだのは、そこに腰掛けていた人間が、あんまりやわらかく、壊れやすそうに見えたからだ。

服の裾から伸びる真っ白な手足の、ふっくらとした線から、なかなか目が離せなかった。

栗色の髪が元気よく跳ねているのには、その後で気がついた。瞳が緑色をしていることも、その目がまん丸に開かれて、びっくりしたように僕を見ているのにも。体のどのパーツを見ても、まったくもって、自分と同じ種の生物なのだとは思えなかった。初対面の相手をじろじろと観察するというのは、褒められた行為ではないかもしれなかったけれど、それについては許してもらえらるだろう——向こうも同じことをしているのだから。

言葉は喉の奥につっかえて、なかなか出てこなかった。準備していたいくつかの挨拶は、どこかに消えてしまった。

「あの——ええと、」

唾を飲み込んで、どうにか僕は人間らしい言葉を発した。「きみが、アマーリア？」

彼女はこっくりとうなずいて、それからあわてたように立ち上がった。それから彼女は恥ずかしそうに、自分の服の裾を引っ張った。ひらひらして動きにくそうな、おかしい服。

「あの……あなたが？」

「あ。えっと、うん。そう。僕はセオ。君の——」

君の夫だよと口に出しているのは、いかにも恥ずかしかった。それでとっさに口ごもって、ごによごによとごまかした。級友たちには間違っても見られたくない姿だった。

「セオ？」

彼女は確かめるように僕の名前を呼んで、小さく首を傾けた。その仕草に、僕はうろたえた。自分の顔に血が上るのがはっきりとわかった。馬鹿みたいに何度もうなずいて、僕は言った。

「うん。——君に会うのを、ずっと楽しみにしてた」

それはまるきりの嘘だったけれど、口に出した瞬間、本当のことになった。そうだ、僕はずっと、彼女に会いたかったのだと、本気でそう思った。理屈もなにもあったもんじゃなかった。

彼女ははにかんで、上目遣いに僕を見た。向こうは向こうで、緊張しているんだなと思った。今年の花嫁は可愛い子ぞろいらしいと囁いた、級友の言葉が耳によみがえる。ついでに、ラッキーだったなといった係官の声も。いや、あれは家の話であって、花嫁のことじゃなかったんだっけ。

混乱した頭の中で、ずいぶんくだらないことを、いっぺんに考えた。その間、彼女はじっと僕を見つめ返して、ただ微笑んでいた。落ち着かないようすで自分の服の袖を小さく引っ張って、頬を赤らめながら。ちょっと引っ込み思案な子なのかな、と思った。だけどそれが可愛かった。男が同じことをしていたら、いらいらするだけだっただろうに。

「えっと……マリィ、って呼んだらいいのかな。それともマリア？」

確認すると、彼女は小さく首を振った。「ルーって呼んで。みんなそう呼ぶから」

ルー。彼女の微笑に見とれながら、口の中で転がしたその音は、なんだか丸くてもろもろしていた。彼女によく似合った呼び名だとも思った。

可愛い、可愛いルー。栗色のふわふわの髪をした、僕の花嫁。

その晩のうちには何もできなかった僕を、笑いたければ笑えばいい——ほかに誰が見ているわけでもないのにそんなことを考えたのは、やはり級友たちへの対抗意識が、僕のなかのどこかにあったんだろう。

何も出来なかったどころか、じつのところ、手をつなぐまでに五日かかった。

最初の日、ソファにひとりぶんの隙間を空けて彼女の隣に座った僕は、照れくささをごまかすように、いろんなことをしゃべった。沈黙が怖くて、話が途切れるたびにつぎの話題を探して、喉がからからになっていることにも気づかずに、遅くまで中身のないことばかりを話し続けた。

共通の話題なんかまるでないから、当たり前だけど、どんなにがんばって話題を探しても、話は途切れがちになった。それでも僕は、話し続けた。彼女と話していたかった。遠慮がちに相づちを挟みながら、彼女は僕の口元をじっと見て、話を聞いた。見られていることが照れくさかった。たまに上がる彼女の甘い笑い声をもっと聞きたかった。

彼女がどうやら疲れているらしいということに気づいたのは、白状しよう、かなり遅い時間だったと思う。ずっと僕の話聞いていた彼女の、口数がだんだん少なくなってきていることに、僕はなかなか気がつかなかった。

どうやらさっきから、ずっと自分ばかりしゃべっている——遅れてそう気づいた瞬間の、僕のあわてぶりといったら、とても見られたものじゃなかった。「ごめん、もしかして、疲れてた？」

あわてたように首を振って、それから彼女は申し訳なさそうに白状した。「少しだけ。ここに来るまで、遠かったから」

「ごめん！」

違うの、セオのお話が面白かったからと、彼女は申し訳なさそうに言った。だけど僕は自分の粗忽さが呪わしくて、その言葉を額面通りに受け止める気にはとてもなれなかった。話なんて、明日からいくらでも出来るのに。

なにせ彼女は細くて、小さくて、クラスメイトのなかで一番ひよわだったやつよりも、もっと弱々しかった。そんな相手の体調をおもんばかりすることもできないなんてと思うと、自分で自分を殴り飛ばしたいような気になった。

申し訳なさそうにしている彼女をどうにか寝室に押し込んで、僕はというと、リビングのソファで寝た。疲れている彼女に気を遣って、ひとりで眠るほうがゆっくり休まるだろうと考えた——というだけではもちろんなくて、同じ部屋で眠る度胸なんかどこにもなかった。

ソファは柔らかくて、寝台の代わりには充分だったけれど、僕はなかなか眠れなかった。遠慮がちな彼女の微笑みだとか、声だとか、そんなことを何度も思い返して、いつまでもひとりで青くなったり赤くなったりしていた。彼女が疲れていることをなかなか言い出せずにいたことに罪悪感を覚える一方で、そういう彼女のけなげさに感動したりして。

自分で思い返して、つくづく思う。男は馬鹿だ。

実際のところ、彼女がけなげにふるまっていたのは、最初の四日だけだった。五日目の朝には、もう彼女はかぶっていた猫を、きれいに脱ぎ捨てた。

五日目のその日、僕らは初めての喧嘩をした。二時間、口をきかなかった。

ことの発端は、地球の画像だ。

卒業セレモニーで見た、半分に欠けた地球。僕はそれがすっかり気に入っていた。もちろんそれまでも、写真や映像で地球を見たことがなかったわけではない。けれど特殊樹脂の分厚い強化窓越しとはいえ、自分の目で見る本物は、まるで違っていた。

真っ暗な空に浮かんで静かな青い光を放つ球体は、それ自体が命あるもののように、息づいて見えた。よく注意して見れば、雲の流れどころか、海辺に打ち寄せる波まで、この目で追えそうな気がした（もっともこれは、僕の脳裏に記録映像で見た地球の海のイメージが残っていて、それで起きた錯覚なんだろう）。

それであるとき思い立って、ライブラリから地球を捉えた衛星画像を探してきた。静止画ではなく、リアルタイムの地球の様子が投影されるやつだ。それをスクリーンに投影して壁紙がわりにすると、ほの青い光がリビングを照らした。

淡い光に包まれた地球の画像を見て、ルーは不思議そうに目を丸くした。「これ、なあに？ きれいなね」

僕はあっけにとられて、彼女の顔をまじまじと見つめた。だけど僕のその視線に、彼女は気づかなかった。彼女の目はうっとり、青い惑星に見入っていた。

「地球だよ。教科書とかで、見たことあるだろ？」

「地球って？」

しばらく言葉が出てこなかった。

彼女は小首をかしげて、僕に問いかける目をした。冗談で言っているわけではないようだった。むしろ、僕が驚いていることに、ルーは困惑していた。

じきに気づいたことだけれど、彼女はとにかくものを知らなかった。地球のことだけではない。月世界の歴史、経済、社会のことはもちろん、科学技術に関する知識も、法律のことも、何にも知らなかった。むしろ知っていることを数えたほうが、早いんじゃないかと思えた。

彼女の知っていることといったら、栄養や薬の管理や衛生観念のこと、つまりは人間が健康に暮らしてゆくために必要な、家の中のものごとくらいで、それをのぞいたらほとんど無知といってよかった。あとはせいぜい、いくつかの歌と、空想物語と、それに登場する想像上の生き物くらいだっただろうか。

「地球のこと、授業で習わなかった？」

「さあ？ 習ったかしら」

彼女はあいまいな表情で、首をかしげた。「授業なんて、ほとんど聞いてなかったもの。でも、こんなきれいなものを見たら、覚えていると思うわ」

僕はしばらく絶句して、それからやっと、そういうものかもしれないと思い直した。なんせセンターで女の子たちがどんな暮らしを送っているのかなんて、僕らはひとつも知ってはいなかつ

たんだから。ただ自分たちが当たり前のようにスクールに通い、毎日授業を受けていたから、彼女らもきっと似たような暮らしをしているのだと、根拠もなく思い込んでいただけで。

それで僕はひとしきり、地球のことを彼女に教えた。僕らの祖先がそこからやってきたということも、そこにいまも何百億もの人間が暮らしているのだということも、彼女はまったく知らなかった。

「嘘。だってあんなに小さいじゃない」

「小さくないよ。すごく遠いから小さく映ってるだけで、ほんとうはとんでもなく大きいんだ」

彼女は困ったような顔で、何度も瞬きをした。僕が荒唐無稽な嘘について、彼女をからかっていると聞いたのかもしれない。そもそも惑星が丸くて、僕らのいるこの月も同じように球体なのだということも、重力の発生するわけも、彼女は知らなかったのだ。

だけど話をするうちに、ルーは信じるつもりになったようだった。そうってみると、彼女がぜん、好奇心を発揮した。子供のように脈絡なくあちこちに飛ぶ質問は、際限なく続いた。それに答えられるだけひとつずつ答えながら、正直にいうと、僕はだんだん辟易してきた。

それでも新しく知る話に目を輝かせている彼女は、とても可愛かった。それで僕はいつしか調子にのって、万有引力だとか、生物が海から発生した話だとか、聞かれてもいないことまで話しまくった。彼女はそのたびに目を丸くし、歓声をあげ、あるいはわからないというように首をかしげて問いを重ねた。

人にものを教えることには、快感が伴っている。そしてその一部は、優越感に根ざしたものだ。

僕がそういう自分の心理に気づいたのは、一時間ばかりも話したころだろうか。得意になっていた分だけ、その感情は鋭く僕の胸に刺さった。

彼女が無知なのは、彼女のせいではない。

いや、授業をまじめに聞いていなかったというのだから、彼女の責任もいくらかはあるかもしれないけれど、そもそも普通に暮らしているなかで、天体の有り様なんか知らなくたって、なんの差し障りがあるだろう。大学でそっちの関係を学ぶつもりだとか、技術職に就くつもりの人間だというならともかく、そもそも彼女に、将来なんていうものはないのだ。

その考えは、思いがけず僕の胸をかき乱した。おかしい話だ。そんなことは、最初からわかっていたはずなのに。

僕の口が急に重くなったのを、彼女は僕がうんざりしたからだと誤解したようだった。

「呆れてる？」

僕はあわてて首を振った。だけど本当のことをいうわけにもいかなかった。だって、どう言えればいい？ どうせ君はそのうち死ぬんだから、そんなこと知らなくてもいいんだよって？

「そんなことないよ。僕もそんなにまじめに授業を聞いてたほうじゃなかったから、思い出すのに時間がかかっているだけ」

嘘、と間髪入れず、彼女はいった。はじめてみる、険しい表情で。どきりとして、僕は首を振った。「嘘なもんか」

彼女は信じてくれなかった。目に涙さえ滲ませて、彼女は怒った。「なんで、嘘つくの？」

あとでつくづく思い知らされたことだけれど、彼女はとにかく嘘というものに敏感に気づく。そして、それを許さない。

ルーが特にそうだというよりも、あとになって友人たちの話を聞いた感じでは、女という生き物が、そういうふう生まれついているようだった。男同士だったら、嘘とわかってても気がつかないふりをするような場面でも、容赦なく暴こうとする。

ルーは完全にむくれた。はじめのうちはなだめたりすかしたりしていたけれど、そうしているうちに、だんだん僕のほうでも腹が立ってきた。

いまになって思い返せば、罪悪感がそのまま、怒りにすり替わったんだと思う。彼女のために思って言葉を濁したことで、どうしてその当の彼女にこんなにも責め立てられなければならないのか。一度そう考え出すと、やっていられないという気になった。

そして一度意地を張ってしまうと、折れるタイミングがわからなくなった。やりにくいなと思った。男同士なら、ののしりあいになるろうが、殴り合いになるろうがかまわないし、いっそそのほうが、仲直りもしやすい。けどまさか、彼女に向かって大声で怒鳴ることなんかできなかった。まして殴れるわけなんかない。

女はとにかく丁重に扱えなんていう倫理の教本を、まさか頭から真に受けたわけでもなかったのだけれど、そもそもあんなに柔らかくてもろそうな体を、どうして殴ったりできるだろう？

ルーは二時間、ずっとぶいと顔をそらして、僕の方を見ようとしなかった。そのくせ僕がソファに埋まるように座ったまま、何度目かのため息を飲み込んでいると、急につんつんと、袖を引っ張ってきた。

振り向くと、いつの間にか、ルーはすぐ隣に座っていた。しかも遠慮がちに袖を握って、上目遣いに僕を見上げていた。

うっ、と言葉に詰まって、僕はのけぞった。ルーのその表情は、可愛かった。ものすごく可愛かった。さっきまでのふくれっ面はいったいどこに捨ててきたんだろう。おずおずと、彼女は聞いてきた。

「まだ怒ってる？」

女はずるい。そんな顔をされて、怒った顔なんか続けていられるわけがない。

「もう怒ってないよ」

口の中でもごもごとつぶやくように言うと、彼女は「ほんと？」と聞き返ししながら、さっきまで指で引っ張っていた僕の袖を、ぎゅっと握った。

とっさにその手を握り返してから、僕は動揺した。彼女の手は見た目のとおりに、柔らかくて、小さくて、そして熱かった。彼女が特別なんだろうか、それとももともと女のほうが体温が高いのだろうか。

ルーの手は遠慮がちに、僕の指を握り返してきた。僕はかちんこちんに固まって、ほとんど身じろぎも出来なかった。そのまま、たぶん一時間くらいずっと固まっていた。

笑いたかったら笑えばいい。

僕の可愛くて繊細なルーは、その実、気まぐれで、無邪気で、ちょっとわがままな女の子だった。

たとえば彼女のふわふわの癖っ毛が好きで、そばにいるとき、無意識に手が伸びることが多かったのだけれど（手やそのほかの場所に触れることに比べたら、髪の毛のほうがまだハードルが低かったというのもある）、機嫌のいいときは嬉しそうに、こちらの手に頭をすりつけるようにしてくることさえあったのに、ちょっと虫の居所が悪いと、ぶいと顔をそらせて、どこかに行ってしまう。僕があわてて追いかけて謝りながら、何が気に障ったのかを訊こうとすると、ときには歯をむいて怒ることさえあった（そしてたいていの場合、その理由は教えてもらえなかった）。

話していて困ったのは、地球の話題が出たときだけではない。僕はいろんなことをルーに話して聞かせたけれど、実際のところ、言いたいことはなかなか伝わらなかった。

話の途中、思いがけないところで彼女が首をかしげる。僕は話の流れを止めて、ルーがどこでつまづいたのか確認する。初めのうちは、どういえば彼女にわかりやすいだろうかと悩みながら、あれこれ言葉を重ねるのだけれど、そうしているうちに段々、話の本筋を見失って、何を言いたかったかわからなくなってしまふ。しまいには面倒くさくなってきて、ときにはそれで喧嘩になったりもする。

口喧嘩になると、ルーは容赦がない。徹底的にやっつけにくる。手段は選ばない。最終的には、怒りながら泣き出す。

勘弁してほしい、小さい子どもじゃないんだから。そう思いながらも、僕は全面降伏せざるを得ない。泣く子には勝てない。それが女の子だと、なおさら勝てるわけがない。女はずるい。

地球の存在さえ知らなかったくせに、ルーは動物の話が好きだった。

とはいっても、進化論のような難しい話には興味がないらしい。そのくせ、地球にいる動物たちの姿や生態のことには、目を輝かせて耳を傾けた。僕らとは違う生き物が、この世界にいるということそのものが、彼女の胸をはずませるようだった。おかげで生物の授業に不熱心だった僕は、ライブラリから資料をあさり回る羽目になった。

たくさんの生き物のことを、僕らはスクールで習う。月には存在しない動物や、魚や、鳥や、虫のことを。本物に触れる機会は絶対がないというのに、なぜそんな無駄な授業に時間を割くのだろうと、学生のころ、僕はいつも思っていた。それは暗記の苦手な生徒たちにとって、一種決まり文句のようなぼやきだった。

教師は、人間の体のことを学ぶためには、そのほかの生物のことも知るべきだからだという。でも本当に、そうだろうか。そんなことのために、限られた単位の中で、こんなに大きい時間を割く必要があるのだろうか。

僕にはそれは、誰かの気慰みなのではないかと思えた。気慰みでなければ、地球を忘れてはいないというアピール（誰のための？）。あるいは人工のものに囲まれた月面世界への反発をなだめるための、これまた人工的な郷愁。

そんなことを考えるのも、自然界の有り様とかいうやつを学ぶたびに、自分たちの立ち位置の不自然さを、いやでも思い知らされるからかもしれない。本来は生物の居住に適さないはずの、この月という不毛の土地に、人類が暮らし続けるために払い続けている、呆れるほどのコストのことを。不自然というのはそもそも人類の宿業なのだといったのは、誰の言葉だっただろう。

ともかく、結果的にこうしてルーが喜んでくれたんだから、僕にとってはあの退屈な授業も、あんがい無駄でもなかったということになるのだろうか。

彼女が空想上の生物だと思っていたうちのいくらかは、実際に地球上にいる（あるいは、かつていた）生き物だということも、だんだんわかってきた。もちろん、本物の猫やねずみは、人間の言葉を話したりはしないだろうけど。

ライブラリの中に、原寸大の三次元映像を投影できるデータがあった。僕がリビングの壁いっぱいにはキリンの足を映し出すと（僕も彼女と一緒に驚いたんだけど、頭まではとても入りきらなかった）、彼女は顔を紅潮させて喜んだ。

「だけど、こんなに大きかったら、住むおうちがなくて困るんじゃないかしら？」

「キリンは広い草原に住むから、家は持たないんだよ」

テキストの受け売りでそんなふうに説明したら、草原って何、と聞き返された。僕は言葉に詰まった。見渡す限りの草野原のことを、どう説明したらいいんだろう？ そもそも草だとか平原だとか、そんなもの自分だって概念としてしか知らないのに？

それで今度は、地球上のいろんな場所の風景を投影できるデータがないか、探しにかかった。けれど、こちらはなかなか見つからなかった。

「ねえ、まだ？」

待ちくたびれてだんだん不機嫌になってきた彼女をなだめながら、二時間ばかり粘ったのだけれど、結局は見つからなかった。ルーを喜ばせようとして苦労しているのに、遅いといって機嫌を損ねられるんだから、割に合わないったらない。だんだん僕もいらいらしてきて、このときもやっぱり喧嘩になった。

後になってからも、ときどきあきらめ悪く探してみたのだけれど、そういう映像データは、やっぱり見つからなかった。ライブラリにはそういうところがある。何でもあると見せかけて、肝心な部分がぼっかり空白になっているようなところが。

僕のほうが彼女の話に耳を傾けることも、もちろんあった。だけど授業をろくに聴いていなかった上に、本も読まないというルーの話は、驚くほど退屈だった。

いや、最初のうちは新鮮だったんだ。女の子しかいないセンターの生活は、なんというか、僕らの暮らしとはずいぶん違うみたいで、ひとつひとつが不思議だった。

けれど話の中身はというと、あっという間に全部話し尽くしてしまって、あとはぜんぶ前に聞いた話のバリエーション。

センターの暮らしって、なんて退屈なんだろう。いつしか僕はそう思うようになった。しかもルーの話は、よく順序が行ったりきたりして、そこに僕の知らない人物の名前が急に混じった

りするものだから、聞いているほうも混乱してしまう。それでいて、途中からまじめに聞くのをあきらめて、適当な相づちを打っていたら、ものすごく怒られる。

彼女はとにかく、ちょっとしたことでよく怒った。

たとえば、そう、彼女の髪型のこと。

ルーは毎日のように、違う髪型をした。はじめの日にはふわふわの髪をそのまま下ろしていたのだけれど、次の日にはふたつにゆったりと結んでいたし、またある日には複雑な形に編み込んでまとめ上げて……といった具合に。

僕は内心、そのことに呆れていた。ずいぶんと手間のかかることのように思えたし（実際、彼女が髪を整えるのを待つために朝食を待たされることもあった）、どんな意味があるのかわからなかった。下ろしているのが邪魔だっていうなら、ふつうに括ればすむだろうに。

それでも最初は遠慮して訊かずにいたのだけれど、慣れてきたころに、僕はうっかり口を滑らせた。「どうして毎日違う髪型にするんだい？ 髪型なんて何だって変わらないだろうに」

言い方を間違えたんだと、いまでも思う。

だいたいなんで口を滑らせたかという、僕は彼女の髪が好きで、ふわふわの手触りを楽しめたかったんだ。それなのに彼女がその日、たまたま髪をきっちり編み込んで結い上げていた。そのささやかな不満が、そんな形で口をついて出たんだと思う。冷静になってみればものすごく馬鹿みたいな話なんだけど。

彼女は怒った。ものすごく怒った。具体的には、そのあたりにあったものを手当たり次第僕に投げつけてきた。なんで彼女がそんなに怒っているのか、僕にはわからなくて、それでよけいに彼女はへそを曲げた。

いまにして思えば、僕は言い方を間違えた。あるいは言葉が足りなかった。「どんな髪型をしていたってルーは可愛いんだから」その一言さえ正しく付け足していたら、喧嘩なんかしなくてすんだのに。

それでも僕らは、よく話をしたと思う。飽きずにとというか、飽きても喧嘩になっても、懲りずに繰り返し話をした。

よく喧嘩になって、お互いにふてくされたりして、でもいつときしたら仲直りをして、手をつないだ。そうやって少しずつ、僕らの距離は近づいていった。

僕らはお互いのことを、ひとつずつ覚えた。ルーは信じられないくらい朝が弱くて、無理矢理早く起こすと半日は機嫌が悪いこと。逆に僕は眠りが浅くて、ちょっとしたことで夜中にすぐ目が覚めて眠れなくなってしまうこと（寝相の悪い彼女に蹴られて起きることはしょっちゅうだった）。

ぴったり並ぶと僕のほうがほんの少しだけ、背が低いこと（もっとも半年もせずに追い抜いた）、手の大きさは、僕のほうがだいぶ大きいこと。彼女の栗色の髪は、照明の加減によっては金色にきらきら光るということ。ふっくらした唇が、見た目以上に信じられないくらい柔らかいこと。

毎日寝て起きて、同じ相手と同じような話題を飽きずに話しあって、喧嘩して、仲直りして、また寝る。授業もなく、仕事らしい仕事もなく――この頃のことを思い返すと、繰り返しばかりの単調な暮らしだったはずなのに、どうしてだろう。なんだか毎日、忙しくてたまらなかったような気がする。

新しい生活が始まって一月ほどが経つ頃、委員長と会った。

連絡してきたのは向こうから。ちょうど愚痴を言い合いたい気分だったのは、お互いの表情からすぐにわかった。

会って話さないかと言い出したのは、僕のほう。通信では話しづらいこともあったし、それにちょうどその日の朝からルーと喧嘩したものだから、出かけた方が気晴らしになるだろうと考えた。

調べてみたら、お互いの家の中間地点にちょっとした公園があったので、僕らはそこで落ち合うことにした。

いざ行ってみるまでは実感がなかったのだけれど、そこはものすごく遠かった。同じコロニーでさえなかった。具体的にはトラムの最深層路線を乗り継いで、二時間と少し。これではそうしょっちゅうは会えないなと、そう思った。

もっとも、それは委員長に限った話ではない。クラスメイトたちは、念入りに引き離されて、できるだけ違うコロニーに分散されていた。

そういう説明が、誰かの口からなされたわけではない。もしかしたらただ単に住居の空きがなかっただけかもしれない。ただ少なくとも僕らは、そこに何らかの意図を感じていた。

コロニーの外に出るときには、申請がいる。もちろん手続きさえ踏めば許可はすぐに下りるし、たいした手間でもない。けどやっぱりそれはちょっと面倒なことで、その「ちょっと面倒」が、心理的な敷居の高さを作っている。

この距離は何なのか。

結託と反乱をふせぐため？ まさか、古代史じゃあるまいし、生活に多少の不満があるくらいで、誰がそんなことをするっていうんだろう。

暴動とまではいわずとも、よけいなトラブルをふせぐためだろうか。それはありそうなことに思えた。どうやってってスクールのなかではそりの合わない連中がいたし、くだらない喧嘩はしょっちゅうだった。中には陰湿なやつもいる。

それだけが理由なら、仲の悪いもの同士を引き離せば事足りるだろうけれど、誰と誰の仲がいいとか悪いとか、そういうことを逐一調べて配慮をするのは、管理をする側からしてみたら面倒だろう。それならいっそ、皆を遠くに散り散りにしてしまえば話が早い——それくらいの意味なのかもしれない。仲が良いやつらは勝手に連絡を取り合うだろうし、月のどのコロニーにいたところで、通信なら一瞬だ。

だけど、このとき僕が委員長に会いにわざわざ出かけたように、通信での会話をいやがる心理というのは、たしかにある。

公共の通信というのは、自動的に記録が残る。誰でも好き勝手にのぞき見できるという性質のものでもないけれど、逆に言えば、何かあれば他人に見られるかもしれない。

それでもほかの友人と話すのなら、わざわざ足を運ぶまではしなかった。けど相手が委員長なら、話は別だ。

順番が前後したけれど、彼の話をしよう。

この友人は昔から、ちょっと変わったやつだった。彼が委員長になったのは、かなり早い時期だったと思う。それから卒業まで、ずっと彼は委員長だった。皆も彼を本名で呼ぶよりも、親しみを込めて委員長と呼ぶことが多かった。

学級委員長という言葉につきまとうイメージにふさわしく、彼は優秀で、礼儀正しくて、人望厚く、まじめな生徒だった。ただし、教師のいるところでは。

そもそも同級生の間で人望が厚いということと、教師にとって理想的な生徒であることというのは、そうそう両立しないものだ。大人のいないところでこそ、彼の本領は発揮された。

彼にまつわるエピソードを数え上げればきりが無いけれど、ひとつだけ選ぶなら、やっぱり卒業セレモニーのときのことだろう。

セレモニー会場は遠かった。スクールからやはりトラムで、一時間と少し。昼食を済ませてから、僕らはぞろぞろと寮を出た。

一生に何度、あのホールに立ち入ることがあるだろう。そこは特別な場所だった。なんせ月面都市で、地球をじかに目の当たりにできるのは、あそこしかない。

そもそも地上に作られた建造物自体、数えるほどもありはしない。なんせ月面に降り注ぐ隕石は多い。もちろん迎撃レーザーは配置されているし、隔壁も頑丈に作られているから、多少のことではびくともしないはずだ。ホールの強化窓も、ちょっとやそっとの隕石ぐらいではかすり傷もつかないという。それでも、地下施設のほうがよりリスクが少ないのはたしかだ。

太陽光の問題もある。月面において、日差しのもとで生きられるものなどいないのだから、そもそも地上に窓を作る意味なんて、ほとんどないといってもいい。ホールの窓だって、日のある時期には遮光モードに切り替わる。そういうわけで、セレモニーは必然的に夜の時期になる。

トラムで会場に向かうあいだ、関係者だけで貸し切りの車両は、しじゅう騒がしかった。大声で騒ぐ者はいなかったが、みなどこか浮き足立っていた。式典そのものを楽しみにしている者がどれくらいいたかわからないけれど、今日が特別な日だという感覚は、どうやら誰の胸にもあった。

なんせ五つのときから同じスクールに通い、同じ学寮で寝起きしてきた友人たちとの別れだ。これを最後に、もう生涯会わない者もいるだろう。せいせいしているという風情の者も、どこことなく不安そうな者も、新しい生活への期待に頬を紅潮させている者もいた。笑い声や悪態や弱音や、いろんな声が混じり合って、高まったり低くなったりを繰り返していた。

その中で委員長はひとり黙り込み、退屈そうな顔で手元の端末をいじっていた。彼がそういう態度でいるのは、それほど珍しいことではなかった。委員長はその気になれば社交的に振る舞うけれど、ひっきりなしに友人と話していないと落ち着かないというタイプではなかった。

「何を見てるんだ？」

だから、僕がそう話しかけたのは、彼に気を遣ったからというわけではなかった。ただ自分自身の退屈を紛らわしたかっただけだ。

委員長は視線をあげて僕の顔を見ると、口の端でにやりと笑った。彼がずっといじっていたその端末に、何気なく視線を走らせて、僕は違和感を覚えた。

それはほんのわずかな差違だった。皆に支給されている学生用の端末と、大きさも色も同じ。形状もパーツも、よくよく注意して見ないかぎりほとんど違いがわからない。画面に表示されているインターフェイスまで、本物とそっくりだった。

「――それ、何だい」

秘密のにおいをかぎつけた僕が、とっさに声を潜めて聞くと、委員長は小さく首をすくめた。

「普通の声でいいよ。かえって目立つだろ」

「また妙なことでも考えてるのか」

「失礼な。ちょっとしたサプライズだよ」

委員長は笑いながら、片手で画面にすばやくテキストを打ち出した。周りに聞かれたくないから、筆談というわけだ。これなら相手を読んだら急いで抹消すれば、記録にも残らない。

文面に目を走らせて、僕は絶句した。

『地球側の衛星から、電波を拾う』

委員長は続けて短い文章を入力した。『普通の顔してろったら。目をつけられる』

「……最後の最後まで、よくやるなあ」

かろうじて、普通の声を出したと思う。委員長は片頬で笑った。

「だけど――」

僕はいいかけて、自分の端末を取り出した。口ではぜんぜん関係のないことをいいながら、本当に聞きたいことは、委員長のように画面に表示させた。傍目には、雑談しながらライブラリのデータを検索しているように見えることを願って。

それにしても、話すのと同時にまったく違う文章を手で入力するというのは、なかなか骨の折れることだった。

「サプライズになるのか？ それ」

「まあ、うまくやるさ。びっくりするぜ、あいつら」

『指向性っていうのかな、あるんじゃないのか。電波の強さとか』

『太陽電池パネルの技師連中なんか、作業中にこっそり向こうの放送を拾って楽しんでるらしいぜ』

「まあ、冗談ですむ範囲にしとけよ。君、前にもそれでシンドリーを怒らせただろ」

「そうだっけ。もう忘れたな」

『どこで聞きつけてくるんだ、そういう情報』

『ネットでさ。決まってるだろ』

「おいおい」

「嘘だよ。わかってるって」

『危なくないのか』

『まあ、見てろ』

ネットワークか。だけど、制約の多い学生用の端末で、そんな情報に触れられるものだろうか

？ 少なくとも僕は見たことがない。どこを見たらそんな話が書かれているのかさえ、見当もつかなかった。

僕のあきれ顔をどう解釈したのか、委員長は楽しそうに、喉で笑い声を立てた。卒業生の中でこのお祭りムードを一番楽しんでいるのは、どうやら彼らしかつた。

委員長の計画というのは、こうだ。

セレモニーの会場からは、じかに地球が望めるとはいつても、もちろん分厚い強化窓ごしのことだ。それでも、地下深くにある居住区はどこよりも、ずっと地球との電子的な距離は近い。

この日のためにスクラップの中から掠めて集めた部品で、委員長は、専用の受信機を作ったという。うんと微弱な電波でも拾って記録できるやつ。それを、普通の携帯端末そっくりの見た目に偽装した。作り方はライブラリで調べて、彼なりの改良をしたという。

独自に組んだプログラムで、地球側の衛星から発信されている電波を拾う。セレモニーの間、一番近いところにいる衛星から、自動的にデータを拾って記録する。それをセレモニーが終わってから、こっそり仲間内で見ようというわけだ。

ふだん僕らが使っている端末は、ライブラリに直結している。そっちのメモリを使って大がかりな作業をすれば、ログを取られるかもしれない。だから独立した、ネットワークにつながっていない端末を用意する。公的な流通ルートを通っていない、自作のやつを。

何ヶ月も前から考えていたに違いなかった――それを誰にも漏らさずに、ひとりでこっそりやり遂げたというところが、彼の彼たるところだった。

拾えるデータを自動で保存するだけだから、何が出てくるのかは、フタを開けてみるまでわからない。最接近中の衛星がうっかり軍事用だったりすれば、仮に拾えたとしても、何がなんだかわからない暗号データだったということもあり得る。もっとありそうなことを考えれば、地球のどこかの国が放送する、たわいもない娯楽番組かもしれない。

いや――むしろ、そちらであることを、彼は望んでいるのかもしれない。

僕は興奮を顔に出さないことに必死だった。なんせ、地球との人の行き来は何世代も前に、完全に途絶えてしまっている。物資のやりとりはあるけれど、例の病気の感染を恐れて、地球側はけて月面人の渡航を許可しない。男は発症はしないといても、ウイルスを運ぶことはあり得るからだ。

必然、地球からの情報も遮断される。そうとはっきり教科書に書かれているわけではないが、そういうことだ。命あふれる惑星の、おそらくは豊かな暮らしの映像なんて見せられて、なんとかして地球に行きたいなんて思う馬鹿が出て、困るだろうから。

僕らは地球の情報から、遠ざけられている。歴史の授業で遙かな過去を学ぶことはあるけれど、それだって、どれほどの情報がそぎ落とされずに残っているかなんて、誰にもわかりはしない。

つまり、リアルタイムの地球を知っている者なんて、月にはいないのだ。いたとしても、特殊な役職についているごくわずかな人間だけ。

それを断片なりと、この目で見られるとしたら？

会場への移動だけで、僕はすっかりくたびれてしまった。そうまでして地球を望めるホールで式典を行うことを、いざ足を踏み入れるまでは、滑稽なことだと思っていた。窓越しに見るだけならライブラリの画像だって充分じゃないか、それを会場の空に投影でもしたらどうなんだと。

だけど、じかに見るのと映像の間には、やっぱり開きがあった。

いざそれを目の当たりにすると、僕は言葉を忘れて、青い惑星に見入った。僕らの母なる星は、淡いもやに包まれて、宇宙空間に静止していた。下半分くらいが欠けて闇に沈んでいたけれど、残りの半分には雲が渦巻き、目の痛くなるような青い海との間に、あざやかなまだら模様を作っていた。

知識としては当然のこととして頭に入っていた、自分たちがずっと昔にあの場所からやってきたのだという事実が、いまさら信じられないような気がした（この点、僕はルーを笑えない。そのとき僕の目に地球は生きた宝石としか見えなかった）。

会場で僕は、委員長のすぐ近くの席に座っていた。近くというか、斜め後ろの席。わざとそこに陣取ったというわけではなくて、元から決められていた配置どおりだった。

彼に不審げなようすは、少なくとも傍で見ている限りでは、何も見受けられなかった。最初に地球を目の当たりにしたときに小さく口笛を吹いたきり、あとは真面目くさった優等生の顔にほんのわずかな退屈を滲ませて、たまにそっと欠伸をかみ殺していた。ポケットに手をつっこんで端末を気にしているというそぶりは、断言できる、かけらも見あたらなかった。

皆がもうすっかり配置について、じきに式典の始まるという頃合いだった。音もなく自分の横を通り過ぎた老紳士に、僕はその背中が視界に入る瞬間まで、気づきもしなかった。

歴史の教師だった。あわてるなどという感情は生まれるより前に捨ててきたというふうな、この老教師に特有の足取りで、彼はやってきた。

そしてさりげなく、委員長の肩を叩いた。礼儀正しく、それでいて親しみの籠もったしぐさで。

委員長はたいしたものだった。動揺したそぶりもなく、ごく普通の軽いおどろきを持って振り返った。それから恩師に向かって、『何か？』とでも言いたげに、かすかに首をかしげてみせた。教師は温厚な微笑みを浮かべたまま、彼のポケットを指し示した。

委員長はわずかに逡巡したようだった。けれど逆らわず、素直に中身を出した。

老教師は、どこか楽しそうな笑みさえ浮かべて、彼がその端末を自分の皺ぶかい手のひらにのせるのを見守った。そうして満足げにひとつうなずいて、何事かを小声で囁くと、やはり悠然たる足取りで、後方に去って行った。

周りにいた連中はあっけにとられて首をひねり、その後ろ姿を見送った。いまのは何事だったのか。委員長が何かを没収されたように見えたが、そのわりに叱責のそぶりがなかったのはなぜか？

僕は内心で冷や汗を掻きながら、周りの皆をまねして、好奇心に惹かれているようなふりをした。

式典が終わり、会場を出て帰りのトラムに乗り込んでから、委員長はようやくため息を吐いた。僕の方で堪えかねて、せかせかと訊いた。

「先生、なんて？」

「スクールに戻ってから返すってさ」

「それだけか？」

委員長はあっさりとうなずいて、「肝が冷えた」と呟いた。言葉の内容のわりには、飄然とした口調だった。

なんでわかったんだろう、と言いかけて、僕はなんとなく言葉を飲み込んだ。委員長ならばそれらしい推測を持っているかもしれなかったけれど、はっきりと言葉で聞くのは、怖いような気がした。

待ち合わせの公園には、人が多かった。このあたりで住む人々の憩いの場になっているのだろう。

スクールの近くにあった広場とは、ずいぶん雰囲気は違っていた。赤ん坊や、走り回れるようになった子供を連れて、その親たちが言葉を交わし合っている。育児の不安を打ち明け合ったり、子供同士で遊ばせたりしているようだ。

公園というものは、地球の都市部にあるようなものを、ほとんどそのまま模して作られているんだそうだ。外周には何種類かの樹が植えられて、空調の風を受けて梢を揺らしている。高く設えられた天井からは、明るい光が射しかけている。こんなことにいったい何の意味があるのかと思うけれど、ひとの精神の健康のためには、広い空間と樹木が重要な役割を果たす一丁のさうだ。

委員長の姿は、すぐに見つかった。というのも、僕らのほかはみんな家族連ればかりで、ひとりで来ているのは彼くらいだったからだ。

向こうも僕にすぐ気がついて、軽く手のひらをあげると、いつもの飄々とした足取りで近づいてきた。

「よう、久しぶりだな」

「一ヶ月も経ってないだろ」

とっさにそう答えはしたものの、実をいえば、僕も同じことを感じていた。まあな、と笑って、委員長は首を搔いた。

僕らは家族連れの人々を避けて、端のほうのベンチに座った。近くには食事ができる場所もあったけれど、なんせ僕らには金が無かった。

委員長はベンチの背もたれに寄りかかると、ひどくくたびれたというように、ひとつ深いため息をついた。

「参った」

何のことを言っているかは明らかだった。笑いながら、僕もぼやいた。「なんなんだろうね」

「まったく人の話を聞かなくないか」

「僕のところは、ちゃんと聞いてくれてるよ。でも、言いたいことがぜんぜん伝わらない」

「宇宙人だよな」

「わかる」

「振り回されるよなあ」

「悪気はないんだろうけど、なんていうか……」

「疲れる」

僕らは同時にため息を吐いて、ちょっと笑いあってから、さんざん愚痴をこぼした。

僕らの女性観はおおむね一致していた。気まぐれで、感情的で、話が通じない。何で怒るのかわからないようなことで怒る。機嫌を損ねてもいつの間にかけるっと立ち直って、こっちが心配したのが馬鹿馬鹿しくなるくらい、平気な顔をしている。

「参るよなあ」

さんざん悪口を言っておきながら、彼はちょっと照れくさそうに、端末に保存してある画像を再生して、僕に見せてくれた。画面の中では彼の妻が、緊張したふうにまっすぐカメラを見つめていた。

やや垂れ目気味のブルーアイ、ほっそりとした顎、薄い唇。大人しくて物静かそうな人だ――彼の妻の画像は、僕の目には、そういう印象を与えた。この人が口げんかになったらえげつなく委員長を問い詰めるんだろうかと思うと、妙に可笑しい気がする。

その画像を眺めながら、僕は小さな疑問の答えをひとつ拾ったような気がしていた。僕らが卒業して新たな自分の家に到着するまで、けして事前に花嫁の顔を知らされなかった、その理由。

僕は彼の妻をそつなく褒めたし、それは嘘ではないつもりだったけれど、それはそれとして、僕は内心で鼻が高かった。僕のルーのほうが可愛い。

もちろんそんなことを口に出して言わないくらいの分別はあった。だけど、そう、もし前もってこんな風に、お互いの配偶者の写真なんかを見せ合う機会があったなら、教室は羨望だの反感だの、さぞうとうしいことになっただろう。

それに、クローンの問題もある。

女の子たちはあんまり死にやすいものだから、男に対して、数がぜんぜん足りない。だけどそれじゃあ、人口は見る間に激減する一方だ。それで、自然に生まれてきた子だけじゃなくて、その子たちの細胞をもとにしたクローンが、何人も作られる。

ルーは、どっちなんだろう。そう考えたことが一度もないといったら、やはり嘘になる。確かめたければ彼女に向かって、両親の記憶があるかどうか、聞いてみればいい。だけどそんなことはやらない。だってそうだろう？ その答えがどちらであっても、いまさら何かをどうにかできるわけでもないんだから。

ともかく、同級生の誰かの奥さんが、自分の妻とそっくり同じ顔をしている可能性っていうのは、少なからずあるわけだ。そのことを、結婚前にはそれほど重く考えたことはなかったのだけれど、あらためて想像してみれば、あまりいい気はしなかった。その子が自分以外の男と仲良く腕なんか組んでるところを想像すればなおさらだ。

ところで僕のほうはというと、ルーの画像を、委員長に見せなかった。素っ気ない口調を作って、僕は言った。「写真なんか撮ってないよ」

もちろん嘘だった。端末の中にはルーの画像が、一枚や二枚どころではなく入っていた。

「なんだ。つまらないな」

委員長はそんなふうに関心をなくして、軽く流してくれた。嘘だと気づいていたかもしれないけれど、あえて追求したりはしてこない。こういうときはやっぱり、男同士のほうが手加減というか、暗黙の了解というか、そういうものがあるなと思った。

写真を見せなかったのは何も、彼がルーと自分の妻を比べてがっかりしやしないかなんて、そんなおせっかいな心配をしたわけじゃない。もっと単純な話だった。彼女を、ほかの男に見せるのがいやだったんだ。

笑いたければ笑えばいい。

ところでこのとき彼の持っていた端末は、もともと使っていたものだった。

「そういえば、あれ、どうなったんだい」

僕は具体的な名詞を出さなかったけれど、彼の手元に向けた視線から、委員長は察したようだった。

「返してもらったよ。ウチに取ってある。だけど結局、ただのがらくただったな」

「あの日、スイッチは入れてたのか？」

「ああ。だけど、何も拾えてなかった」

「消されたんじゃないか？」

「たぶん。取り上げられたのが、すぐだったからな」

悔しそうに委員長は言って、首をすくめた。

「――何か言われた？」

委員長は少しためらって、それから答えた。「将来が楽しみだ、だとさ」

言い終わって、彼はふっと、決まり悪げに視線をそらした。たいていのことには動じない委員長にしては、めずらしい仕草だった。僕のほうでも、なんとなく落ち着かなくて、ベンチの上で尻をもぞもぞさせた。

あのセレモニーの夜、先生は、どうやって彼の仕掛けを見破ったんだろう。

前からマークしていた？ それならもっと早くに取り上げられたんじゃないか。見ていて気づいた？ だけどあの会場で、委員長には不審なそぶりはまるで見られなかった。端末は支給品とそっくりだったし、そもそも彼は会場入りしてから、それをポケットから出しもしなかった。怪しまれるような何かがあったとは思えない。

彼はライブラリで、受信機の作り方を調べたという。もしかするとそのアクセス情報を、チェックされていたのかもしれない。何をしでかすか、先にあたりをつけられていた――監視。

その単語を口にするのがためらわれて、僕はいつとき沈黙した。

頭上で葉擦れの音に混じって、軽やかな高音が、繰り返し鳴っていた。音楽的な響きのある、けれどメロディというには切れ切れなフレーズ。この環境音楽が地球にいる鳥の声を模したものだというのは、何の授業で教わったんだっただか。

地球では、鳥や虫といった空飛ぶ生き物が、木々や草花の花粉や種子を運ぶという。月ではその代わりに、メンテナンスのためのロボットが同じことをする。地球だったら雑菌や微生物が分解してくれるようなたぐいのゴミも、月面ではそうもいかないから、そこらじゅうをひっきりなしに清掃ロボットが往復している。たとえばそういうありふれた機械に、カメラや集音装置が仕込まれていたら？

いやな想像をしてしまった。同じことを考えたのかはわからないけれど、見れば委員長も、木の枝を見上げて眉をひそめていた。

それとも考えすぎだろうか。そうかもしれない。あの夜、委員長は平然としていたけれど、僕

のほうは自分で思うほど自然に振る舞えていなかったのかもしれない。それで教師が不審に思って、僕らを注視していたという、それだけのこともしれなかった。

「それにしても、六年か」

話を変えたかったんだろう。冗談めかした口調で、委員長は言った。「先は長いな」

「そうかな」

首をかしげはしたけれど、でも、そう、考えてみれば五年とか六年とかいうのは、けっこうな期間だ。

だけど、きっと実際にはそう長く感じないだろうという気もしていた。なんせルーと一緒にいるのでは、毎日がずいぶんと忙しそうだから。

僕らは互いの健闘を祈り合って公園を後にした。

再び延々とトラムに揺られて帰ると、ルーは完全に拗ねていて、やはり二時間ばかり口をきいてくれなかった。

生活に大きな変化が出てきたのは、三か月目くらいからだったと思う。つまり、彼女が妊娠したあたり。

出産にまつわる一連のプロセスは、もちろんスクールの授業の中に入っていた。それを習っていたころ、僕はテキストを読みながら、ずいぶんと退屈していた。興味がなかったからだ。その、妊娠する前の過程については、興味のない男なんかそうそういないと思うけれど、そのあとのことは何の面白みも感じられなかった。中には生命の神秘だかなんだか、そういうことに感動していた純真なやつもいないではないけれど、大半の生徒にとってはどうでもいい話だったんじゃないかと思う。

だってその頃は、いつか自分のもとに来るだろう花嫁のことなんて、ちっとも現実味がなかったし、それが花嫁という名前のない存在では無くて、ともに暮らすひとりの人間なのだということは、もっとぴんときていなかった。

いざその場になってみると、僕は恥ずかしいくらいうろたえた。体外受精、着床、検査の数々、『揺り籠』への胎児の移植、そこから出てくる出生までの日数。つわりのこと。妊婦が食べるもののこと。

ずいぶん前に興味なく読み流したはずのテキストを、僕は端末のどこかからあわてて引っ張り出してきて、ああでもないこうでもない、あれこれいらぬ心配をした。彼女がちょっとでも疲れたような顔をしていたら、うろたえて彼女にまわりついて、どこか痛むのかい、気分はどうだと騒々しく声をかけた。そんな僕の動揺を見て、ルーはよく可笑しそうに笑った。

彼女のほうは落ち着いていた。センターで詳しいことを教わってもいただろうし、心の準備はとっくにできていたということなのだろう。授業が嫌いでろくに聞いていなかったというルーも、このことに関しては、すっかり頭にたたき込んでいた。当たり前かもしれない。自分の体のことなんだから。

妊娠が、彼女の体に負担をかけるということは、僕には理不尽なことのようには思えた。

月面では、自然分娩は危険が大きい。まず臨月まで胎児が正常に育たない。仮に育ったとしても、母体が耐えられない。だから着床から最初の数週間のプロセスは母体で育てるけれど、六週あまりが過ぎれば、胎児を取り出して『揺り籠』に移してしまう。

僕らの祖先が最初に月面に移り住んでもう三百年からなる。それだというのに僕らの体の、少なくとも根本的な部分は、いまだに1G仕様のままだ。

それなら最初から最後まで『揺り籠』の中で育てればいいようなものなのに、とも思う。だけど技術的な問題で、妊娠の最初期に関しては、母体のほうが安定するのだそうだ。

僕はそうした知識の大半を、ルーから教わった。しかめつらしい、きまじめな教師のような口調で、ルーは語った。そう話すときのルーにはどこか威厳が感じられて、僕は打たれたようになった。けれど話し終えるなりルーが表情を崩して言うには、「いまのはセオのまね。わかった？」——だそうだ（僕はあんな話し方をするだろうか？）。

出産までに、あんまりたくさん薬や設備に頼るものだから、野生の生き物は全部自分の体ひ

とつでやるんだよなあ、なんていうことを考えたりもした。もちろんそれも、生物の授業の受け売りだ。野生の動物なんて、月面人にとってこんなにぴんときない代物があるだろうか？

不自然、ということをもた思った。月面では、自然のやりかたで子供を産むことはできない。それどころか、たくさんの設備の力を借りなければ、ただ生きて呼吸をするだけのことさえできないのだ。

そんな土地に、僕らはもう何百年も、住んでいる。いろんな無理を、技術でごまかしながら、暮らし続けている。クローン技術で女の子を大量生産するような真似までして。

出産に関するプロセスのほとんどを、体外で行うようになった近代において、母体が出生後の生活に対応するため――育児向きの体に作りかわるためには、投薬に頼らなくてはならない、のだそうだ。

その薬の効きかたには、個人差がある。副作用だって当然、ある。僕らの子どもが彼女の体から取り出されて、投薬が始まったあたりから、ルーは体調を崩すことが増えた。

すっかり寝込んで起きられないというわけではない。ただ青い顔をして、ぐったりとソファにもたれかかっていることが多くなった。口数も減った。

苦しいのかいと聞いても、ルーは笑って首を振る。

「ちょっとだるいだけ。たいしたことないから」

とても素直に信じる気にはなれない、無理のにじんだ声だった。隣に腰かけてそっと手のひらで頬に触れると、ぎよっとするほど冷たかった。いつも体温の高いルーなのに。ルーは微笑んで、僕の手の甲に自分の指を重ねた。その指もやっぱり、ひんやりしていた。

いつも感情をむき出しにして恥じず、すぐに泣いたり怒ったりするルーが、思えばこのことに関しては、驚くほど我慢強かった。気分がすぐれないことを隠そうとはしなかったけれど、ほとんど弱音らしい弱音を言わなかった。

僕にはそのことが不思議でならなかったのだけれど、ずいぶんあとになって気づいた。言ってもどうにもならないことだからだ。

僕の行動に気分を害したんだったら、怒って僕にそれをやめさせることもできる。だけどいくら苦しいとか辛いとか言ったところで、たとえば僕がその痛みを消してやれるわけでもないし、代わってやれるわけでもない。

何もできないというのは、きつかった。自分が健康そのものなだけに、なおさら。

あるとき、服用から三日経っても、彼女の体調が戻らなかった。僕は何度も迷ったあげく、リビングの端末からアドバイザーを呼び出した。午前の早い時間、ルーが起きられずに寝室に籠もっているあいだのことだ。

接続は、何年ぶりかのことだった。この前に自発的にこのAIに頼ったのは、三年ばかり前、教師や同級生に聞くのはどうしても恥ずかしい健康上の質問（内容は察してほしい）をしたとき以来じゃなかったかと思う。

据え付けられている端末の操作に、少し戸惑った。学生時代から使っている個人端末と、この

夫婦共用の端末では、インターフェイスが違っているのだ。

それでも久しぶりに聞いたAIの声は、記憶にあるとおり、生身の人間よりもよほど温度のある、落ち着いた声をしていた。

もちろん、利用者を安心させるために、そういう声質に調整されているだけだ。わかっているけれど、たしかにその声を聞いた瞬間、わけもなくいくらか安心したような気になった。

『何かお困りですか』

「ルーの――妻の、薬のことなんだけど」

僕はルーを起こさないように、小声で状況を説明した。

薬には副作用があることも、それが避けられないことも知ってはいるけれど、それでもこんなにしょっちゅう体調を崩しているというのは、おかしいのではないか。ほかの薬に変えてもらうことはできないのか。

切々と訴えかけてみたけれど、結果から言えば、無駄だった。アドヴァイザーは僕を落ち着かせるように、温かい声音で、気休めにもならないことを言った。つまり、薬の適合については事前に検査されている、問題ないと。

「問題ない？」

僕は思わず声を荒げた。「問題がないだって？ だってあんなに辛そうにしてるじゃないか」

言いながら、だんだん腹が立ってきた。検査？ そんなもので百パーセントの結果が保証されるわけじゃないってというのは、医療にはしろうとの僕にだってわかる。

AIに向かって声を荒げるなんて、滑稽なことだ。だけどそのときは、そんなふうに分を嘲笑するだけの余裕もなかった。

「もしものことがあったらどうするんだ」

言ってから、自分が口に出した言葉にぞっとした。もしも？ もしもって何だ？

だけど、モニタの向こうの相手は、毛ほどの動揺も見せなかった。いつもと同じ、微笑みまじりの温かい口調で、アドヴァイザーは言った。

『あなたの場合、まだ婚姻から一年未満ですから、もしものときには、次の配偶者を迎える権利があります。説明は受けておられると思いますが』

頭が真っ白になった。

気がついたときにはモニタを殴りつけていた。手の甲がしびれるように熱かった。痛みはいつとき感じなかった。画面の向こうで、アドヴァイザーが言った。『どうされました？ 大丈夫ですか？ 医療機関へ連絡しますか？ ……』

合成樹脂のディスプレイには、ひび一つ入っていなかった。めちゃくちゃに壊したところで、貸与された備品を壊したというので、未来の僕に修理費用の請求書が回ってくるだけの話だっただろうけれど。

だけど本当に堪えたのは、その話を委員長にしたときだった。

本当は直接会って話をしたかったけれど、体調のよくないルーをひとりにしたくなかった。ル

一がまだしばらく起きてきそうにないのを確認して、苦手な通信で、僕は弱音を吐いた。

委員長は僕の話のひとつお聞き終えると、小さく肩をすくめた。

『まあ、たしかにあの融通の利かない話しぶりには、苛々するけどな。そうかっかするなよ。相手はA Iなんだぜ』

そんなことはわかってる。怒鳴りそうになったのを、僕はかろうじて飲み込んだ。

『それに、実際、ちゃんと考えておいたほうがいい』

「――何を」

聞き返した僕の声は、震えていなかったらうか。

委員長はしかつめらしく眉を寄せた。『もしものことをだよ』

こんなことは言いたくないが、と彼は続けた。どんなことにしたって、備えとか心の準備とかいうものは、やっぱり大事だろう。あの話し方には苛つくが、アドヴァイザーのいうことにも一理ある。まだ一年目なんだ。いざとなれば取り返しはつく。……

僕はエイリアンでも見るような目をしていたと思う。「本気で言ってるのか、委員長」

委員長は肩をすくめた。それは、教室で日頃よく見ていたのと同じ仕草だった。そこにあったのは、お前の方こそどうしたんだ――とでも言いたげな表情だった。

事実、委員長は当たり前のことを言う口調で、言った。

『しっかりしろよ。最初から判ってたことだろ』

気がついたときには、一方的に通話を打ち切っていた。

そのまま僕は、長いこと端末の前に立ち尽くした。壁に投影した地球の画像が、青い光をリビング全体に投げかけていた。家の中は静まりかえって、スリープしている端末がかすかな動作音だけを立てていた。

しびれたようになった頭の片隅で、変に冷静に、委員長は何を言っているんだろうと思った。自分の耳がどうかしたんじゃないかとも考えた。ある日目が覚めたら、現実世界とそっくりの異次元に迷い込んでいた――それくらい、言われたことが認識できなかった。

落ち着けよ、彼はごく常識的なことを言っている――自分に向かって、そんなふうには言い聞かせようともしてみた。

無理だった。結婚前の、ルーに会う前の僕だったなら、納得したかもしれない。だけど、もう無理だった。

どれくらい端末の前で立ち尽くしていただろう。背中にルーの手がそっと押し当てられて、ようやく我に返った。

「どうしたの？ ひどい顔色してる」

何でもないよ、と僕は言った。うまく微笑むことが出来たとは、自分でも思えなかった。冷たい、いやな汗を背中いっぱいにかいていた。

「嘘」とルーは言ったけれど、以前よくそうしていたように、僕を問い詰めようとはしなかった。ただ心配そうな目をして、僕の袖を引っ張っていた。

しっかりしろ。胸のうちで、自分に言い聞かせた。委員長の言葉はまるで納得できなかったけれど、そこだけは、本当にそうだと思った。僕がしっかりしなくてどうする。

心配しているはずの相手から、逆に心配されたことが、たまらなく恥ずかしかった。僕はどうか微笑みを深めて、嘘を重ねた。「ほんとに大丈夫。何でもないんだ、ちょっと友達とけんかになっただけ」

その通話からずいぶん経ってから、ようやく気づいた。委員長の言っていたことは、たしかに本当のことだった。もちろん、何もかも、はじめからわかっていたんだ。

ルーが、運が良くても二十歳までは生きられないだろうということ。薬の適合の問題がなかったとしても、病気なんだから、いずれ彼女が苦しむのはわかりきっていたこと。僕は最初から、知っていたはずだ。知っていて、考えないようにしていた。

女というものの全体が、そもそもそういう宿命を背負っているのだと、そんなふうにおもうとしてみた。ルーだけが苦しいわけではないし、彼女らの苦しみは、たぶん誰のせいでもない。

その考えは、考えたその瞬間には、いくら僕を楽にしてくれた。つまり、彼女の苦痛に対して、僕には責任がないという考え方だ。

だけどそう考えたこと自体が、今度は僕の良心を苛み出した。だからなんだっていうんだ。ルーが薬の副作用に苦しむことも、長くは生きられないことも、僕のせいではないかもしれないけれど、だからといってルーの苦しみがなくなるわけじゃない。ひとりだけ気が楽になって、女の子たちは大変だなあなんて、他人事のつもりか。

他人事。

その単語は、僕を暗澹たる気分にした。他人事、遠い世界の出来事という、その気分を作り出すために、彼女らはわざわざ嚴重に男たちの社会から隔離して育てられるんじゃないのか。

建前としては、例の病気のために隔離されているということになっている。授業で習ったとき、僕はその説明を疑わず、額面通りに受け取った。だけど、果たして本当にそうだろうか。

男は発症しない病気だということに、わざわざ隔離することの意味が、どれだけあるというのか。もちろん同じ施設に女の子たちがまとめて暮らしていたほうが、治療の都合はいいだろう。だけど本当にそれだけなら、同じ建物にさえ集めればそれで事足りるんじゃないのか。わざわざセンターなんていう大がかりな施設のために、独立したコロニーをいくつも作って、けして男たちの目にふれないようにする必要なんてないじゃないか。

ぜんぶ、彼女らが生身の人間だということを、僕らに気づかせないためなんじゃないのか。女というのは、男とは別の、遠い世界の生き物だと、そんなふうに関心させるために、隔離しているだけじゃないのか。現に僕らは卒業するそのときまで、女の子たちの存在を、神秘のヴェールの向こう側にあるものだななんて、のんきに捉えていた――

すべてを社会のせいにしたがっている自分に気づいた瞬間、どっと自己嫌悪が押し寄せてきた。そのシステムに乗っかって、自分に都合のいいものしか見てこなかった自分は何だ。

あれはたしか、卒業年次に入ったばかりの頃だったと思う。授業中、普段は温厚な歴史の教

師が、いやに皮肉な調子で言った。

「件のウイルスがなかったら、我々の歴史はどう変わっていたか」

皆さんはどう思いますかと、打って変わって静かな口調で、教師は続けた。

この老教師が歴史のifについて話をするのは、珍しいことではなかった。時には授業から脱線して、歴史の分岐点になったかもしれない「もしも」を、彼は追いかけた。

月は不毛の土地だ。地表を満たす大気もなければ、雨となって巡る水もない。近代の技術をもってしても、養える人口はたかが知れている。そういう場所で、もしあのウイルスが発生しておらず、我々の社会がもとの形を残していたとしたら、どうなっていたか？

「果たして月人類が争いを捨てることはできていたか？」

月の歴史に、かつて大小のデモや諍いがなかったわけではない、とも教師は言った。まして、人口がいまよりもっと増えていたなら。水や食料を奪い合わねばならないような状況が起っていたら？ そういう「もしも」について、彼は淡々と語った。

ともすれば僕らはいまだに争い、互いに殺し合っていたのではないか？ かつて我々の祖先が地球に暮らしていたころと同じように。こんな不毛の土地で、武器を使った殺し合いなんかを繰り返せばどうなる。都市内の空気が汚染されたら？ 隔壁に穴が開きでもしたら？

「天敵の存在しないこの土地で、我々に降りかかった最大の災厄であるはずのウイルスが、あるいは我々の社会を維持する役割を果たしているのかもしれない」

生物というのはよく出来ている、と教師は小声で囁いた。教室のうしろのほうにいた連中には、聞こえなかったのではないかと思うくらいの声だった。

僕は机にほおづえをついてその話を聞きながら、黙って眉をひそめた。つまり、先生はこう言いたいわけだ。我々の本能が、種の保存のために、件のウイルスを生み出したのではないかと。

「そう考えれば、ずいぶんと皮肉な話です」そう教師は締めくくり、脱線を終えて授業の続きに戻った。

この意見に嫌悪感をあらわす生徒と、感銘を受けたようすの連中と、どちらが多かっただろうか。

僕はというと、ひどく醒めた気分だった。種の保存？ 生存戦略？ もしそうだとしたら、あまりにもできすぎだと思った。実際には、絶滅の危機に瀕した僕らの社会が、どうにか危ういところで新しい状況に適応できたに過ぎないだろう。ぎりぎりの崖っぷちに立たされて、手段を選んでいる余裕がなくなった。クローンが非人道的だなんて言っていられない。戦争なんかやっている余裕はどこにもない。

だけど頭の片隅では、妙に感心してもいた。たしかに僕らの社会は、よくできている。戦争もなく、内乱もなく、飢えることも、渴くこともない。誰しも小さな不満はあるけれど、それが爆発するほどではない。なるほどそう考えてみれば、たしかに絶妙なバランスだった。

そのバランスが何の上に成り立っているかなんていうことは、考えもしなかった。

ルーがときどき体調を崩すようになって、自然、僕はひとりで本を読む時間が増えた。ルーが眠っているときにリビングで読むこともあったし、彼女のそばで読むこともあった。公園でも散歩したほうが、気晴らしにはよかったかもしれないけれど、彼女を一人にするのはいやだった。

気晴らしだったから、軽い読み物が自然と多くなった。本当なら自分の将来のために、技術書でも読むべきだったんだろうけど。

あるとき、適当にライブラリから掘り出してきた中に、玩具の歴史について紹介されたテキストがあった。いつもだったら興味なんか持たなかつただろうけれど、生まれてくる子供のことが頭にあって、なんとなく手が伸びた。

玩具といっても、子供に持たせる人形だとかゲームのたぐいだけではない。民芸品だとか美術品だとか、とにかく遊び心が入っているものは、何でも広く紹介されていた。映像や図なんかもずいぶん添えられていて、それを眺めているだけでもけっこう楽しい。

その中に、ひとつ妙なものがあつた。水槽だ。

これを玩具というのはどうなんだろうと思うのだけれど、ともかくそこでは、玩具の一種として紹介されていた。球形をした、ガラスだか樹脂だかの器。

水だけを入れてもしかたがない。中に魚を入れて鑑賞するためのものだという。生き物を飼う、ということそのものが、まず新鮮だった。図では水草のそばに、赤い小さな魚が尾をひらめかせて泳いでいて、こうして見る限りは、なかなかかわいらしい。

興味深く眺めているうちに、ひとつ、妙なことに気がついた。その水槽には穴がなかった。完全な球形で、魚を入れたり出したりするような口がどこにもない。それで詳しい説明を表示させた。

閉鎖系という言葉が、そこには使われていた。完全なる循環。水槽は完全に水で満たされているわけではなくて、上には少しだけ、空気の層が見えている。光を当てれば、中の水草が酸素を作る。魚が水草を食べて、その糞を養分にして、水草が育つ。光さえ充分に当てておけば、餌の世話をする必要がない。だから水槽には口がない。何もしなくても、魚が死ぬか水草が枯れるまで、半永久的に機能し続ける。

小さなひとつの生態系が、この水槽の中だけで完結している。はじめ、僕はその説明を好奇心を持って読んだ。よくできているものだなと感心さえした。

だけどある瞬間、ふっと、いやな気分になった。図の中の魚が、何かに重なつたのだ。

――何か、なんていうあいまいな言い方はよそう。僕には水槽の中の愛らしい魚が、ルーと重なって見えた。

ほんものの広い海を知らずに、小さな水槽の中で飼われている、きれいな魚。女の子だけを集めたセンターの中で、まともな教育も受けずに暮らしている女の子たち。

テキストを閉じたあとも、しばらくその考えは頭の隅をちらついていた。その日の夕食をルーと向かい合って食べながら、僕はなんとなく、彼女と目を合わせきれなかつた。

だけど夜中になって、眠れずに寝返りばかり打っている寝台の中で、唐突に気がついた。僕だって、あの水槽の魚とどれほどちがうっていうんだらう？

この月面都市に閉じ込められて、決められたいくつかのエリアだけで暮らし、都市の外に出ることは生涯有り得ない。地球からの情報は遮断され、与えられる知識は制限されている――

月面都市の掲げる理想を要約すれば、そう、あの水槽と同じことになる。コロニーには農場プラントがあり、樹木が植えられ、水は循環して浄化され、再利用される。人口と作物のバランスは厳密に調整され、外から物資を補給しなくても、おおむねこの中だけで必要なものがまかなえるように管理されている。

寝具に包まって、なかなか寝付けないまま、あの水槽の説明を思い出していた。完結した小さな世界。あとから補給は出来ないのだから、魚が増えすぎては飢えてしまう。それで雄だけとか、雌だけとかを、一匹か二匹だけ入れるのだ。だから完全循環と謳い、半永久的に機能するといいつつも、中の魚はいずれはすっかり死に絶える。

僕らはどうだ。地球では、おそらくすでに外宇宙を目指す宇宙船がいくつも建造されているだろうに、月面都市では地球との間を往復するためだけの小さな船さえ、もはや自力では作れない。作ったところで意味がないから誰も作らないでいたら、そのうちに技術は忘れられてしまった。

これまでは、そういうものだと思っていた。知識として頭に入っただけでも、たいして疑問に思いもしなかった。

だけどこんなふうに、昔のことが書かれたテキストを読みつないでいくと、いつのまにか察せられるものがある。いまよりも工学が進んでいた時代が、月にはあるという、シンプルな事実。一度考え出せば、むしろ普段はそのことを意識しないでいられることのほうが不思議に思えるくらい、それは自明のことだった。

いや、不思議というほどのことでもないのかもしれない。衰退を、誰も好んで語りたがらないというだけのことで。

閉ざされた世界の中で、僕らはゆっくりと衰退しつづけていくんだらうか。

そうだとすれば、この閉塞した世界で人類が生きつづけてゆくことに、どれだけの意味があるんだらうか。

都市という水槽の中に飼われている僕ら。さらにその中に設えられた、もっと小さな水槽の中に閉じ込められている、女の子たち。

地球に暮らす人々は、僕らの状況をどれくらい知っているんだらう？ 彼らは僕らのことをどんなふうに考えているんだらう。同情を持って夜空の月を仰ぐのだから。それともできるだけ考えないようにしているのか。もしかしたら、詳しいことを教えられてもいないかもしれない。女の子たちの存在をヴェールの向こう側に押しやって、直視しないようにしていた僕らのように。

その夜、とうとう僕は眠れなかった。

もちろん、ルーは始終体調を崩してばかりいたわけじゃない。薬を飲む日は決まっていて、そのほかの日にはたいてい以前と同じように、元気にしていた。いや、むしろ生まれてくる子供のことを楽しみにしている分、前よりもはしゃぐことが多いくらいだった。

子供に与える玩具のことや、赤ん坊の世話の仕方なんかを、僕らは飽きずに話しあった。小さい子供と暮らすときの注意事項について、あまりにも彼女が次から次に羅列するものだから、育児が始まる前から、僕の頭の中はすっかり心配ごとで一杯になってしまった。

僕らは本当に大丈夫なんだろうか。うっかり赤ん坊にけがをさせたり、思わぬことで死なせてしまったりしないだろうか（もっとも、あの忌々しいアドバイザーが子供の成長に合わせて、適宜アナウンスを流してくれることになってはいるんだけど）。

二人で手をつないで、外を散歩することもあった。公園で、親子連れの人々に挨拶をしたりもした。いまのうちから仲良くしておかなくちゃと言いだしたのはルーだった。いつか子供のことで、彼らに相談することもあるかもしれないからと。

彼女は賢い。学校で習うような知識は乏しいかもしれないけれど、僕よりもずっと賢い。ものを知らないことと、愚かなことは違うんだということを、僕はこのころようやく学んだ。

ルーとの散歩は楽しかった。公園の天井が高いことも、光が燦々とまぶしいことも、それまでは何とも思っていなかったし、鳥の声を模したという環境音楽も、むしろ不自然で無駄なもののように思っていた。それなのに、単純なものだ。彼女と二人だと、それらの要素がどれも、心を浮き立たせてくれるものになった。

僕らはよく散歩中に、子供の名前について話し合った。そのころはまだ子供の性別を知らされていないから、どちらの場合にもそなえて、両方考えておこうということになった。僕が提案する名前を、ルーはセンスがないといって、どれもあっさり却下した。それでまたひとしきり喧嘩になった。けどこのころには、僕は、彼女との喧嘩を楽しんでいると思っていた。

「そういえば君、最初のころは、ずいぶん大きな猫を被ってたね」

ふてくされているルーに、からかうつもりでそう声をかけると、彼女は恥ずかしそうに唇をとがらせた。「だって、セオがどんな人か、まだわからなかったし」

怖い人だったらどうしようと思って、不安だった。そんなようなことを、ルーは言った。僕はそれを聞いて、一瞬言葉に詰まった。

僕だってもちろん彼女に会うまで、不安ではあった。自分の花嫁になる女の子がどんな相手かわからず、可愛かったらいいなんて期待しながら、いやな子だったらどうしようなんて、よけいな心配をしていた。けど彼女のほうが、もっと不安だっただろう。だってルーはこんなに細くて小さくてやわらかい。たとえばもし相手が僕じゃなくて、もっと乱暴でがさつな男で、彼女を殴ったりするようなタイプだったなら――自分で想像しておきながら、僕はその自分の考えに腹を立てた。

ひとしきり腹を立てたあとで、ちょっと嬉しくなったりもした。被っていた猫を早々に脱いだのは、彼女が僕を信頼してくれたからだろうと、そう思い当たったので。まったくルーが言うとおり、男は単純だ。

散歩といえば、この時期にちょっとした事件があった。

僕らはいつものように、ふたりで昼下がりの公園を歩いていた。そこに追いかけてこをしていた男の子たちが、ろくに前も見ずに走ってきて、中のひとりがルーにぶつかった。

彼女はとっさに悲鳴を上げたけれど、すぐに満面の笑顔になって、威勢よく腕まくりをした。そうしてその子の親らしき男女が駆け寄ってきて謝るよりも早く、男の子らの遊びの輪に飛び込んでいった。止める間もなかった。

そんな大人は、これまで周りにいなかったんだろう。中には面食らったようすの子もいたけれど、彼女がどうやら本気とみるや、彼らはあっという間にこの大きな仲間を受け入れる気になったようだった。

やけに大きな子供がいるなあなんて僕がからかっても、ルーは楽しそうに笑い声を上げて、それこそ子供顔負けのバイタリティで、公園中を走り回った。こんなにはしゃいだら体に触るんじゃないかと、こっちが心配になるくらいに。

それでも彼女があんまり楽しそうだったから、僕は少し離れたベンチに掛けて、ルーの気が済むまで待つことにした。後になって思えば、僕も一緒になって遊べばよかった気もする。いや、無理だったかも。彼女のように三つや四つの子供らと対等につきあったり、知らない子たちから一瞬で仲間と認めてもらえるような才能は、僕にはなさそうだから。

もともと彼女は子供が好きで、いつも散歩中、よその子供たちを見ては羨ましそうに目を細めていた。生まれてくる僕らの子供のことに思いを馳せているのだろうと思っていたけれど、もしかしたらそれだけじゃなくて、ルーはずっとあの輪に入りたかったのかもしれない。

きゃーっ、と楽しげな悲鳴が上がって、見ればルーが床に転がった男の子の脇腹を、両手でくすぐっているところだった。周りの子供たちもおもしろがって、彼女に加勢していた。その光景を、僕は目を細めて見守った。なにかと憂鬱な物思いの増えていた時期だっただけに、彼女の明るさが、大きな救いのように思えた。

その男が公園に入ってきたのは、いつだったんだろう。

ある瞬間、何となく周囲のざわめきの質が変わったような気がして、僕はあたりを見回した。ひとりの男が、子供たちのいるほうに歩いてきているところだった。

連れのいない男が、ひとりで公園にいる。それ自体がかなり珍しいことでもあった（僕がいつか委員長と待ち合わせをしたときにも、それで居心地が悪かったくらいだ）。ひどく痩せて、顔色の悪い男だった。歩き方もどこか不規則で、どこか具合が悪いんだろうかととっさに考えたくらいだった。

声をかけるかどうか迷っている間に、男は子供たちのそばを通り過ぎかけて、そこで唐突に足を止めた。何かに驚いたようすだった。充血した目を瞠って、男は立ち尽くしていた。

何か異様な気配を覚えた僕が、ようやくベンチから腰を浮かせたとき、男が急にルーに駆け寄って、彼女の手をつかんだ。

「――あんだだ」

ルーがかすれた悲鳴を上げた。周囲の家族連れは、みな凍り付いたようになっていた。男はル

一に向かって、怖がらないでくれだとか、やっと会えただとか、そういうようなことを繰り返した。僕はようやく追いついて、男の肩をつかんだ。着崩れたシャツの下の体の感触は、遠目に見た印象よりもさらにやせ細っていた。

何をするんだ。彼女から手を離せ。そんなようなことを、僕は言ったと思う。喧嘩慣れしているわけではなかったから、声を荒げるのに躊躇しなかったといえば嘘になってしまう。男はいらだたしげに僕の手を振り払って、ますます強くルーの手をつかんだ。

「おい！」

だけど結果的には、もみ合いになる前に片がついた。警備用のロボットが飛んできたからだ。

そう、そいつは宙を飛んできた。手のひら大の、丸いタイプだった。銀色にぴかぴか光る、ガードロボット。そういうものがあることは知っていたけれど、じかに目の当たりにしたのは、このときが初めてだった。それが男の首筋をめぐらして、まっすぐ飛んできた。

男の手からとつぜん力が抜けて、がくりとその体が崩れ落ちた。周囲で悲鳴が上がった。ロボットのマイクが起動して、AIの、アドヴァイザーによく似た声がアナウンスした。『鎮静剤です。みなさん、どうか落ち着いてください。すぐに警備員がやってきます。不審者に近づかず、あわてないでそれぞれの家に帰ってください。……』

その声ではっとして、僕はルーの肩を抱きよせた。

「大丈夫？ ケガはしてない？」

「何ともない……怖かったけど」

ルーはちょっと青ざめてはいたけれど、それでもパニックにはならず、しっかりしていた。僕の袖を握ったまま、おそろおそろ倒れている男を見下ろして、彼女は不安げにまばたきを繰り返した。

「なんだったのかな」

「さあ……」

崩れ落ちた男は、ほとんど体を投げ出すように、ぐったりと地面に転がっていた。死んでいるのではないかと思うほど、ぴくりとも動かなかった。顔色が悪く、ひび割れた唇が、ぞっとするほど青ざめていた。

もしかして、本当に死んでいたんじゃないかと、後になって何度か考えた。益体もない、子供じみた想像かもしれない。AIは鎮静剤だと言った。だけどそれが嘘でないと、誰に証明できる？ 僕らは本当に、月の行政機構を信じ切っているのか？

男の様子は尋常ではなかった。頭がおかしい、といえば差別的表現になるんだろうか。少なくとも精神の平衡を欠いているように、僕には見えた。彼はどこからやってきたんだろう？ どこに連れて行かれてしまったんだろう？

心のどこかであの男に同情し、行政への不信感を覚える一方で、すみやかな警備ロボットの出勤に安堵していたのもまた確かだ。とにかくルーに危害が及ばなくてよかった。情けない話だけれど、僕だけでうまく対処できていた自信はない。

僕らは手をつないで、黙りがちに家に帰った。歩きながら、あの水槽のことが、頭の隅をちらついた。水槽は閉ざされた狭い世界かもしれないけれど、その一方で、たしかに魚を外界の危険

から守ってもいるのだ。

その日、薬を服用した直後でもないのに、彼女がやけに沈んでいるように見えたのを、僕ははじめ、いつもの気まぐれかと思った。

もともとルーは、気分の浮き沈みが激しいほうだ。機嫌が悪いときは、たいしたわけもなくぶすっとしていたりする。

だけどその日の態度は、いつもの不機嫌とはどこことなく違っていた。

気分が悪いのかいと訊ねたのが、朝食のときのこと。ううん、何ともないと微笑んだ彼女の言葉を、僕は信じた。それまで、薬の副作用以外でルーが体調を崩すことはなかった（少なくとも、僕にはそう見えていた）。

どんなに怒ったり泣いたりしても、いつの間にかすっかり忘れてけろりとしているのが彼女の常だったから、そういうものだと思いこんでいたのもある。

おや、今日はなかなか機嫌が戻らないなと思ったのが、昼前のこと。

「本当に、どこも悪くないのかい」

彼女はやっぱり微笑んで、首を振った。それから、心配してくれてありがとうと囁いて、甘えるように僕の肩に頭を乗せた。

その日の夜更け、何の前触れもなく、唐突に目が覚めた。普段はあまりないことだった。目をこすって体を起こすと、ルーと目が合った。彼女は常夜灯の明かりに顔の左半分を照らされて、寝台の上に座り込んでいた。

「まだ起きてたのか」

聞くと、彼女はまぶたを伏せた。「眠れなくて」

「珍しいね」

言うてから、僕は不安になった。「やっぱり君、どこか具合が悪いんじゃないのか」

この日三度めの、同じ質問。僕の間抜けさを笑うがいい。

「友達が死んだの」

彼女のささやきは、夢の中から浮かび上がってきたように聞こえた。

僕は聞き間違いじゃないかと思って、目をしばたいた。ルーは暗闇の中を見通すようなまなざしで、そっと続けた。

「いやな子だった。いつも張り合ってきてね、試験でも朗読でも、みんなと遊んでるときでも、わたしのほうがちょっとでもその子よりよく出来たり、誰かに褒められたりしたら、不機嫌になって。いやがらせばかりしてくるの。喋っててもつかかってきて、口げんかはしょっちゅう。とっくみあいのけんかも何回もしたし、ぜったい仲良くなんてなれないって思ってた」

かすかな声で、彼女はいった。「でもね、卒業のときになって、その子がわあわあ泣いて」

僕は口を挟めなかった。ただ彼女の手を握って、耳を傾けることしかできなかった。

「ぎゅっ、て眉間にしわを寄せてね。怒ってるみたいな感じでつかつか歩いてきたから、最後の最後までけんかをふっかけてくる気かと思ったの。最後くらい、気持ちよく別れたらいいじゃないって。それでわたしが身構えてたら、いきなり抱きついてきて。それでわたしの背中にしが

みついて、わあわあ泣いたの。ちっちゃい子供みたいに。なにこの子、なんで泣いてるのって、最初は思ったんだけど」

もう会うこともないんだなって思ったら、わたしもだんだん悲しくなってきた。ルーは言って、ちょっと言葉を切った。そして何かをためらうような間のあとに、そっと続けた。

「それでやっと気づいたんだけど、最初のころからずっと一緒だった子って、もうその子しかいなかった」

僕はその言葉の意味を、勘違いした。僕らのスクールでも、二年おきにクラス替えがあって、何度も同じ組になったやつや、ぜんぜんクラスが重ならないやつがいたから。彼女が言っているのも、そういう意味だと思ったんだ。

「もう誰も、残ってなかった」

ぽつりと落とすように言って、彼女は微笑んだ。

なぜ彼女がそこで笑うのか、僕にはわからなかった。友達が死んで悲しいと、彼女はいまそういう話をしているのだと思うのに、嫌いだった子が死んで気味がいいなんて、そんなことを思っているようにはとても見えないのに、それだというのに彼女は微笑んでいた。いつもくだらない喧嘩ではすぐ泣く彼女なのに。

もう泣けないのだと気づいたのは、時間が経ってからだった。

罹患率、百パーセント。十五歳までの致死率、八十なんかパーセント。その数字の意味を、僕はわかっていなかった。頭で知っていただけで、何ひとつ理解していなかった。

彼女がしばしば僕に向かってセンター時代の友達のことを話すのに、その中の誰かと連絡を取り合ったりする様子がないことも、僕はそれまで、疑問にさえ思っていなかった。

友達の死を見送りすぎて、彼女がもう泣けなくなっていたんだなんて、そのときには思いつきもしなかったんだ。

翌日、彼女はやっぱり微笑んで、僕におはようといった。

悲しみは目の端に残っていたけれど、それでも、いつも通りの彼女だった。朝食の間、ひっきりなしにおしゃべりをしてから、食べ終わるなり端末の前に座って、ルーは作りかけていた絵本の続きにとりかかった。

この頃になってようやく僕は気づいたのだけれど、彼女は絵がうまかった。ライブラリからひっぱりってくる出来合いの絵本ではなくて、彼女は自分が考えた物語を、自分の言葉で書いて、そこに絵を添えた。

動物がたくさん登場する物語だ。正直に言えばストーリーは荒唐無稽で、論理性なんかあったものじゃなかったけれど、ルーの空想が混じった色とりどりの動物たちは、見ているだけで気分が明るくなった。

それは、生まれてくる子供のための仕事だった。画面に向きあって絵を描く彼女の横顔は、それまでのどんなときより真剣だった。友の死の向こうに、彼女はすでに、新しい命を見ていた。

僕はずっと、彼女のことを勘違いしていた。ルーのことだけじゃない。女というのは、壊れや

すくてすぐに死んでしまう、弱くて悲しい生き物なのだと、そんなふうに頭から思いこんでいた。可哀想なもの、護ってあげなくてはならないものだと。

僕はいったい、何を勘違いしていたんだろう。

友の死に耐え、薬の副作用に耐え、わずか数年の後に迫っている己の死の影に耐えて、新しく生まれてくる命のために、精一杯の仕事をしている彼女が、自分よりも弱い生き物だなんて、どうしてそんな馬鹿な思い違いを出来たんだろう。

まれに、生きのびる女性もいるのだという話は、その少し後にルーから聞いた。

その多くは、幼いうちに、病巣のすくうはずの器官を、きれいに取り払ってしまうのだという。だけどそうしたところで、必ずしも長く生きられるとは限らない。その手術のせいで命を落とす子もいるし、そのときには無事でも育ちきれずに、あとで死んでしまう子もいる。

あるいは手術をしなくても、発病したあとに生き延びる者も、稀にはいる。だけどそれは、ほとんど奇跡のような話だ。

何と言っているのか、まるでわからなかった。まともな相づちも打てず、僕はただうなずきながら、彼女の話聞いた。

手術をするか、しないか。どちらの選択肢をとっても、確実なことはひとつもない、残酷な二択だ。

誰がその手術を決定するのか、ルーは話さなかった。僕も訊ねなかった。本人の意思なのか、親が望むのか。答えがどちらでも、知れば胸苦しくなるだろう。

そんな話は、教科書には載っていなかった。大人たちは教えてくれなかった。誰も語りたがらない現実。神秘のヴェールの向こう側。

その話が出たのは、僕が天文学の授業で習ったことを、彼女に話して聞かせていたときだった。

初等部のときの担任だった。厳格で、頑固で、融通の利かないその教師を、僕らは煙たがっていた。小うるさい叱責の腹いせに、本人のいないところでおかしなあだ名をつけて、替え歌にしたりなんかもして、笑い話の種にしていた。いかにも子供のすることだ。

そういう余談を、ルーがやけに不思議そうに聞いているなと思った。話が一段落したところで、彼女は首をかしげた。「ずいぶん厳しい先生なのね？」

彼女にとって教師というのは、小うるさいことをいったり厳しく叱ったり、そういうことをしないものらしかった。生徒が授業を聞いていようが、聞かずにほかのことをしていようが、センターの教師はまるで気にしないというのだ。生徒が授業を抜け出してどこかにいっても、嘆きも呆れもしない。教師たちは優しいか、不熱心かのどちらかだという。

僕はそれまで単純に、彼女が特に不真面目で勉強が嫌いな学生だったのだと、そんなふうに思っていた。なんておめでたい勘違いだったんだろう。

彼女の話をしているうちに、僕の腹の底には、苦くて冷たいものが沈んでいった。センターの教師が甘い理由に、察しがついたからだ。

教師が生徒を叱るのは、そこに期待があるからだ。もちろん、単に虫の居所が悪くて八つ当たりをしているときもあるだろう。だけど基本的には、厳しくすることがその生徒のためになると思っているからこそ、叱責するはずだ。少なくとも建前ではそういうことになっている。

だけど、まもなく死ぬのが決まっている者に、いったい何の期待をするだろう？ 厳しく知識を教えこんだとしても、十年先にはそのほとんどが無に帰すと、わかりきっているのに。

「だけど、そういえば、ひとりだけね」

ルーはふっと思い出したように、そう言った。「ひとりだけ、厳しい先生がいたの」

文学の教師だったと、彼女は話した。生徒に課題を出し、ひとりひとりを名指しで問いに答えさせた。不熱心な生徒を叱責し、向上心のある生徒を手放しで褒めた。当然のことながら、女の子たちからは煙たがられていた。

「こんなもの勉強したって、何になるのって、みんな思ってた」

ルーは言って、ふっと、遠くを見るような目をした。「あの先生、どうしてるのかなあ」

それで、さっきの話になった。まれに生き残って大人になる、女たちのこと。

そうしたわずかな大人の女たちは、センターに残って寮母や教師になり、新たに生まれてくる女の子たちの世話をするのだという。

それはどんな暮らしだろう。

可愛らしくて、わがままで、すぐに泣いたり怒ったりする、女の子たちの集団。みんながみんなルーみたいだとは限らないけれど、きっと賑やかで騒々しいだろう。それが月日を追うごとに、ひとり、またひとりと欠けてゆく。

いなくなった生徒の顔を、彼女らと交わした会話を、教師たちはどれくらいのあいだ、覚えていられるだろうか。それは、どんな気分のすることだろう。生き延びられたことは、彼女らにとって、果たして幸運と呼んでいいことだろうか。

それでも僕は、ルーがそうになってくれたらいいと思った。

その可能性がどんなに低いかは、考えたくもなかった。奇跡のような確率かもしれないけれど、それでも、現に誰かの身の上に起こっている奇跡だ。それが彼女であってはならない理由がどこにある？

だけどその願いを、口に出しては言えなかった。口にする言葉に、この頃、僕は慎重になっていた。

その話を聞いてもうひとつ、ルーのこと以外に、こっそりと願ったことがある。生まれてくる僕らの子供のこと。

どうか、男の子であってくれ。

こちらの願いも、もちろんルーの前で口に出せるはずがなかった。

ルーの父親は、どんな気分だっただろう。

願いが叶った、と言っていいのかどうか、僕らの子供は男の子だった。名前はパーシヴァル。ルーが決めた。彼女が好きな物語の、登場人物の名前からとったそうだ。

係官から子供の性別を知らされたとき、ルーは喜んだ。その喜びがどういう意味のものかだなんて、僕は確かめなかった。

もちろん僕も喜んだ。自分の喜びようがルーの目に過剰なものと映っていないかどうか、喜んだあとでこっそり心配した。

性別を知らされた次の日、委員長と話した。

あれからずっと気まずくて、怒りが冷めて冷静になったあとも、なかなかきっかけをつかめずにいた。だけど子供が生まれてしまえばきっと忙しくなるし、そうなればそのまま音信不通になりそうな気がした。いつか迷って、思い切った。

連絡を取ると、彼は前と変わらない飄々とした調子で通信に出た。この間はおめんとは僕は言わなかったし、彼のほうでも何事もなかったように振る舞った。

『久しぶりだな。変わりないか？』

委員長はそんな言葉を選んだ。うなずきながら、便利な言葉だなど、皮肉でなく思った。そっちの嫁はまだ生きてるかとは、訊けないだろうから。

「そっちは？」

『まあ、相変わらずだよ。このごろちょっと、喧嘩が増えた』

委員長はそんなふうに関をすくめて、それからにやりとした。

『もしかして、そっちももうじき生まれるころか？』

「あ、うん。もうちょっと先だけど……男の子だって。名前も決まった」

『へえ、おめでとう——ってのは、気が早いかな』

「いや……、ありがとう」

祝いの言葉が、やけに照れくさかった。そうだ、もうすぐ父親になるんだよなあと、いまさらながらそんなことを考えた。あれだけルーとまだ見ぬ我が子の話を繰り返し重ねてきたっていうのに、いまだになんとか、実感が伴っていないようなところがあった。

委員長のところは、もう半月ばかりで生まれるらしい。どこか戸惑ったような、照れたような声で、彼はそのことを告げた。

彼のところは、女の子だったそうだ。

聞いたとき、とっさに、気の毒にと思った。ほとんど口に出しそうになったのを、かろうじて飲み込んだ。

その言葉は違う、と思った。生まれてくる命に対して、そう言うのは違う。

彼のほうでも、ことさらそのことを嘆くような様子は見せなかった。もちろん、ただそう振る舞っていただけかもしれないのだけれど。

あるいは彼のことだから、すでに覚悟が決まったあとだったのかもしれない。

おめでとうを言い合って、僕らは通話を終えた。

パーシーが我が家にやってきてからは、もう、てんやわんやだった。

赤ん坊があんなにうるさい生き物だなんて、思わなかった。いや、もちろんそれまでにも、公

園を散歩していて、ぎゃあぎゃあ泣きわめく子供を見たことがないわけじゃなかった。けどまさか、こんなにひっきりなしに、時も所もかまわずに泣いてばかりいるとは思っていなかった。

あんなに朝に弱かったルーが、赤ん坊が泣けばどんな夜中でもちゃんと起き出して、半分寝ぼけていてもきっちり赤ん坊にミルクを飲ませ、背中をたたいてげっぷをさせた（僕が手伝おうとしても、パーシーは泣いていやがった。ひそかに落ち込んでいたのだけれど、どこの家でもはじめはそうなんだという話を、近所の先輩パパさんから聞いた）。

最初はそれでも、泣いていないときはほとんどじっと転がっているだけだったけれど、自力で動き回れるようになってからがまた騒動だった。

なんせ、ちょっと目を離すとどこにでもいくし、何でもかじる（僕は小型端末を一台ヨダレまみれにされてからは、持ち物の何を駄目にされても嘆かなくなった）。床だの靴だの、なぜよりによってそんな汚いところをというものばかりを舐めまわす。離乳食を食べるたびに、ルーにそっくりのふわふわの髪に、べっとりと食べ残しを絡ませる（こうなるとなかなか手に負えなかった）。勝手に転んで勝手に泣き出す。

なんとも理不尽な生き物だと思った。赤ん坊というやつは、理不尽だ。

だけど、不自然ではなかった。

こんな不毛の土地に、不自然な技術と膨大なコストを注ぎ込んでまで、人類が生き延びる意味が、どこにあるんだろう。子供が生まれる直前まで、僕はそんなふう感じていた。

だけどちいちゃな手でぎゅっとルーの胸にしがみつくとパーシーは、なにか、この世の中にある良いものだけが凝縮されて生まれてきたもののように思えた。この子がいつかは大人になってしまうのが、残念にさえ思えた（自分もいつかは赤ん坊だったことなんてすっかり棚に上げて）。

赤ん坊は、生きることに一生懸命だった。ミルクを飲むことにも、排泄にも、緑の目を瞞って両親の会話にじっと耳を澄まして何かを覚えようとするということにも、手をのばして目の前の僕らにしがみつくとともに、いちいち一生懸命だった。

命は、生きようとするものだ。どんな不毛な土地にあっても。僕はそのことを、この子に教えられた。

それからの日々は、あっという間だった。

パーシーのささやかな成長に一喜一憂するうちに、時間は流れるように過ぎ去っていった。あっという間すぎて、先のことを考える余裕もほとんどなかったくらいだった。

いつかやってくる現実を、忘れていられたわけではない。だけど、まだもう少し先のことだと思っていた。ルーがあんまり楽しそうにしていたから。小さなパーシーが、あまりにも生きる力にあふれていたから。

それとも、考えようとしなかつただけだろうか。ルーに出会う前、そうだったように、目の前にある事実から目をそらし続けていただけで。

僕は結局十五のころから、ひとつも成長していないのかもしれない。

二人か、多ければ三人の子供を持つ夫婦もいる。僕らも当然、つぎの子供のことを考えなかつたわけではない。ちびすけが二人になれば、育児の大変さも倍になるかもしれないけれど、こんな苦勞ならむしろ歓迎だった。

僕自身の将来のことをいうなら、最後の子供が五つになるまでは、育児に専念しなくてはならないわけだから、子供が増えればそれだけ進学が遅れる形になる。だけどそれもいいかと思っていた。ちょっとスタートラインにつくのが遅くなるだけのことだ。ルーも、できれば二人目がほしいようだった。

それでもいざ選択を迫られたとき、僕は反対した。

はっきりだめだと言ったわけではない。だけど心情的には賛成しがたかった。副作用に苦しむルーを見ていたからだ。妊娠が、彼女の体に負担をかけることを、知っていたから。

何度かルーがその話を切り出して、そのたびに僕らは話し合ったけれど、結局なしくずしになった。

彼女の希望を叶えなかつたことについて、僕には小さくない罪悪感があったけれど、そのかわりに、パーシーにうんと愛情を注げばいいと考えた。その考えは、やっぱり少しだけ、僕の気を楽にしてくれた。同時にそういう理屈を捏ねるのが得意な自分に対する、うっすらとした嫌悪感が、いつも胸のどこかにつきまとっていた。

つくづく思う。自分の行動を正当化するということについて、僕らはとても長けている。

ルーの描いた絵本は、パーシーのいちばんのお気に入りになった。僕のほうでもライブラリの中から絵本をたくさん探してきて、ひとつずつ彼に読み聞かせたけれど、どれも母親の手製のものにはかなわなかった。寝る時間になると、パーシーはよく、あの絵本を読むようにせがんだ。

寝室に小型端末を持ち込んで、ルーは毎晩のように自分で描いた物語を、腕のなかの息子に読みきかせた。そのたびにパーシーはいちいち歓声を上げ、不安そうに指をくわえて端末をのぞき

込み、声を立てて笑った。毎日毎日同じ話ばかり何十回も聴いて、よくも飽きないものだと思う。

ルーの空想の混じった物語の中で、動物たちは人間のよう口をきき、主人公に助け船を出したり、ちょっとした意地悪を仕掛けたりする。

のんびりやのゾウや、おひとよしのキリンや、気まぐれな猫が登場するたびに、パーシーはルーの描いた動物たちを、小さな指でさしてはしゃいだ声を上げた。それをききながら、ああ、この子に本物の動物を見せてやれたらいいのになと、そんなことを思った。

絵本の最後のページでは、主人公の男の子がキリンの背中に乗って、草原の小さな家に帰るのだけれど、パーシーはたいてい話がある場面にとどまらず、こてんと眠りに落ちてしまう。

ときには僕まで一緒になって寝かしつけられていることがあった。そういうとき、よくルーは翌朝になって僕のことを、ずいぶん大きな子供だとからかった。

みんなルーって呼ぶから、そう呼んで。出会ったとき、彼女は言った。

だけどそれは嘘だった。嘘だったことを彼女から聞いたのは、四年目のことだ。

僕らの可愛い息子はそのころ、広い家の中を駆け回ってしょっちゅう小さな傷をこさえ、そのうえかくれんぼが上手で、しじゅう僕らをはらはらさせた。どうして子供っていうのは、ああも狭苦しいところに躊躇なく頭から突っ込んで行けるんだろう？

そのパーシーがすっかり眠りこんだ真夜中、僕らのほうはというと、なかなか寝付けず、小声でとりとめもない話をしていた。話の長い隣の奥さんに捕まって辟易したこと、ルーの幼少時代を過ごしたセンターにもああいう教師がいたこと、パーシーが成長したらどんなふうになるだろうかということ（その姿を彼女が見ることはおそくないという現実から、僕はまたしても目をそらした）。

会話の最後、彼女はふっと、胸のつかえを振り落とすように、その小さな嘘を告白した。

「子供のころ、ほんとうはね、皆からマリィって呼ばれてたの」

それだけを言って、彼女は眠りに落ちた。

ルーの寝息を数えながら、僕は薄闇のなかで考えた。四年前、なぜ彼女はそんな嘘を吐いたのか。どうしてそれを何年も経ってから、いまさら告白せずにはいられなかったのか。説明はなかったけれど、なんとなくわかるような気がした。

その名前で彼女を呼ぶ人々のほとんどは、死んでしまったのだ。だから彼女は、その名前を捨てた。死の影を振り払って、別人として生きなおすために。

僕のルーは、嘘が上手な女だった。僕がそれを、知らなかっただけだった。

「君、少し痩せたかい」

僕がそう聞いたとき、ルーは思いがけないことを聞かれたというように、軽く目を瞠って首を

かしげた。それがパーシーが四つになる直前のこと。

「ほんと？ なら嬉しいな。ここ何年か、だんだん太ってきてたから……」

重労働の甲斐があったかな、とルーは屈託なく笑った。昼寝している息子の前髪を指で梳きながら。

そのころパーシーは、ますます元気に跳ね回るようになっていた。彼女は自分も子供みたいに、息子の遊びにいちいち全力でつきあった。嬉しそうな悲鳴を上げて逃げ惑うパーシーを捕まえては、くすぐったり羽交い締めにしたりして。喧嘩をするときも、ほとんど同じレベルでやり合うものだから、そばで見ていると、なんだか子供が二人いるみたいだった。

ルーは毎日よく笑って、よく怒った。たしかに重労働には違いなかった。だから僕も、その言葉を信じた。信じようとした。こんなに元気なんだから、彼女にはまだ時間が残されているはずだと。

だけどルーが倒れたのは、それからふた月もしないうちだった。

「どうして、隠してたんだ」

彼女がすぐに泣くことを、もう笑えない。寝台にぐったりと横たわるルーを問い詰めたとき、僕の顔は涙でぐちゃぐちゃだった。僕がしっかりするんじゃないか、なんて自嘲する余裕もなかった。

こんなに症状が進行していたんなら、もっと早くから痛みはあったはずだと、往診に来た係官は言った。

彼の口調は、A Iに負けず劣らず淡々としたものだったけれど、このときは、それに怒り出すひまがなかった。なんせ、自分自身に腹を立てるのに忙しかつたので。

病身の彼女を問い詰めてなじったりするのが、どんなに馬鹿げたことか、わかっていなかったわけではない。ないと思う。それでもこらえられなかった。

知ったところで、何も出来なかったかもしれないけれど、それでも、僕には言ってほしかった。

君が苦しんでいるのも知らずに、その横でのんきに笑っていた自分を、いま僕は、絞め殺してやりたいって思ってる。そんな気持ちなんて、君にはわからないんだろう。そこまで口に出しそうになった。どうにか堪えて飲み込めたことを、いまではせめてもの幸いだったように思う。

「クラスにもね、そういう子、いたの」

ルーはちょっと笑って、そう言った。「ちょっとでも長く、皆と居たいからって、我慢して、なんともないふりをしてね。中には、痛いのがいやだから、発病したらすぐ死にたいっていう子もいたけど……」

僕はうなだれてその話を聞いた。四つになったばかりのパーシーには、わけがわかっていなかっただろう。どうしていいかわからないような顔をして、寝台に横たわる母親の、腰のあたりにしがみついていた。

「隠してて、ごめんね」

ちょっとでも長く、あなたたちふたりと、一緒にいたかったから。ルーはそんなふうに行った。顔を上げると、彼女はやっぱり微笑んでいた。

どうして笑っているんだとは、もう思わなかった。彼女にとっては、当然やってくるはずの運命だったのだ。僕だけが、それを信じたがらなかった。

ごめんねと、もう一度言って、ルーは心配そうに見上げるパーシーの頭を、優しく撫でた。もとから血管の青く透ける、薄くて白い手の甲が、いっそう青ざめて見えた。

「手を、つないでいてくれる？」

その夜、ルーは遠慮がちに囁いた。まるで初めて出会った日の、大きな猫を被っていた頃の彼女のように、おずおずとした口調だった。

こんなふうにな彼女が僕に甘えてくるのは、どれくらいぶりのことだっただろう。僕はしっかりと彼女の手を握った。指は血の気が失せて冷たかった。母親を心配しながらもとうとう眠気に負けたパーシーを腕の中に入れ、もう片方の手でルーの手を握りしめて、夜通し彼女の寝息を数えていた。

ルーの眠りは浅かった。夜中に何度か目を覚まして、そのたびに、ルーは柔らかく微笑んで僕をじっと見た。

何度目に目覚めたときだっただろう。ルーは困ったように微苦笑して、パーシーを起こさないように、小声で囁いた。

「眠れないの？」

「眠くない」

彼女はふふっと息で笑った。「寝かしつけてあげようか？」

「あの絵本を読んで？ もうぜんぶ暗記しちゃったよ」

パーシーがもぞもぞと身じろぎをしたので、僕らは話をやめた。ルーの手が、布団のなかで僕の指を握り直した。

「セオ」

パーシーの寝息がふたたび深まるのを待って、ルーは囁いた。

「なに」

僕が囁き返しても、彼女は答えなかった。そのくせいつときすると、また小さな声で、セオ、と僕を呼んだ。そのたびに、何、と問い返した。彼女が名前を呼ぶばかりで、一向に何も言おうとしないので、つい僕のほうから訊いた。「痛む？」

「ううん、大丈夫」

彼女は答えた。嘘だなんて信じられないくらい、自然な口調だった。

「嘘つき」

言いながら、これじゃいつもの逆だと思った。嘘をつくのは僕で、それを問い詰めるのはルーの役割だったはずなのに。

目で笑って、彼女は囁いた。

「嘘じゃないよ」

ルーは再び眠りに落ちた。その寝息のリズムが、パーシーのそれとだんだん重なっていくのを聴きながら、いつの間にか彼女の手がいつものように温まっていることに気がついた。

嘘つき。もう一度口の中で呟いて、目を閉じた。それから僕はきれぎれの浅い眠りについて、麒麟の出てくる夢を見た。

彼女が症状を覚えていながらも僕に黙っていた理由は、すぐにわかった。その翌朝には、前の日とは別の係官が僕らの家にやってきて、彼女をセンターへつれてゆく準備をはじめたからだ。

「待ってください。こんな急に」

僕が食ってかかっても、壮年の係官は、平然としたものだった。きっと慣れていたのだろう。それが彼の仕事なんだから。

「規則ですから。お気の毒ですが」

その淡々とした口調は、僕に錯覚を起こさせた。あの腹立たしい人工知能のアドバイザーが、電子の海から現実世界に飛び出してきて、人間の皮を被っているような感覚。

「だけど、ルーはまだ――」

「ここでは設備がありませんから、十分な処置もできません」

でも――さらに食い下がろうとした僕を制するように、係官は言った。「それとも、彼女の苦痛を長引かせたいんですか？」

それは言葉とは裏腹に、少しも刺々しいところのない、温厚な口調だった。

僕は言葉に詰まった。答えのひとつしかない質問――それが僕らの社会を取り巻くものの、正体だった。回答の用意された問い、合理的な説明。かぎりなく安全で、許されるかぎり安楽な、最善の方法。

だけど、あとになって思う。もしあそこで僕がそうだとしたら、彼はどうするつもりだったんだろう？

現実には僕は、ぐずぐずと追いつめることしかできなかった。

「だけど――じゃあ、僕がセンターについて行くことは……」

「規則ですから」

にべもなかった。係官はそれでも、わずかにまぶたを伏せて、気の毒にというような顔をした。けどその表情は、アドバイザーの人を安心させるようなあの口調と、どれだけ違っていただろう？ それともそう考えるのは穿ちすぎで、彼は本当に僕らに同情していただろうか？

異常な雰囲気を感じたパーシーが半べそになって、僕の膝のあたりにまとわりついてきた。ほんとうは母親のほうに抱きつきたかったんだろうと思う。けどルーが小声で「お父さんのところにいなさい」と言ったので、聞き分けの良い僕らの息子は、その命令に素直に従って、べそをかきながら、頼りない父親の服にしがみついていた。

こうなることがわかっていたから、彼女は痛みを口に出さずにいたのだ。症状を訴えれば、すみやかに連れて行かれることを、知っていたから。苦痛に耐えられなくなるぎりぎりまで、この

家にいたかったから。

係官の手際はよかった。連れてきていた搬送用のロボットに担架を担がせ、何種類かの薬を彼女に注射して、あっという間に準備を整えた。

どうしてこんな、と思った。わずかでも時間が残されているのなら、せめて最期のときまでそばにいたいと思うのは、当たり前なことではないのか？ 僕らにはたったそれだけの望みも許されないのか？

だけど結局、僕は引き下がった。青い顔をしたルーが、僕の袖を引いたから。ルーは、ゆっくりと首を振った。そしてかすれた声で、「見られたくないから」と囁いた。

僕はそれ以上、彼女に何の言葉もかけてやれなかった。ただその青ざめた手を握り返して、彼女の目を見つめることしかできなかった。ルーは僕を見上げて、微笑んだ。それから僕の手を離して、係官に向かってうなずいた。

彼女を乗せた担架は、音もなく滑るように運ばれていった。

素っ気ない文面の死亡通知が届いたのは、それからたった三日後のことだった。

いつ、どのようにして彼女が息を引き取ったのかというようなことは、そこには何も記されていなかった。問い合わせれば、きっと、知ってどうすると聞き返されるのだろう。その問いに対する答えを、僕は持たない。

あのときどうしてもっと食い下がらなかったのか。その後悔は、いつまでも尾を引いた。

彼女自身がそれを望まなかったからだ、開き直ってしまうことは、できそうにない。見られたくないからと、たしかにルーは言った。だけどそれは、本心からの言葉だっただろうか。

彼女の嘘を見破ることのできる自信は、もうどこにもなかった。僕はまたしても、信じたいことを信じただけではなかったか？ 自分に都合のいいことだけを見ていたのではなかったか？

ルーを失ってからのしばらくのことは、記憶が混乱している。

ママは、としつこく何度も訊いてくる息子を哀れに思いながらも、ときおり苛立って、どうしてわからないんだと怒鳴りたくなかったことは、うっすらと覚えている。

実際に怒鳴る前に、ちゃんと自分が堪えきれたかどうかは、心許ない。それくらいの分別は残っていたと信じたいけれど、それは単なる願望かもしれない。

パーシーはよくルーと一緒に歌っていたのを覚えていて、母親のお気に入りだった歌を、しょっちゅう口ずさんでいた。彼女がちゃんと覚えていなくてよくつかえていたのと同じところで、ちょうど同じように詰まるものだから、そのたびに僕はちょっと笑って、それから泣いた。

僕らはよく泣いた。僕が泣くと、つられてパーシーも泣きはじめるので、ああ、僕がしっかりしないといけないんだと、そのたびに思い直すのだけれど、だからといって涙を堪えられるようには、なかなかならなかった。

だけど別れがあまりにも早すぎると感じたのは、僕の勝手な都合だった。二十歳まで生きられる女性はほとんどいない。もっと早くに妻を亡くした男のほうが、圧倒的に多かったはずだ。

結婚しても、子供が『揺り籠』から出るまで生きられなかった女たちだって、いくらでもいるはずだ。だから客観的にいうなら、僕とルーは、運が良かった方ということになる。

そもそも、十五まで生きられない女の子のほうが、ずっと多いのだ。ルーは身をもってそのことを知っていた。だから自分の運命を、呪いも嘆きもしなかった。少なくとも、表にそういう感情を出すことはなかった。

僕だけが愚かだった。

公園でときどき顔を合わせていた夫婦の妻のほうが、あるときを境に姿を見せなくなっても、気の毒なことだと胸を痛めながら、本当の意味では、僕はその光景を自分の未来に重ねあわせてはいなかった。無意識にそうすることを避けていた。

僕は本当に、成長がない。

彼女と同じ顔をして、同じ声で話す女が、どこかにいるかもしれない。そのことを唐突に思い出したのは、ルーがこの世にいなくなって、ふた月ばかりが過ぎたころのことだった。

アマーリア＝ルーと同じ遺伝子を持った女性。もちろん彼女のクローンが（あるいは彼女のほうがクローンなのかもしれなかったが）、いまも生きのびているとは限らない。もうひとり残らず死んでしまっている可能性だって、充分あるのだけれど。

パーシーを連れて公園を歩いているとき、本当に不意に、僕はそのことを思い出したのだった。その瞬間、僕は打たれたようになって立ちすくんだ。自分の服の裾を小さな手でひっぱる息子に、かまってやる余裕も失って……

周りの家族連れが、同情を押し隠すような目で、掠めるように僕らのことを見ては、通り過ぎてゆく。どこか遠くのほうで子供たちの明るい笑い声が聞こえている。パーシーがさっきからずっと、子供らの輪に入っていくようにしているのに、僕はやっと気がついて、小さな背中を押してやった。その間、ずっと上の空だった。

遠ざかっていく小さな息子の背中。鳥のさえずりを模した音楽。そうしたものをどこか遠くに感じながら、僕はいつかの光景を思い出していた。あのとき、ルーと二人で、そう、やっぱりこの公園に来ていた。彼女は子供たちに混じって無邪気に遊びまわり、僕はベンチでそれを見守っていた。

不規則な足取りでやってきた、顔色の悪い男――やせ細って、目を充血させていた。ルーの腕をつかんで意味のとれないことをまくし立て、警備ロボットに排除されたあの男。

彼はルーを見て、何と言ったのだったか？

あんただ――と、そう呟いたのではなかったか。

あれは、そういうことだったんじゃないのか。彼は自分の妻と同じ顔をした女を、あてどなく方々を探し歩いて、ようやくのことで見つけあてたのではなかったか。

もちろん何もかも、僕の勝手な想像だ。事実を確かめるすべはない。だけどその推測は、当たっているのではないかという気がした。

気がつけば、彼と同じことをする自分を、頭の中に思い浮かべていた。

それはどんな道行きだったろう？ 彼女がどこにいるかなんてわからない。本当にいるのかもわからない。何の手がかりもないまま、近くのコロニーから順にはじめて、家族連れの来そうな公園を探す。片っ端から足を運び、あるいは同じ場所を時間を変えて何度もたずねて、そして……

我に返って、あわてて首を振った。夢想はわずかの間のことだった。だけど、後にはひどく苦い思いが残った。あの男には同情する。だけど一瞬でもそのことを考えた自分を、僕は生涯、恥じるだろうと思った。

顔や声と同じだろうと、たとえしゃべり方や仕草や、性格までがそっくりだとしても、その女は、彼女ではない。僕のマリィ＝ルーではない。

パーシーの五つの誕生日が迫ってくると、僕はひどく迷った。

子供はふつう、スクールに入学すると同時に学寮に入る。私物は何一つ持って行くことが許されない。以降、父親との面会も、月に一度しか許可されない。

それでも入寮の時期には例外があって、体の弱い子供は特別に、最初の二年間を上限として、親元から通わせることもできる。

パーシーは、特別に病弱だというわけではなかったけれど、それでも小さい子はよく熱を出したり、急に吐いたりするものだ。うまく申し立てれば、通るんじゃないかと思った。

だけどそうすることが、果たして正しいことなのかという思いが、今度は僕を縛った。

息子を心配するということよりも、むしろ自分のために、僕はパーシーと離れがたかった。ルーともう会えないということだけでも耐えがたかったのに、ましてその思いを唯一分かち合える息子とまで引き離されるというのは、辛かった。

この問題に頭を悩ませるようになってから、自分の子供のころをよく思い出した。僕の級友たちの中にも、そういう子がいた。その後も父親と卒業まで縁の切れていないやつらも、わずかながらいた。その中には得意げに父親の話をして、疎まれるやつもいたけれど、彼らの大半は父親の話題を極力口にしないようにして、周囲に気を遣っていた。

どちらにせよ、スクールで彼らは大なり小なり孤立する。妬みを買うか、買わないように小さくなるかの差があるだけだ。

子供には子供の社会がある。そして、二年も入寮が遅れるというのは、子供にとっては、大きな違いだ。先に仲良くなった子供たちの輪の中に割り込んでゆくというのが、とても大変な力のいることだということを、僕はまだ忘れていない。

さんざん迷ったあげく、僕は結局ほとんどの親がそうするように、パーシーを寮に入れた。

パーシーと引き離されたそのとき、身を切られるように辛かったけれど、その一方で、ほっとする気持ちが欠片もなかったといえば嘘になる。

パーシーはルーによく似ていた。息子の栗色の巻き毛を撫でるたびに、澄んだ緑の瞳を見るたびに、僕は彼女のことを思い出した。そうしてあの笑顔を二度と見られないことを、思い知らされた。

そうなってはじめて、僕は自分の父親のことを思い出した。九歳になった僕がもういいというまでのあいだ、月に一度、きっちり三十分間の面会をして、父親としての義務を果たしていた彼のことを。それが彼の負担になっていることが、言葉にはけして出されないけれど、目の動きや会話のふとした間に、いつからか垣間見えていた……

以前に提出していた希望が通って、僕は工学部に進んだ。

正直に言って初めのうちは、学業に情熱を見いだすことが難しかった。何をやっても虚しいような気がしていた。

見たいものしか見てこなかった自分をあれほど恥じ、都合の悪いものを見せまいとする社会に腹を立てておきながら、いざカレッジに進んでみれば、僕は何もできない自分に気がつかされた。

あの頃一ルーと暮らした四年半のあいだ、僕はずっと、何者かに腹を立てていた。社会とか、政治とか、何かそういう漠然とした、形のあるようであり、実体ではない何かに。そうしたものに意思というか、人格のようなものがある、悪意をもって僕らを監視し、都合の悪いものを見せないようにして、言葉を飲み込ませているんじゃないかというふうに、感じていた。

けれど、いまになって思う。本当にそうだったのだろうか。

そういう側面が、ないとは言わない。だけどそれ以上に、僕らは自分で、現実目をつぶることを選んだんじゃないのか。

女たちを、自分とは違うべつの生き物だと感じることも。大人と子供の社会がほとんど隔絶されていて、混じり合わないことも。妻を失ったあと、じきに子供から引き離されてべつべつに暮らさざるを得ないことも。

僕ら自身が、そう望んだから――積極的に願ってはいなかったとしても、そのほうが都合が良かったから。彼女らの苦しみを、死を、直視することが耐えがたかったから。多くの者がそこから目を背けたいと、無意識に思い続けてきたから。その結果として、僕らの社会はこんな形になっている。そういうことなんじゃないのか。

だとすれば、いったい僕に何ができるだろう。原因が僕ら自身の心の中にあるというのなら。

それでも、いずれ進むべき専攻分野を模索するうちに、少し考えが変わった。医療機器に使われるナノテクノロジーに、僕は興味を持ち始めた。

そんなものは、意味のない気慰みなのもかもしれない。二百年からずっと研究されつづけていて、なお対抗手段の手がかりさえつかめていないウイルスだ。ただでさえ技術のゆるやかに衰退しつつあるこの月社会で、少しばかり性能のいい医療機器が開発されたところで、何が変わるだろう？ 第一、いまさら何をしたところで、彼女が戻ってくるわけではない。

その思いは始終つきまとっていたけれど、それでも何もせずにいるよりは、いくらか気が楽だった。欺瞞かもしれないけれど、その気休めは、僕にとって必要だった。いつまでも見て見ぬ振りをしているだけではないと、そう思えることが。

同輩には、何かを忘れようとするように学業に没頭して、誰とも話したがる者もいる。逆に、何かにつけては亡くした妻の思い出話をはじめめる者もいる。泣きながら話す者も、まだ相手が生きている者であるかのように、嬉しげに自慢話をする者も。僕はどちらの仲間にも入れず、ただ微笑して沈黙する。

委員長もそうだ。

進学してから、僕らはまた、ときどき会って話すようになった。学部は違うけれど、共通して受けている講義がいくつかあって、顔を見ればどちらから誘うというわけでもなく、連れだって食事にゆく。

亡くした互いの妻の話が話題に上ることはない。だけど子供のことを話すなかで、ときおりその影が見え隠れすることがある。そのたびに、僕らはちょっと黙り込む。

委員長はときどき、端末に入れた娘の写真を見せてくれる。まだ生後三ヶ月くらいのときのだろうか、玩具をしゃぶってよだれまみれにしている彼の娘は、可愛かった。ものすごく可愛かった。娘もいいなと、無責任にそんなことをつい考えてしまってから、罪悪感を覚えるくらいには。

娘の愛くるしい言動を自慢する彼の顔は、いつもの彼からは想像しがたいくらい、だらしなくやにさがっている。

この子は何歳まで生きられるのかと、胸の片隅でそのことを考えないではいられないけれど、僕はけして、それを口に出さない。委員長も触れない。かつてルーの行く末から目をそらしていた僕のように、そのことを考えないようにしているだけなのか、それとも彼らしく、すでに何もかも覚悟を決めているのだろうか。

スクール時代、僕らはよく教師たちに、女の子のことを訊ねた。あのころ周りの大人たちはみな口をつぐんで、自分の亡くした妻の話を語ろうとはしなかった。

僕がもしいつか、たとえば仕事であの年頃の少年らと関わるような機会があったとして、やはり彼らと同じことしかできないのではないかという気がしている。都合の悪いものを見ないようにしてきた社会や、そう仕向けた大人たちを、たしかに憎んでいたというのに。

好奇心に満ちた目で未来を夢想する少年らの瞳に向かって、本当のことを話せる日は、きっとこないだろう。

それでも月に一度、決められた時間に、僕はパーシーに連絡するだろう。情けない父親だけれど、せめてその時間が僕にとって迷惑だなんて間違っても息子に思わせないように、精一杯の努力をして、楽しそうに振る舞うだろう。少なくとも、妻に似てさとい息子が、その努力の気配の裏側を勘ぐる年ごろになるまでは。

できればパーシーがスクールを出るまで、その習慣が続いたらいいと思う。身勝手な言い分かもしれないが、そうなれば連絡先を交換することもできるし、自由に会うこともできる。僕の端末の中に保存してあるルーの写真や、彼女の絵本を、彼に渡してやることができる。

それに僕にはひとつ、彼に伝えたいことがある。いまではなくて、もっと彼が大きくなって、たくさんの理不尽な現実と直面するころに。

この不毛の月面であって、不自然な技術に頼ってまで人類が生き延びることに、果たしてどれほど意味があるんだろうか――以前の僕は、そんなふうに感じていた。

パーシーが大きくなったとき、もし彼が、かつての僕と同じ思いを抱くことがあったなら、そ

してそのとき、まだ彼が僕と話をしてくれていたなら。そのときは、彼に教えてやりたい。どんなに世界が理不尽で、不条理に満ちていたとしても、生きることの意味はある。君がそのことを、僕に教えてくれたんだと。

君が生まれてきたことに、マリィ＝ルーがこの世に生きたことに、意味がないなんて言わせない。

いつごろからだろう、僕はときどき、草原の夢を見るようになった。

見渡すかぎりに広がる、一面の草野原。あたりにはまばらに背の高い木が生えていて、その間を巨大なキリンが、悠然と闊歩している。ときおり足を止めて、長い首を伸ばし、木の葉をついばんでいる。

夢の中で、僕はルーと手をつないで歩いている。彼女ははしゃいで僕の手をふりほどき、キリンの脚に抱きつく。僕はキリンが彼女に怪我をさせるんじゃないかと思ってはらはらしているのだけれど、黒いつぶらな目をしたこの動物は、そっと長い首を折って、彼女のふわふわの髪に鼻面をすり寄せる。ルーの手が、大きな鼻をそっと撫でる。彼女が振り返って、僕に笑いかける。その頬が紅潮している。

風が吹いて、草木を揺らす。月面都市の空調がつくる単調な空気の流れではなくて、もっと気まぐれで乱暴な、ほんものの風。地球の大気。

その光景が本物の草原にどれだけ近いか、確かめようはないけれど。

大人はどうして、いつかわかるに決まっている嘘をつくんだらう。

その子の名前は、エリといった。初等部に入ったわたしが、いちばん最初に親しくなった女の子。

泣き虫で、少し舌っ足らずな話し方をする子だった。目立つのがきらいで、いつもわたしの後ろに隠れたがった。ほかの子たちと一緒に遊んでいても、どこか遠慮がちで、いまにして思えば、少しばかりとろくさかった。

だけど気が優しく、誰かが泣いていたら、泣き止むまでずっとそばについているような子だった。

「わたしたち、一生仲良しだよね」

後になって思い出せば笑ってしまうような、いかにも子供の言いそうな言葉。だけど言っている本人は真剣そのものだった。エリの甘い声と、つないだ手のひらの熱い感触が、その言葉と一緒にあって、くっきりと記憶に刻み込まれている。

ある朝、エリが授業に出てこないなと思ったら、先生（シスター）が手を叩いて、みんなの注目を集めた。

「エリは遠くのコロニーに引っ越すことになりました」

その言葉の意味をすぐに理解できた子が、その場にひとりでもいただろうか。

コロニーって何。遠くってどこ。エリ、明日は出てくるの。あさっては。戸惑い、質問ばかりを繰り返す生徒たちに、シスターはひとつひとつ、ゆっくりと答えた。その結果、わたしたちはどうにか、ひとつの事実を理解した。エリは去り、もうこのクラスに戻ってくることはない。

みんなで手紙（メッセージ）を送りましょう、とシスターは言った。

そのころまだわたしたちには、お互いのあいだで自由にやりとりの出来る端末は与えられていなかったから、授業を一時間まるまる使って各自が作った手紙は、いったんシスターの端末に集められることになった。

八歳だった。

まだよくわからないようすで、きょとんとしたままの子がいた。ベソをかいている子がいた。

わたし自身はというと、怒っていた。

誰に怒っていたのか。とつぜん理不尽な事実を告げたシスターに？ いいや——あの頃はまだ、シスターに向かって腹を立てるという発想は、わたしにはなかった。

一様に背が高く、痩せこけて、どこもかしこも皺だらけのシスターたちは、わたしたちとはまるきり別の生き物のように思っていた。理解の及ばない存在に対して腹を立てる道理が、どこにあるだろう。

子供がいつか成長し、老いて彼女らのようになるのだということを、このときまだわたしは理解していなかった。老いたシスターたち、同じ年代の女の子たち、それから、稀に姿を見せるだけで口をきくことのほとんどない、係官と呼ばれる人々。世界にはその三種類の人間しかいなか

った。そのいずれもが互いにもあまりにもかけ離れていたのだから、わたしはそれぞれをまったく異なる生き物なのだと、漠然と思い込んでいたのだ。

だから、そう、わたしはこのとき、シスターにではなく、エリに腹を立てていた。ずっと友達だと約束したのに、そのわたしに何も言わずに、黙っていなくなった彼女に。

エリからの返事は、いつまで待っても来なかった。

返事はまだ？ みんなはことあるごとにシスターを囲んだけれど、シスターはそのたびに微笑んで、まだですよと答えた。エリは文章を書くのが苦手でしたね。きっと新しいクラスに慣れるのが大変なのよ。忙しくしているに違いないわ。言い訳はそのたびに違っていた。

最初の頃こそ、エリがいなくなったことをみな寂しがったけれど、わたしたちはやがて彼女のいない生活に慣れた。

誰もエリの名前を出さなくなっても、ときどき、そう、休み時間にみんなで何かゲームをやっているようなとき、あるいは体育の授業で二人ひと組になってあぶれる子が出たとき、おしゃべりのふっと途切れたときに、いつもその面影が胸をよぎった。そうして、そのたびにわたしは怒った。

エリはどうして返事をくれないんだろう。わたしのことなんか、とっくに忘れてしまったんだろうか。

年にひとりかふたり、そうやって、遠くのコロニーに行ってしまう子が出た。

シスターが語る理由は、そのつど違っていた。向こうのセンターの生徒数が足りなくて。才能を伸ばすために特別な勉強を。彼女は足が悪いから、もっと設備の整ったセンターへ。

そのたびにわたしたちは手紙を送った。やっぱり返事はなかった。

どうして返事が来ないのか、不思議に思っていたのは最初のころだけで、いつのまにか皆、そのことを口に出さなくなっていた。そういうものだと思い始めていた。

いや――疑問に思わなくなったわけではなかった。少なくともわたしはそうだ。だけど、聞かれるたびにシスターが困った顔をするので、だんだんそれが、口に出しづらい話題になっていったのだと思う。あるいは、答えを聞くたびにがっかりするのが嫌になったからかもしれない。

「あたし、ほかのコロニーに移るんだって」

十歳のとき、ジョゼがそう言って、言い終わるが早いか、わあわあ声を上げて泣き出した。

その場にいた子たちで彼女を囲んで、口々に慰めた。怖がることないよ。向こうのシスターのほうが、優しいかもよ。エリやアニタがいるのと同じところだったらいいね。

慰めながら、皆、どこかほっとしたような顔をしていた。それというのも、相手が他ではないジョゼ、彼女だったので。

ジョゼは、癩癩の強い女の子だった。機嫌のいいときには明るくはしゃいでいるけれど、そうでないときには誰の言葉にも耳を貸そうとせず、ふさぎ込むか怒りちらすかしている。ひどいときには手足を振り回して暴れることもあって、それで怪我をした子もいた。

そんなときの彼女は、シスターたちが集まって落ち着かせようとしても手に負えず、一度はと

うとう、誰かが係官にコールしたのだった。五人だったか六人だったか、大勢の、異様な風体をした大きい人たちが駆けつけて、暴れる彼女を取り押さえた。その間も、ジョゼはずっと泣きわめいていた。

数時間後、暴れたせいで疲れきった様子のジョゼが、シスターに手を引かれて仏頂面で帰ってきたとき、教室には少なからず緊張が走った。だけどジョゼはむっとり黙り込んで、その日じゆう、誰とも口をきこうとしなかった。

そんな調子だったから、皆、彼女には手を焼いていたというのが、正直なところだった。遠くにゆくのだと言ってジョゼが泣き出したあの日、彼女を慰める子たちの口調の中に、同情の色がなかったとはいわないが、そこにはどこか無責任な、口先だけの響きがあった。

それでもジョゼは何度もうなずいて、涙ぐみながら、忘れないでねと言った。みんな、あたしのこと、覚えていてね。手紙、ちょうだいね。きっとよ。

その二日後、ジョゼは去った。しばらくしてわたしたちは手紙を書き、シスターの端末に送った。ジョゼからの返事は来なかった。

それからさらに数日ばかりが経って、授業中、何の拍子にだったか、ひとりの子が声を上げた。「ジョゼやほかの皆は、もう戻ってこないんですか。遊びに来ることも？」

「ええ、ここには、もう」

シスターはうなずいて、かすかにまぶたを伏せた。その表情を見て、とっさに声が出た。

「じゃあ、こっちから行くのは？」

なぜ自分がそんなことを聞いたのか、自分でもわからなかった。わたしは別に、ジョゼのことを特別に好いていたわけではない。むしろ他の多くの子がそうであったように、彼女のことを苦手に思っていた。それだというのに言葉はわたしの口をついて、勝手に滑り出た。「わたしたちのほうから、ジョゼに会いにゆくことはできますか」

シスターはわずかに目を瞠ると、微笑んで、静かにうなずいた。

「ええ、すぐには難しいですが、いつかはきっと」

何かがおかしいと思わなかったわけではない。だけど誰も騒ぎたてはしなかった。去った子と仲の良かった者は、突然の別れを嘆き、いつときふさぎ込んだけれど、時間が経てばやがては誰もがその空白に慣れた。去った子は、たまに思い出したように皆の話題に上る、影だけの存在になった。

そろそろ卒業式の話が出始めるころだった。

十二歳になったら、初等部での暮らしはおしまい。春には上の学校に移るのだと聞いていた。シスターたちはここに残って、向こうにはまた別のシスター方が待っているという。環境の変化に対する不安がなかったわけではないけれど、それでもいまの顔ぶれは、基本的にみんな同じ学校に進むのだと聞かされていたから、それほど深刻にとらえてはいなかった。

けれど最終学年の半ばを過ぎるころになって、突然、姿を見せなくなる子が増えた。

いままでのようにひとりふたりというのではない。半年で、九人。

そのころ同じ建物で寝起きしていた級友たちは、全員でやっと百人を超えるくらいだった。急に空席が目立つようになった教室で、わたしたちは不安に身を寄せ合うようにして、その数ヶ月を過ごした。ジョゼのように前もって知らされることのほうが稀で、ほとんどの子は、あるとき突然姿を見せなくなった。

姿を消す前に腹痛を訴えていた子がいたことが、不安をあおった。シスターのいないところで、皆、噂しあった。どうして彼女たちはいなくなったのか。

シスターの語る口実を真に受けている者は、もうほとんどいなかった。ほんとうに皆、どこかのセンターに移っているのだろうか？ それならなぜ、手紙の返事が送られてこないのか？

十人目の子がなくなった次の日の朝、特別授業があった。

シスター・レティシャは残る全員が教室にそろっていることを確認すると、手のひらを高らかに二度打ち合わせて、皆を黙らせた。

ふだんの授業では、私語が目立つのが話を聞かない子がいようが、シスターたちは怒ったりしない。せいぜい穏やかに注意するくらいのものだ。だがこの合図が出たときだけは、別だった。大事な話があるから、静かにして聞くようにという意味だ。

これを守らなければ、尋常でない剣幕で叱られる上に、面倒な罰が待っている。食事抜きで丸一日反省室に入れられるというようなペナルティが。

このときいつにないことに、ほかの四人のシスターたちが揃ってその場に控えていた。一様に教室の後ろで目を伏せ、お祈りの時間にそうするように指を組んで、シスター・レティシャが話し出すのを待っていた。

しばらくためらったあとに、シスターは切り出した。

「まずひとつ、あなた方に、謝らなくてはなりません」

そう言って、シスターはゆっくりと頭を下げた。

いままで居なくなった子たちが、遠くのコロニーに行ったというのは嘘だと、シスターは言

った。

教室じゅうがざわめいた。『大事なお話』の最中だけは静かにしなければ怒られるのが常なのに、このときシスター方は、誰ひとり怒り出さなかった。全員が唇を引き結んだまま、ふたたび教室に静けさが戻るのを待っていた。

生徒のひとりが、すっと手を上げた。シスター・レティシャはうなずいて、彼女の発言を許した。

「それならば、彼女らはどこに行ったのです？ エリやジョゼや、コニーは？ ほかのみんなは？」

シスターは目を伏せて、押さえた、低い声で答えた。

「あの子たちは、天の国へ召されました。神様の御許に」

彼女が何を言っているか、その場にいた生徒の誰にもわからなかったと思う。教室じゅうが戸惑い、眉をひそめ、シスターの次の言葉を待った。まるでエリが居なくなったあの日のようだった。

シスターたちの口から神様の話が出てくるのは、珍しいことではなかったけれど、それはいつも抽象的な教訓ばかりだった。少なくともわたしは、その存在を具体的な人物像として認識したことはなかった。天の国という言葉に至っては、このときはじめて耳にしたと思う。

シスター・レティシャは急にわたしたちに背を向けて、教室のスクリーンに、死、という言葉を表示させた。

それもまた、はじめて目にする単語だった。どの教科書にも、ライブラリから閲覧できるどの図書にも、そんな言葉が出てきたことはなかった。

「人は誰でも、いつか、死にます」

ゆっくりと区切るようにして、シスターは言った。それから彼女はわたしたちのほうに向き直ってまっすぐに顔を上げたけれど、それでいて、生徒の誰とも視線を合わせなかった。

シスター・レティシャはゆっくりと、噛み含めるように続けた。「ひとりの例外もなく、わたしも、あなた方も、みな神様の定められたときに、いつかは同じ場所へゆくのです」

まだわからなかった。死ぬとはどういうことなのか。天の国とはどこにあるのか？

しんと静まりかえった教室の中に、シスター・レティシャの抽象的な説明だけが、長く続いた。それを黙って聞いているうちに、ようやくおぼろげに理解した。つまり、死とは、いなくなってしまうことなのだ。

先ほど挙手したのは別の子が、発言の許可も求めず、シスターの言葉を遮った。

「天の国にいる人たちと話をすることは、できないのですか」

このときもやはり、シスターは怒らなかった。ただ目を閉じて、うなずいた。「ええ」

「誰とも？ シスターでも？」

「そうです」

「向こうからこちらに通信をつなぐことも？」

ええ。三度、シスターはうなずいた。

「手紙は――」

わたしは自分のその声を、他人事のように聞いた。やけに尖った、切りつけるような声。「あの時の手紙は、どうなったんですか」

皆がその瞬間、壇上のシスターを見ていた。シスター・レティシャは一度口を開きかけて、閉じて、それからゆっくりと目を伏せた。

「きっと、彼女たちは天の国で、あなた方の手紙を読んだでしょう」

わたしはとっさに椅子を蹴って立ち上がり、背後を振り返った。エリへの手紙を預けた相手、教室の後ろで控えていた、シスター・ブリジットのほうを。

五人のシスターの中で最も温厚で一番小柄なブリジットは、うなだれてわたしの視線から逃げた。おかしい話だ。老練な教師であるはずの女が、普段は説教をしてばかりいる相手、十二歳にもならない小娘の視線におびえるだなんて。

静かに、席に着いて。ぱらぱらと飛んできたシスター方の叱責には、力がなかった。わたしは座らず、教壇のほうへ向き直って、シスター・レティシャの目を見た。後ろめたさに揺れる、普段とは別人のようなその目を。

だがわたしが何かを言い立てるよりも早く、シスターは首を振って続けた。

「不安にさせてしまいましたね。ですが、死は、けして恐ろしいものではありません」

死んだ者は父なる神の御許で、永遠に幸福に、安らかに過ごすのだというようなことを、シスターは語った。

馬鹿にしている、と思った。

誰も死者と話すことはできず、天の国に一度召された者は、けして戻ってこれないというのなら、誰がその場所のようすを知っているはずがあるだろう。子供にでもわかる理屈だ。それともあなた方の誰かが、すでに死んだことがあるというのか？

頭に血が上っていた。それだというのに自分の唇からこぼれた言葉は、いやになるほど冷たい響きをしていた。「天の国がすばらしい場所だというのなら、シスター、皆そろって大急ぎでそこへゆけばよいではありませんか？　そこが恐ろしい場所でないというのなら」

わたしは一度言葉を切り、大きく息を吸って、叩きつけるように叫んだ。「なぜあなた方は、それをいままで隠していたのです」

シスターの誰もが、すぐには返事をしようとしなかった。気がつけばおびえた目をしたクラスメイトたちが、わたしを見上げていた。

やがて、シスター・ブリジットが教室の後ろで、ゆっくりと話し始めた。

「あなた方には皆、なすべき役目があります。それを終えれば、いずれ天の国への門はおのずと開かれます。おのおのに定められたときを待たずに、自ら死を望むことは、神様が禁じておられるのです……」

急に、すべてが馬鹿らしくなった。天の国の人間と話をすることが出来ないのなら、神様の言葉を聞いた人間もいないのが道理ではないか？

わたしはシスターの話の途中で席を立って、教室を出た。誰からも引き留める声は上がらなかったし、追いかけてくる人間もいなかった。

センターは広い。だけどひとりで勝手に行き来のできる場所は限られていた。ほとんどが、シスターと一緒になければ開けることのできないドアばかりだ。だけど、そのうちのひとつの鍵が壊れていることを、わたしは知っていた。

電子鍵ではない、金属の錠で閉ざされた、小さな部屋。反省室。

ほんとうは、何か悪いことをしたときに閉じ込められる部屋だった。狭くて、薄暗くて、一日中明るさが変わらないから、時間の感覚がわからなくなる。気を紛らわせるようなもの、時間をつぶせるようなものが何ひとつない。

そのなかで何時間もじっとしているのは、耐えがたいという子も多いけれど、わたしは平気だった。食事を抜かれるのには参ったけれど、一人で考え事をする時間は、わたしにとっては何の苦痛でもなかった。

あとで思えばあんな場所、監視用のモニタが設置されていたに違いない。シスター方はもしかしたら、わたしが授業を乱したことを反省して、自発的にそこに籠もったと思ったのかもしれない。けれど、そのときのわたしはそこまで考える余裕がなかった。ようやくひとりきりになったつもりで、膝を抱えた。

大人はどうして、いつかわかる嘘をつくんだらう。

胸の中に、怒りが渦巻いていた。エリは、もうどこにもいない。あの手紙はシスターたちが勝手に開いて読んだらう。

何も知らない子供たちの無邪気な幼さを、彼女らは笑っただらうか。それとも憐れんだらうか。そのほうが、なお許しがたいという気がした。こんなに人を馬鹿にした話があるだらうか？

ひとりになった反省室のなかで、わたしは腹を立てるばかりで、エリのために涙を流しはしなかった。そうするには時間が経ちすぎていた。

ただ怒りと罪悪感だけが、いつまでもしつこく残った。どうして手紙をくれないんだらう、もうわたしのことなんて忘れてしまったんだらうなんて、いなくなったエリに見当違いの怒りをぶつけていた自分が、いかにも愚かで、滑稽で、それが耐えがたかった。

それからの半年で、ぼろぼろと人は欠けてゆき、はじめ百人を超えていた同級生たちは、卒業時には七十人ばかりしか残っていなかった。

やっぱり涙は出なかった。あまりにも別れは速やかで、きれいにぬぐい去られたように痕跡を残さず、彼女たちは消えていった。

寂しさはいつも別れのその瞬間ではなく、ずいぶん経ってから、不意をついて襲いかかってきた。たとえばおかしな失敗をして、誰かに笑い話を聞かせたいと思ったとき、そういえばもうあの子はいないのだったと思い出した瞬間などに。

体調に異変を感じたときにはすぐに申告するようにと、シスター方は言う。それを申告したらどうなるのかという説明はなかった。けど皆、判っていた。訴えた結果、何の薬をもらったとか、どういうアドバイスを受けたとか、そうした話をする者がいない理由に、察しがつかないほうが、どうにかしていた。

症状を訴えた者から順に、どこかに連れてゆかれるのだ。

死は恐ろしいものではないと、シスターたちはことあるごとに繰り返した。まっすぐに生徒の目を見つめることなく、あの嘘くさい微笑を浮かべて。何度も重ねて言えば、それが本当になるとでも思っているかのよう。

その呪文は、少なくともわたしにとっては、まるで効き目がなかった。

恐怖は漠然としていて、それだけに粘り着くようにしつこく胸の奥に居座った。おそろしいのは、それがいつ、誰のもとに降りかかってくる災いなのか、誰にもわからないということだった。

ある朝、下腹の鈍い痛みとともに目覚めて、シーツを染める血を見た瞬間、わたしがその異変にどれほどおびえたことか。授業で習った月経というものを思い出すまでの何十分かの間、わたしはもうすでに自分が死んだものであるかのような心地でいた。

汚してしまったシーツを丸めて、目に触れないように押しのけたまま、ずいぶん長いこと、がたがたと震えていた。やがて、これは死の前触れではなく、当たり前について来るはずのことだということに気づいた瞬間、わたしはまっ先に、自分の記憶をうたがった。死ぬのが怖いあまりに、自分に都合のいい記憶を、自分の頭の中に作り上げたのではないかと思えたのだ。

事前に説明のあったとおりに医務室へ行き、手当の仕方を教わったときにも、まだ半信半疑だった。早くに初潮の来ていた子たちに打ち明けて、自分の臆病さを笑い飛ばしてもらうまで、ずっと不安だった。

それが、いつか子どもを産むための準備なのだという話は、ちっともぴんとこなかった。

以前、授業の一環で、『揺り籠』を見学したことがある。ガラスの容器の中に浮かぶ赤ん坊たち一部屋中を埋め尽くさんばかりに並んだ数々のモニター—そっくり同じ顔をした、何人もの子どもたち。

可愛いと、歓声を上げて喜ぶ子たちもいたけれど、わたしにはその小さな人間のまがいものが、薄気味悪く思えてしかたがなかった。自分がかつて、ああいう存在だったらしいということが

、耐えがたいほど不快だった。

あれの元になるのが、自分の体から流れるこの血だとすれば、人が生まれてくるというのは、なんとグロテスクなことだろう！

妊娠ということについて、はじめて授業で習ったとき、やっぱり皆が戸惑うように顔を見合わせたのを、よく覚えている。

十五歳になったら――シスター・ブリジットは両手を体の前に組んで、いつにもましてきまじめな表情で、話しはじめた。

「あなたがたは十五歳になったら、神様のお導きに従って、さだめられた伴侶に出会い、そののちに子どもを授かるのです。先日、見学にゆきましたね。生まれる前の赤ちゃんたちを、見たでしょう？ とても可愛らしかったですね」

話しながら、シスターは頬をほころばせて、教室を見渡した。どこか夢見るような瞳だった。「ここから遠く離れたコロニーで、男の子たちが、あなた方と出会うその日を、楽しみに待っているのですよ」

「男の子、ですか」

聞き返したのは、誰だったか。シスターはその質問を予期していた様子で、ざわざわする教室を見渡して、ゆっくりとうなずいた。

わたしたちとは体のつくりが違う、もう一方の性。シスターはそんな言い方をした。「あなたたちは、もう、その目で男性を見たことがあります」

日ごろ係官と呼ぶ人々が、それにあたるのだと、シスターは言った。人手の必要な場面や、シスターたちだけでは手に負えない事態が起きたときに、どこからともなくやってくる、体の大きな人々――ジョゼを取り押さえて連れていったあの人たち。

それは、ぞっとするような話だった。

必要なときにしか現れず、必要なことだけをしてすみやかに去って行く、異様な風体の人々。話しかけても無視するくせに、その必要があれば大声で一方向的にまくしたてるような説明をして、こちらに質問を差し挟ませない。彼らはわたしの目には、怪物のように映っていた。

おそらくその授業の時点で、あの人たちに好意を持っている子は、ほとんどいなかったと思うし、実際、このとき教室はいやな緊張に満ちて、ざわついた。

みな不安を制するように手のひらを見せて、シスターは微笑んだ。「心配することはありません。係官としてここにいらっしゃる方々は、お役目のためにしかたなく、ああいうふうには振る舞われているのですよ。あなた方の夫となる人たちは、もっと親切で、きちんと皆さんの話を聞いてくれるはずですよ。あなた方は、その日を楽しみにしていてよいのです」

半信半疑のようすでいる生徒たちを見回して、シスターはもう一度うなずいた。それから厳かな調子で――少なくともそう演出しようとする努力の元に、楽園について語った。神様がお作りになった一对の男女のこと。あさはかな考えから戒めを破り、楽園を追放された二人の話を。

神世の昔――それが具体的にどれほど前のことなのかについては、シスターは言葉を濁したけれど、ともかくずっと昔から、人は絶えず多くの過ちを犯し続けてきたのだという。そうしてい

まの世に至り、いつしか適切な時が満ちるまで、男と女は引き離されるようになった。

何をどこまで信じていいのかわからない——そう思ったのは、それを説明するシスターの口調と、表情のためだった。エリは遠くのコロニーへ行きました——そう話したときと同じ顔を、彼女はしていた。

あなた方が十五歳になったらと、シスターは繰り返した。

十五歳になったら。それまで生きていられたなら。

シスターが口にしなかったその言葉は、しかし、誰の耳にもはっきりと聞こえていたのだろう。ひとりの生徒が、とつぜん叫んだ。「なぜ、十五歳まで生きられる子と、そうではない子がいるのですか。それも、神様の思し召しなのですか」

普段は物静かな子だった。シスターは目を伏せて、いつときの迷いののちに、うなずいた。「そうです」

質問した子は、何か言いたげな顔をしたけれど、結局は飲み込んで、もとどおり着席した。

神様——神様——神様！　なんと都合のいい存在だろう？

しんと静まりかえった教室の中、シスターはしばらく瞑目していたけれど、やがてゆっくりと手のひらを打ち合わせて、授業の終わりを告げた。

その時間は、その日の最後の授業だった。いつもだったら、授業が終わればみなさっさと教室を離れるのに、このときはほとんどの子が留まって、落ち着かないようすで先ほどの話についての意見を交わしていた。

見渡したかぎりでは、ほとんどの子は、顔に不安の色を濃く残していた。だけど、わたしの斜め前の席に座っていた子が突然、内緒話のような調子でささやいた。

「だけどね、すてきな人がいたのよ」

皆、好奇心に駆られてその子のそばに集まった。わたしは駆け寄りさえしなかったものの、やはりその場に留まって、思わず耳を傾けた。

「あのね、クリニックの助手の人なの。このあいだ、わたし、手を怪我したじゃない。あのときにね……」

皆の注目を得られたことで、得意げに目を輝かせて、その子は話し出した。診察室で、怪我の痛みで泣いていた彼女を見て、その人物はひどく慌てたのだという。感情などはじめから持ち合わせないようなほかの係官と違って、その人はいたわるように彼女の手をとって、優しく話しかけ、診察台まで誘導してくれた……

ねえ、どんな人だったの。顔は？　何か喋った？　矢継ぎ早に飛んでくる質問に答えながら、彼女は目を輝かせて、頬を赤らめていた。「相手が、あんな人だったらいいなあ」

輪の中からため息とも歓声ともつかない声が上がった。まだ半信半疑の子もいたけれど、安心したように表情を緩める子や、彼女のことを羨ましそうに見ている子のほうが、圧倒的に多かったのではないかと思う。

その瞬間に感じた疎外感を、どう説明したらいいだろう。

わたしは無言で立ち上がって、ひとり、自室に戻った。どうして彼女らはあんなふうで、楽

的にものを考えられるのだろうと、そう思った。

それともシスターの説明を、きっといい人ですよと言った、あの無責任な言葉を、彼女は、ほかの皆は、信じたのだろうか。理解できなかった。どうしてそう簡単に、人の言うことを信じられるのだろうか？

センターを移るとき、わたしたちは生まれて初めてトラムに乗って、それまでとは違うコロニーに移った。

まず、ほかのコロニーというものが実在するというのに、わたしは驚いた。それが、シスターたちの作り話ではなかったということに。

トラムの狭い車体の中に押し込まれて、かしましいおしゃべりのなかで数時間あまりを過ごした先に、そのコロニーの入り口は、魔法のように現れた。ただ座っているだけで、いつのまにか遠くまで運ばれているというのは、何かの手品か魔法のように思えたけれど、開いた扉から降り立ってみれば、たしかにそこは見知らぬ場所だった。

新しくわたしたちを受け持つというシスターに連れられて、そろそろと、おっかなびっくり新しいセンターまで移動した。とはいっても、まっすぐな通路を、ほとんど運ばれてゆくだけだったのだけれど。

「さあ、ここが皆さんの新しい家ですよ」

シスターがそう言って開いたドアの先には、前にいたセンターとたいして代わり映えのしない光景が広がっていた。観葉植物の並ぶ手狭なロビー、学寮に続く通路、いくつも並ぶドア、壁に点在するスクリーン。それらの雰囲気はいずれも初等部と似通っており、むしろ壁の色以外の違いを探す方が難しかった。強いて言うならこちらのほうがいくらか天井が高いことと、もといた場所よりも設備が古びて、壁の塗装がところどころはがれたり、足元を行き交う清掃ロボットが野暮ったい外観をしていたことくらいだろうか。

新しい学校には、おなじ初等部から上がってきた子だけじゃなくて、ほかのセンターから来た子たちも合流した。その子たちと、わたしたちの数は、だいたい同じくらいだったと思う。けどわたしはその人数を正確に数えることはしなかったし、ひとりひとりの名前を覚えようとも思わなかった。

わたしは人と親しくなるのをやめた。誰かと口をきくのは、決まり切った定型の挨拶と、必要最低限の連絡だけ。特定の誰かに思い入れができれば、別れがつらくなるだけだと思った。

それで休憩時間にはひとり、みんなのおしゃべりを聞き流しながら、ライブラリから適当に拾ってきたテキストを読むことにした。進学と同時に、読むことのできる図書の種類が増えていたから、しばらく退屈はしなさそうだった。

授業で習う内容は退屈で、とても聞いていられたものではなかったけれど、自分の意思で選んだテキストを読むのは、なかなか楽しいことだった。内容は何でもかまわない。やたらに説教くさい寓話や、できすぎの甘ったるい恋物語は、シスター方の都合というか、見え透いた作為を感じないではいられずに、とても読めたものではなかったが、架空の世界を舞台にした冒険物語は読んでいるあいだ憂さを忘れさせてくれたし、色とりどりの画集などは、眺めているだけで気分が浮き立った。

シスターの口から説明されると退屈としか思えない詩集も、自分の意思で気ままに読む分には悪くなかった。実生活に役に立たなければ立たないほどいい——そんなふうを感じるのは、わた

しがひねくれものだからかもしれない。

教室のおよそ半数が、知らない子だったから、みんな最初の数日の間、落ち着きなくそわそわしながら名乗りあい、お互いの好きなものを打ち明けあったり、虫の好かないシスターへの愚痴を零しあったりしていた。

小さな輪がいくつも教室に出来てゆくなか、わたしはそこに混じらず、ひとりで端末に向き合って本を読んだ。お節介な子が二人ばかり、遠慮がちに話しかけてきたけれど、聞こえなかったふりをしたら、すぐにあきらめて引っ込んだ。

誰に嫌われようとかまわなかった。どうせいつかはいなくなる子たちだ。

あるいはわたしのほうが、いなくなるのかもしれないけれど。

ただ――そう、ひとりだけ、無視できなかつた子がいた。

入学のその日の朝、その子に肩を叩かれて振り向いた瞬間、息がとまるかと思った。

エリだと思った。栗色の巻き毛、明るい緑の目――「ねえ、これ落とさなかつた？」ちょっと舌っ足らずのその話し方、甘い声。わたしに向かってヘアピンを差し出す手の、きれいにそろった爪。

記憶の中のエリの、そのまま大きくなった姿が、目の前にあった。

わたしは混乱した。いなくなった彼女たちのほとんどは、天に召された――シスターはたしか、そう言ったのではなかつたか。そうだ、必ずしも全員が死んだとは話さなかつたはずだ。

エリは、生きていたのだ。本当に、ただ遠くのコロニーに移っただけだった。

ねえ、生きていたのなら、どうして手紙の返事をくれなかつたの。わたしのこと、もう忘れてしまった？ 言葉は喉の奥でつかえて、なかなか唇にまで上ってこなかつた。絶句しているわたしに向かって、その子はちょっと困ったように微笑んだ。

「みんな、驚くのね。わたしの姉妹は、そんなにわたしと似ていたかしら？」

その言葉が腑に落ちるまでに、時間が要った。

彼女の言う意味を理解した瞬間の、自分の狼狽を思い返すと、いまでもいたたまれなくなる。

あらためて彼女を見つめれば、たしかに視界の端に表示された個人識別コードは、エリのそれとは異なっていた。そんなことにもすぐには気がつかないくらい、わたしは動転していた。

姉妹、というものの存在を初めて知ったのは、いつのことだっただろう。初等部を卒業する直前のオリエンテーションで、あらためてシスターの口から聞かされるよりもずっと早かつたのはたしかだ。何かの物語の中に出てきたのかもしれないし、シスターたちが授業を脱線して、雑談のなかで話して聞かせたのかもしれない。

自分と同じ顔をした人間が、この世のどこかにいるらしい――だけどこれまで、実際にこの目で誰かの『姉妹』を見たことはなかつた。ふつうは違うセンターに入れられるのだと聞かされていた。

上の学校に進んだら、知っている顔とよく似た人もいるかもしれないけれど、驚かないようにと、初等部のシスターはたしかに、わたしたちに忠告したのだった。そんなこともいっぺんに頭から飛んでしまうくらい、その子はエリそのものに、わたしの目には見えた。

アマーリア＝ルーと、彼女は名乗った。これからよろしくと言って浮かべた遠慮がちな笑顔から、わたしは視線を逸らした。

「それ、わたしのじゃないわ」

ぶっきらぼうにそう言って、差し出されたヘアピンを押しつけたけれど、アマーリアに気を悪くしたようすはなかった。

「そう？ ごめんね」

彼女はかるやかに身を翻して、近くにいたほかの子たちに声をかけた。その背中から、視線を外せなかった。

ごめんね？ 彼女は何を謝ったのだろう。

普通に考えるなら、手間を取らせたことを、なのだろう。あるいはわたしの声にとげがあったから、ただ反射的に謝っただけかもしれない。だけど、その言葉はわたしには、別の意味を持って聞こえた。エリじゃなくてごめんね——そういうふうには。

そのことが、やけに腹立たしいような気がした。彼女が悪いわけではないのに。

アマーリア＝ルーは、明るい子だった。積極的に周囲に溶け込もうとして、自分から周りの生徒たちに話しかけていた。初めて話す相手に対しては、遠慮がちに、どこか気弱そうに振る舞うけれど、いちど親しくなった相手には、遠慮なくものをいう。しじゅう声を立てて笑っていて、彼女の甘い声はよく耳についた。

エリとは、ちっとも似ていない。

わたしは自分に言い聞かせた。けれどそれは嘘だった。

彼女に話しかけたい、という衝動は、何度となく発作的に襲いかかってきたけれど、わたしはそれを無視しつつけた。そうしなければならなかった。彼女を、エリの代わりのように考えることは、何かの裏切りであるかのような気がした。

あるいはその抵抗は、罪悪感の裏返しだったのかもしれない。あの頃の自分の気持ちに対する、罪の意識。エリは新しい友達が出来て、わたしのことなんかとっくに忘れてしまったのだろうなんて、見当違いの焼きもちを焼いていた自分への。

はじめのうちこそわたしと同じように彼女を見て驚いたり、戸惑ったりするようすを見せていたクラスメイトたちは、みんなすぐに彼女のことをためらいなくマリィと呼ぶようになって、その呼び名につきまとう違和感を、すっかり忘れてしまったようだった。

それにしても、不思議だった。誰もが以前にそうしていたとおりに、クラスの中に友達を作り、仲良しの子と四六時中一緒におしゃべりをしたり、おそろいの小物を手に入れたり、ずっと仲良しでいようだの、誰と誰が親友だの、誰と喧嘩をしたけれど仲直りをするタイミングがどうのと、いちいち騒々しかった。

そうした彼女らのようすは、いつかやってくる死の恐怖を忘れようとして、無理にはしゃいでいるようにも見えたし、本当にただいまの日常を楽しんでいるようにも見えた。

いつかとつぜん目の前から居なくなってしまうかもしれない相手と、どうしてそう無防備に親しくなれるのか。わたしにはそのことが、不思議でたまらなかった。

まるで自分と親友だけは、けして死にはしないと、彼女らは根拠もなくそう信じ込んでいるようだった。彼女たちの姿はあまりにも脳天気なように、わたしには見えていた。

だけど、じきにわたしは自分の思い違いに気づかされることになる。

誰かがいなくなるたびに、嘆き、寂しがり、ときには声を上げて泣く。慰め合い、後悔を並べ立て、死んだ子の冥福を祈る。けれどそれらの儀式が一段落すると、彼女らは何事もなかったかのように、ほかの誰かと「親友」になるのだ。

親しく振る舞い、しばしばまるで互いがいないと生きていてもしかたがないと言わんばかりに、ひっきりなしに友情を確かめ合っているというのに、いざ相手がいなくなれば、驚くほど短い時間で気持ちを切り替える。

どうしてそんなことが出来るのか、理解できなかった。あるいは賢かったのは彼女らのほうであって、わたしが不器用だっただけなのかもしれない。

進学してから、ずいぶん授業が増えた。気が乗らなければ抜け出しても怒られないところは、初等部のときと変わらなかったけれど、逃げ出してゆく先が限られているということまで、前と同じだった。

こないかも知れないいつかを前提にした家政科も保健衛生も、妊娠や育児に関する説明も、ちょっと面白くはなかったけれど、いちばん苦手だったのは、お祈りの時間だった。

信じてもない神様に、赦しを請い、救いを求めるふりをする。ただそれだけのための時間。なんという空疎な祈り！

ここでもわたしは疎外感を味わった――自ら関わり合いを避けようとしていながら、一方ではそんなふうを感じるのも、愚かしいことではあるのだけれど。

日々の祈りは、物心ついてから毎日の習慣だ。いいかげんみんな飽き飽きして、決まり切ったお祈りの文句も棒読みだったり、ふざけあってシスターに注意を受けたりしているのが、長いこと常だった。それなのにこの頃になって、その雰囲気少し変わってきた。

次第にふざけあう子の数が減り、祈りの文句を唱える声に、ある種の、妙に熱っぽい真剣さが混じりはじめた。合間に私語を囁く者は、いつのまにかほとんど居なくなっていた。

皆、何を祈っているのだろう。死んでいった友人たちの冥福を？ 自分の行く末を？ 彼女らは、本気でシスターのいう神様を信じているのだろうか。ちょっと考えればすぐに大人の都合によって作り出された偶像だとわかる、そんな存在を？

その問題を考えるとき、わたしはいつも恐怖した。理解できないものに囲まれているという感覚は、恐ろしかった。馬鹿げたことだと自分でも思っていた――他人に深入りしないと決めた以上、みなが何を信じようが気にしなければいい。そう割り切ってしまう方がいいのに。

ほとんどの授業は、聞こうが聞くまいが何も言われなかったが、いくつかの時間は別だった。大事なお話がありますと、両手を打ち合わせて知らせていた初等部のシスターと同じ。その時間だけは、たとえうまいこと抜け出しても、すぐに連れ戻される。体調を崩して休まざるをえないときには、かならず強制的に補講を受けさせられた。

どのみち逃げたところで、隠れる場所などないに等しい。建物のどこにいてもモニタされているし、シスターの同行なしに、施設の外には出られない。それでも意固地になって逃げ回ることはできたかもしれないが、そこまでの生徒は誰も居なかった。

それだから、必須の授業のあいだ、わたしはたいてい後ろのほうの席でシスターの話を聞き流しながら、いつも、見るともなく教室全体を見渡していた。大事なお話ですと、毎回毎回釘をさすわりに、そうしたどの授業も、無駄ではないかと思えてしかたがなかった。

あるときうっかり時間割を見落として、必修の時間に戻らなかった。授業開始から五分もしないうちに、前の時間からずっと中庭で本を読んでいたわたしを、困り顔のシスターが呼びに来た。あくまで穏やかに、いそいで教室に戻るようにと告げる彼女の、すぐ背後に警備ロボットが待機しているのを、わたしは見た。

「わたしが暴れていやがったら、あれで取り押さえて引きずってゆくつもりだったのですか」  
皮肉交じりに訊ねると、シスターは困ったように微笑んで、「規則なのです」と答えた。こういうときには、必ず彼らを連れ歩かねばならないように、定められているのですと。

その微笑を見ながら、わたしはジョゼのことを思い出した。癩癩を起こし、手に負えないほど暴れて、係官に取り押さえられていたジョゼ。『遠くのコロニー』に連れてゆかれてしまったあの子――

彼女は本当に、死んだのだろうか。

急に降って湧いたその考えは、わたしを恐怖させた。なぜわたしはそんなことを疑問に思うのだろう。

そうでなかったとしたら、彼女はどこに行ったというのか。

慌てて自分の突拍子もない考えを打ち消そうとした。だって、そんなことがあるだろうか？  
言うことを聞かない子を、手に負えないからといって、たとえば死ぬまでずっとどこかに閉じ込めておくだとか、そういうようなことが？

考えすぎだ。わたしはシスターのあとについて歩きながら、何度も首を振って、自分の連想を振り払おうとした。その努力は、その場では成功したように思えた。けれどその晩、わたしは反省室に閉じ込められる夢を見た。いまのセンターではない、初等部のときのあの部屋だ。

それまで反省室の罰を、怖いと思ったことはなかった。ひとりぼっちで過ごす時間は、わたしにとっては大して苦痛にならなかったから。だけどそれは、どんなに長くとも一日かそこらでかならず出してもらえると知っているからだ。

夢の中では、何時間経っても、何日経っても、内側から大声で叫んでドアを叩いても、誰も鍵を開けにはこなかった。

わたしを閉じ込めていることをシスターが忘れてしまったのではないか。あるいは不安のために自分の頭がどうにかして、ほんの一時間を何十倍にも感じているだけで、実際にはたいした時間は過ぎていないのではないか？  
そう思って、口の中で一から順に数字を数えて、だけどいくら数えても、ドアは開かなくて――

目が覚めたとき、自分がどこにいるのかわからなかった。もう見慣れたはずの天井が、見知らぬもののように目に映った。

ジョゼ、可哀想なジョゼ。あの子はどこに行ったのだろうか？

そうこうするうちに、気がつけばひとり、またひとりと、級友たちの姿が減っていった。

その数をいちいち数えることはしなかった。一度も話すことさえしないまま、気がつけばなくなっていた子たちのほうが、多かったのではないかと思う。

それこそが、自分の望み通りだったはずなのに、ときおり――そう、ほんのときおり、急に叫び出したくなる瞬間があった。

十五歳まで生き延びる人間のほうが、少ないのではないか。

その考えは、いつからかずっと胸の隅に居座っていたけれど、誰もその不安を口に出さなかった。言葉にしてしまえば、それが現実のことになるような気がしたのかもしれない。少なく

とも、わたしはそうだった。

あるいはわたしが他の子たちとなるべく親しくならぬようにしていたから、耳に入ってこなかっただけで、ほんとうは皆、教室ではない場所で、そんな話をしているのかもしれないが。

その考えは、はじめは漠然とした不安だったけれど、月日を追うごとに、じわじわとふくれあがっていった。この中の果たして何人が、生きて十五歳の日を迎えるのか？ そもそもそんな子は本当にいるのか？

十五歳になったらと、繰り返すシスター方の話を、真に受けていいものなのか。ほんとうは誰も生きられないのではないか。わたしたちの全員が、じきに死ぬ運命なのだとしたら？

教室が寂しくなってきたと感じる頃になると、ほかのセンターの子たちと合流する。わたしたちの使っている教室に、ほかから誰かが移ってくることもあったし、わたしたちのほうが、別のセンターに移ることもあった。

エリがいなくなったあとで入ってきたアマーリアのように、もういない人間の『姉妹』は何人かやってきたけれど、同じ顔が二人になるということはなかった。

同じように、シスターたちの顔ぶれも入れ替わる。ひとりのシスターが、一年を超えて同じクラスを受け持つことはない。その理由について、納得のいく説明をされた試しはなかったけれど、この点については、不思議には思わなかった。

つまるところは、わたしがしていることと同じなのだ。特定の生徒に深入りしないほうが、彼女らにとっても、気が楽に決まっている。

次から次にめまぐるしく顔ぶれの変わる教室のなかで、アマーリア＝ルーは、いつも明るく振る舞い続けた。

彼女が笑顔でないところを、ほとんど見た記憶がない。ときに誰かと喧嘩をしてふてくされてみせても、たいていの場合、それから五分もしないうちにもう笑い転げている。

教室が暗い雰囲気押し包まれているようなときにも――たとえば立て続けに何人も姿を消した直後などにも、アマーリアは明るい話題を探して皆の気を逸らし、不安そうにしている子に悪戯をしかけ、泣いている子を慰めた。その様子は悪趣味なようにも、滑稽なようにも見えたし、けなげに思えるときもあった。

どうして笑ってられるの？

その問いかけが、彼女の笑顔を見るたびに、すぐ口元までせり上がってくる。けれど結局そのたびに、わたしは言葉を飲み込んで、アマーリアから視線を外した。

やがてわたしたちは十四歳になった。三度目の移動。むっつりと黙りこくったまま、わたしはトラムのかすかな振動に耳を傾けていた。

トラムは相変わらず魔法のように、わたしたちを見知らぬ場所へ連れて行った。

それがあまりにも速やかに、事務的に行われるものだから、たとえば何かの拍子にこの扉が間違っ、行き先ではない場所に接続されたりはしないのだろうかなんていう、とりとめのないことを考えたりもした。だが空想はしょせん空想で、ホームにはきちんと出迎えが来ていた。

最終学年に上がったわたしたちを迎えにきたのは、若い、大柄なシスターだった。

驚いてざわめく生徒たちに向かって、歯を見せてにっこりと笑うと――そんな笑い方をするシスターは、これまで一人も見ることがなかった――彼女は元気いっぱい、声を張り上げた。

「やあ、あんたたちがわたしの教え子になる、可愛い子羊ちゃんたちだね？」

シスター・メルル。彼女はあらゆる意味で、異分子だった。

まず、異様に若かった。それまでシスターといったら、皺だらけでやせっぽっちの、ひどく老いた人がほとんどだった。いまのセンターに移ってからは中年のシスターも何人かいたが、そうした人々も、たいていは小柄で、萎びたように痩せていた。それに比べてシスター・メルルは背が高く、背筋がぴんと伸びていて、ふっくらとした体の線と、目に鮮やかな赤毛を持っていた。それから、鮮やかな青い瞳と。

上機嫌に、わけのわからない鼻歌を歌いながら、彼女はわたしたちを校舎に案内した。

シスター・メルルはおかしな教師だった。

彼女の受け持ちは、歌の授業だった。わたしはお祈りの時間は好きになれなかったけれど、聖歌はきれいではなかった。神様を称える歌詞に、共感できたためしはなくても、きれいなメロディーを追いかけることには、生理的な快感がある。歌を歌っている間は、いくらか気が慰められるような気がした。

シスター・メルルの授業は、まともなものとは言えなかった。ときどき歌詞を正面のスクリーンに映し出す以外、テキストなんか使いもしない。授業の半分は冗談か雑談、何より、彼女の教える歌の半分は、聖歌ではなかった。

そんな歌がこの世に存在するという事実さえ、わたしたちはそのときまで知らなかった。メルルは陽気な曲、軽快なリズムに乗った歌を好んだ。意味のよくわからない言葉遊びのような歌、ここではないどこかのことを歌った空想的な歌。

彼女の教える歌に、ほかのシスター方が眉をひそめても、メルルはちっとも気にしなかった。よく歯を見せて、顔全体で笑った。いつも雑駁な口をきき、生徒のおしゃべりに平気で混ざり、ときには一緒になってほかのシスターから説教を受ける。そんなシスターは、初めてだった。

瞬く間に彼女は生徒たちの人気者になった。いつも人に囲まれているシスター・メルルを、当然ながらわたしは避けたけれど、彼女のほうはいつでもおかまいなしに声を掛けてきた。

「サーシャ、あんた、すてきな声をしているね。声楽に興味は？」

知らない言葉だった。わたしが眉をひそめて首を振ると、メリルはにっこりと笑った。

「歌を歌う勉強のことだよ。どう、歌が好きなのなら、そのうち先生をつけてもらうっていうのは？」

そんなことができるのかという驚きが、なかったわけではないけれど、それよりもその言葉の調子の脳天気さに腹が立つ方が先だった。

「そんなことを勉強して、何になるんです」

声に滲ませた皮肉を、シスター・メリルは汲まなかった。彼女は動じずに、滑舌よく言った。

「好きなものについて学ぶことに、意味があるんだよ」

その答えは意表をついた。そんなことを言うシスターは、これまでいなかったから。

メリルは何気ない調子で言った。「どう？ 考えてみない？」

「――興味ありません」

急いで答えてから、自分の声に滲んだ焦りに、わたしは気がついた。何を焦る必要があるというのだろうか？

シスター・メリルはそう、とあっさり肩をすくめた。さして残念そうでもない仕草だったが、わたしが背中を向けようとする、声が追いかけてきた。

「残念だな。サーシャは何にだったら興味があるんだい？」

わたしは答えなかった。聞こえなかったふりをして、そのまま手洗いに立った。シスター・メリルの声は、さすがにそこまでは追いかけてはこなかった。それもそうだろう、ほかの生徒にまわりつかれて忙しかったはずだから。

トイレの個室でひとりきりになって、シスターの言葉を胸のうちに繰り返した。わたしが、何に興味があるのかですって？

胸のうちに、シスター・メリルに問い返した。それを聞いて、どうするんです。好きなものを学んだからといって、それに何の意味があるっていうんです。

ほかのシスターたちの、よそよそしい遠巻きの優しさにも、虫酸が走る思いがすることがままあったけれど、それよりも何の気なしというふうなそぶりですげずけとものをいうシスター・メリルの言葉のほうが、よけいに耐えがたかった。

この日からわたしは歌への興味を無くした。聖歌も、そうでない歌も、まとめて嫌いになった。そういうことにしておかなければ、耐えがたいような気がしたから。

授業中にも、かたくなに唇を引き結んで歌わなくなったわたしに、シスター・メリルは気づいていたのだろう。わたしが授業を抜け出して、一人で本を読んでいるとき、彼女はよくそれを嗅ぎつけて、ふらりとやってくるようになった。

「やあ、静かないい場所を知ってるね」

中庭の、木立のかげに座っていたわたしを見つけると、シスター・メリルはひらひらと手を振った。

「お説教なら間に合ってます」

わたしがそんなふうに顔をしかめたのは、ちょうどその頃、きまじめな文学の教師から、よく

説教をくらっていたからだった。

ほとんどのシスターは、生徒が授業をろくに聞いていなくても、誰かと一緒に抜け出してどこかでおしゃべりに興じていても、たいした興味も持たないようなのに、どういうわけか新しくやってきた文学の教師ただひとりだけが、やけに厳しかった。生徒に課題を出し、授業を聞き流していれば厳しく叱責する。その剣幕に泣き出す子もいるくらいだった。

「説教？ まさか。わたしもいま、シスター・マリアのお小言から逃げてきたんだよ」

悪戯っぽく笑って背伸びをしながら、メリルはそう言った。奇しくもというべきなのか、必然と思うべきか、それはわたしが辟易していた文学教師、その人の名前だった。

「あの人、昔っからちっとも変わってやしないね。わたしが学生だったころから、あんな調子でみんなに煙たがられてたよ。いい先生なんだけどね」

その言葉に、わたしは混乱した。シスター・メリルはそれに気がつくと、首をかしげて背伸びをやめた。

「どうかした？」

「学生だったんですか？」

「もちろん」

シスターは笑った。「大人は生まれたときからずっと大人だったと思っていた？」

わたしはとっさに羞恥を覚えたけれど、メリルはあぐらをかいて隣に座り、くつくつと笑った。

「実を言えば、わたしも昔はそう思った」

「それじゃあ」とっさに声を上げていた。「十五歳になって、その、結婚を――」

「したよ」

シスター・メリルはうなずいて、ちょっと唇の端をつり上げた。「そしてのこのこ帰ってきたのさ。下の子が五歳になったから」

「え」

わたしが首をかしげると、シスターは真剣な顔になった。「まだ習っていないよね。あと二ヶ月くらいかな、もういつときしたら、詳しい説明があるよ。結婚して、子供を何人か産んで、その子たちがみんな五歳になってしまったら、結婚生活はおしまい。あとはまた皆、ばらばらになってそれぞれの生活を送るのさ」

そんなことは、テキストはもちろん、ライブラリから拾ってきた恋愛小説にさえ、ちっとも書かれていなかった。甘ったるい、ご都合主義の小説の中で、たいていの場合主人公たちは運命の人と巡り会って、幸せな結婚生活を送る――それでめでたしめでたし。あるいは、子供の生まれるところまで。そこまでの描写がせいぜいだった。どの小説も、そこから先の話には触れられていなかった。

わたしが半信半疑の顔をしていたのを見て、シスター・メリルは笑った。「よっぽど、子供らだけでも連れて、どっかに逃げられないかと思ったけどね。まあ、どっかで元気にやってるだろうさ。あたしに似て、二人とも頑丈でしぶといし……またどっちも意地っ張りで、きかん気でねえ」

目を細めて、シスター・メリルは笑った。その顔は、おかしいことだが、寂しそうにも見えたし、自慢げにも見えた。

どうしてそんな表情をするのだろうか。

わたしの視線に気づくと、シスターはばつの悪そうな顔になって、頭を掻いた。

どうしてそんな顔をするんですかと、よほど訊こうかと思った。だけど、わたしが質問を重ねるよりも早く、メリルは鼻を擦って話題を切り替えた。

「ねえ、サーシャ、声楽の件、わたしは本気だよ。考えてみない？」

「――またその話ですか。そんなことを勉強して、何になるんです」

「意味がないと思ってる？」

「ないでしょう。だいたい、なんでそんなに勧めるんです」

声に苛立ちが滲んだのが、自分でもわかった。それでもシスター・メリルはいやな顔ひとつしなかった。

「それがあんたを、救うかもしれないと思うからさ」

わたしは顔をしかめた。その言葉が、シスター一方が押しつけがましく語る、神様のイメージと重なったからだだった。

「聖歌はきれいです」

「人を救うのは、何も神様だけとは限らない」

シスター・メリルは即座に言い切った。わたしはとっさに返答に詰まった。シスターはちょっと微笑んだまま、じっと、わたしの返事を待った。

「――どのみち、けっこうです。興味ありません」

「そう？ まあ、無理強いすることでもないけどね」

今度はあっさりと引き下がって、シスター・メリルは立ち上がった。背中越しにひらひら手を振って、教室棟のほうに戻ってゆく。ゆたかな赤毛が歩みにあわせて揺れるのをぼんやり見送りながら、シスターの言葉を反芻した。

救う？ たかが歌が、いったい何から？

馬鹿馬鹿しい。わたしは首を振って、メリルが去ったのとは反対側に足を向けた。教室に戻る気には、とてなれなかった。

そのころにはもう、クラスの中で顔と名前の一致する子のほうが少なかった。よく知らない子たちに囲まれて、ただで薄膜一枚を隔てたようにどこか遠くで、わたしは十四歳の年を過ごした。

見知らぬ男のもとに嫁がされることも、子供を持つことも、やはり、ちっとも喜ばしいこととは思えなかった。だからといって、いまの暮らしがずっと続いてほしいとも思わない。

ときどき――いや、頻繁に、何もかもが他人事のような気がした。いっそのことさっさと死んでしまった方が、楽なのではないかと思えることもあったが、死ぬことが怖くなくなったわけではなかった。

何もかも、どうにでもなればよいという気になることもあった。そう思う一方で、シスターがしかつめらしく結婚生活についての注意点を語るのを聞いたたびに、やっぱり気がふさいでしかたがなかった。

ときどき授業を抜け出す習慣は続いたけれど、あの中庭には居づらくなって、寮のロビーにすることが多くなった。ここなら夕方になれば生徒たちが行き交うけれど、日中には人気がない。

寮の入り口と廊下のあいだをつなぐだけの場所、やや古びた簡素なソファがふたつ据え付けられているだけの、殺風景な場所だ。おしゃべりをする相手でもいれば別だろうが、ほかには何ができるわけでもない。静かに一人で本を読む分には、あんがい人の往来の多い中庭よりも、快適かもしれなかった。

自分の部屋に籠もっていてもいいのだけれど、朝から晩まで同じ場所でじっとしているのも、それはそれで気が滅入った。

授業中にうろうろしている生徒は、わたしのほかにも大勢いたが、たいていは自室か、中庭か、そうでなければサロンにいて誰かとおしゃべりに興じていることが多かった。ところがある日、珍しいことに、このロビーに先客があった。

色のうすいブロンドを長く伸ばした、やせぎすな子だった。肉がついていないということもあるが、骨格自体が細いというか、薄いというか、いまにも割れて砕けそうな印象がある。わたしの気配を察して振り返った顔には見覚えがあったけれど、名前は知らなかった。

彼女は自分の腹を両腕で抱えるようにして、ソファにうずくまっていた。

見れば脂汗を浮かべて、きつく眉間に皺を寄せていた。生理痛のひどい子は少なからずいるものだけれど、それにしても、尋常のようすではなかった。もともと色白の肌をしているところに血の気が失せて、ひどい顔色になっていた。

「具合、悪いの」

普段は人とあまり関わらないようにしていたけれど、このときばかりはさすがに、無視するには気が引けた。けれど、彼女は首を振った。

「なんでもない」

そういう口調は苦しげで、ほとんどあえぎあえぎという様子だった。

「医務室に――」

「お願いだから。放っておいて」

そこまで言われれば、それ以上しつこく話しかけるのはばかられた。わたしは離れて反対の隅のソファにすわると、ため息を吐いて、自分の端末を開いた。

読みかけの本に集中できる気はしなかったけれど、お気に入りの場所をこの子に譲ってやる気もしなかったし――それに、本当に放っておくのも、いくらなんでも気が引けた。

ほとんど上の空で、目はテキストの上を滑るばかりだったけれど、わたしはあくまで読書をしているというポーズを崩さなかった。

どれくらいの時間が経ただろう、彼女はずっと、ソファの上でうずくまって荒い息を吐いていたけれど、わたしが様子をうかがうと、必ず視線を上げて、拒絶の意思を示した。

やがて、授業もそろそろ終わるかというくらいの時間になって、少しは気分がましになったのか、彼女はおそろおそろといった具合に、ソファから身を起こした。乱れた髪を整えて立ち上がり、そのまま黙って去りかけたけれど、わたしのそばを通り過ぎる一瞬、足を止めて、

「――ありがとう」

聞こえるかどうかくらいの声で、そう言った。わたしが振り向いたときには、もう彼女は背中を向けていて、よろめきながら、振り返りもせずに去って行った。

それからときどき、彼女の姿を見るようになった。

わたしのほうが先にロビーにいたこともあった。そういうとき、彼女はとうてい重いとは思えない体を、かろうじて引きずるようにしながらやってきて、ソファに倒れ込んだ。

苦痛を堪えかねて、低くうめきながら、それでも彼女はわたしに話しかけてこようとはしなかった。わたしも極力放っておこうとした。けれどあるとき、そのかたくなな様子を見ているうちに、なんだか腹立たしいような気がしてきて、彼女のそばに歩み寄った。

「――鎮痛剤は？」

ぶっきらぼうにそう訊ねると、彼女は驚いたようにわたしを見上げて、それから小さく首を振った。

生理痛や頭痛のひどいとき、シスターの誰かに言うか、自分の端末から申請すれば、処方される薬がある。

今日、ここで彼女に会うという確信があったわけではないのけれど、なんとなく思い立って、自分がいつか処方された分の残りを、手元に持ってきていた。彼女の横たわるソファに歩み寄り、錠剤の入った袋を差し出すと、彼女はふたたび首を振った。

「いい。飲んで、ほとんど効かないから」

かすれた声だった。

もっと強い薬なら――わたしがそう口に出すより早く、彼女は囁いた。「誰にも、言わないで」

どうして、とは訊かなかった。聞くまでもないことだったから。

きっとありのままに症状を伝えれば、彼女は連れてゆかれるだろう。どこに？ 医官のところに？ それとも――わかりきった問いだ。わたしは自分の手がいつのまにか冷たくなっている

ことに気がついた。

あらためて近くで眺めれば、彼女は最初に会った日から、さらに痩せたように見えた。

よくもそんな状態になるまで、耐え続けたものだと思う。いままで、連れてゆかれる前に、痛みや体調不良を訴えていた子はいたけれど、そうした子たちは皆、さして経たずにいなくなってしまうのが常だった。

何か出来ることはあるだろうかと考えて、それから、そんなことを考えた自分に動揺した。他人に何かしてあげたいだなんて、ここ何年も、ちらりとも考えたことがなかったはずなのに。

誰とも関わりたくなかった。誰かと親しくなりたくなんかなかった。別れが辛くなるだけだから。

何度か口を開き掛けて、結局は飲み込んだ。だって、わたしに何が出来るだろう？

黙って突っ立っているわたしを、どう思ったのかは知らないが、彼女は歯を食いしばって、自分の腕に爪を立てた。そうやって痛みを耐えようとしているらしかった。

どれくらい、そうしていただろう。あるとき彼女は急に、ひきつるような音を立てて息を吐き

、

「死にたくない……」

あえぐように、そう言った。

返すべき言葉を、わたしは何一つ持たなかった。どんな慰めも嘘も、虚しいばかりのように思えた。

——これが、自分の未来の姿だ。

そう考えた瞬間、背筋が粟だった。彼女は大きくあえいで、自分の腕をかきむしった。そうしながら、苦しげに囁いた。死にたくない。死にたくない。死にたくない。何度も執拗に繰り返されるその言葉が、本当に彼女の唇からこぼれる悲鳴なのか、それとも自分の内なる声なのか、だんだんわからなくなって、わたしは混乱した。死にたくない。

いっそ十五になる前に、さっさと死んでしまった方がましなのではないか——わたしはたしかに、そう思っていたはずだった。生き延びた先の未来に希望なんか持てなかった。じきに十五歳になるということが、近頃では、嫌でしかたがなかった。それだというのに、死は恐ろしかった。

気がついたら、彼女の手を握っていた。やせこけて骨張った手、長い指。

脂汗にまみれた冷たい指が、遠慮の無い強さでわたしの手を握り返した。とっさに悲鳴を上げそうになった。それくらい、力任せの握り方だった。

歯を食いしばって、彼女はうめいた。この女の感じている苦痛と恐怖が、その指から流れ込んでくるような錯覚を覚えて、わたしはおびえた。空調はちゃんと効いているはずなのに、ふたりきりのロビーは、寒くてしかたがなかった。

長い、長い時間が経って、やがて、ゆっくりと彼女は手の力を抜いた。

「ごめんなさい……」

その声はひどく掠れていたけれど、気がつけば、いくらか唇には色が戻ったようだった。わたしは黙って首を振った。無意識に力が入っていた肩がこわばって、きしむように痛んだ。

彼女がふらりと部屋に戻っていったあと、わたしは鳥肌の立った二の腕をさすりながら、教室に戻った。授業なんてどうでもよかったけれど、誰か、人の居るところにいたかった。そんなふうに思うのは初めてのような気がした。そこにいるのが理解できない遠い同級生たちでも、ちょっと好きになれない教師でも、この際かまわなかった。とにかく、ひとりきりの場所にいたくなかった。

授業の途中で断りもなく教室に入り、自分の席に着いた。シスターは話を途切れさせることも、わたしのほうに視線をくれることもせず、何もなかったように話を続けた。それを右から左に聞き流しながら、わたしはいつまでも自分の手をさすっていた。彼女が握りしめていたほうの手を。

ある午後いつものように授業を抜け出して寮のロビーに行くと、あの子がぐったりとソファーに横たわっていた。

かすかに顔を持ち上げてわたしを見ると、彼女は何か言いかけるように、唇を動かした。

胃の縮むような感覚を覚えながら、そばに歩み寄って顔を近づけた。けれど彼女の口から、言葉は出てこなかった。ただブルーグレーの瞳が、何かを訴えかけるようにわたしを見上げた。

彼女の指が、ぴくりと震えた。それで反射的に、わたしは彼女の手を取った。彼女は弱々しくまぶたを震わせて、眠るように目を閉じると、ひとつ、大きく息を吐いた。

ほんとうに、ただ眠ったのではないかと思いたかった。とっさに頬に触れたときには、まだ温かかった。唇が薄く開いたままになって、そこから白い歯が覗いていた。

もう息はしていなかった。

ゆるやかにほどけた彼女の長い指に、自分の指を絡めたまま、わたしはじっと座っていた。

どれくらいの間、そうしていただろう。一時間や二時間ではきかなかったのはたしかだ。時間の感覚がすっかりどこかに消えてしまって、握ったままの手がだんだんと冷えてゆくのだが、やけに生々しかった。

やがて授業が終わったのか、気の早い生徒たちが三人連れだって、騒々しくおしゃべりをしながら戻ってきた。彼女らはわたしたちを見てちょっと怪訝そうな顔をしたけれど、いったんはそのまま通り過ぎかけた。

「イルマ？」

中の一人が、話をやめて立ち止まった。その声を聴きながら、ああ、この子はイルマというのかと、そんなことをぼんやり考えた。

「大丈夫なの？　このごろ調子が悪そうにしてたけど……」

いつときわたしは返事をしなかった。彼女らが心配そうにしながらすぐそばまで歩み寄ってきたところで、ようやく口を開く気になった。「死んだの」

「え……」

「さっきまで、生きてた。けどもう、息をしていないわ」

いやに冷えた声が出た。自分が何に怒っているのか、自分でもよくわかっていなかった。わたしはいつもそうだ。いつも、何かに怒ってばかりいる。

彼女らはようやく事態を理解したようすで、小さく悲鳴を上げた。ふたりはその場にへたり込み、一人だけが、かろうじて近づいてくると、冷たくなった彼女の頬におっかなびっくり触れて、震えだした。

人が死んでいるのを見たのは、もちろん、この日が初めてだった。彼女らにとってもそうだっただろう。その瞬間まで、ずっと、死というのはわたしたちにとって、実体を持たない漠然とした恐怖だった。

この日、初めて死はそのほんとうの姿をわたしの前に見せた。

死ぬというのは、動かなくなることだ。息をしなくなって、冷たく、重く、固い、肉と骨の塊

になることだ。空想の中の天の国へと旅だってゆくことなんかではない。

次はお前の番だと、胸の中でつめたく誰かが囁いた。

そう、つぎはわたしの番だ。わたしが苦しんで、痛みにもだえながら、死んでゆく番。

まだひとりが断続的に悲鳴を上げ続けていた。あるいはそれは、嗚咽だったのかもしれない。

三人の誰かがシスターを呼んだらしかった。いくつもの足音が近づいてくるのを、どこか遠くの物音のように聞きながら、わたしはいつまでも彼女の冷えた手を握っていた。

文学教師のシスター・マリアは、誰より生徒に厳しく、誰より泣き虫だった。

この半年ばかりわたしたちを受け持っている、この最年長のシスターは、生徒から意地悪な口をきかれては怒りながら泣き、同僚と衝突しては心を痛めて泣き、誰かが死んだと言っては泣いた。痩せて萎びた小さな体の、どこにそんなエネルギーがあるのかと思うくらい、とにかく感情の起伏の激しい人だった。

イルマが死んだ日のホームルームでも、シスター・マリアはやっぱり言葉を詰まらせながら泣いた。わたしは教室の後ろのほうの席で、そのようすを見ながら、腹を立てていた。何ともお手軽な涙だ――

「忍耐強く、勇気に満ちて、いつも微笑みをたやさなかった彼女の、冥福を祈りましょう。イルマの魂が、天の神様とともにありますように」

涙ぐみながら、シスターは滔々と続けた。神様の御許。安らかな眠り。シスターの口から流れ出る、繰り返されてきた定型句の何が、そんなに自分の勘にさわったのか、わからない。とにかくその瞬間、自分で押し留める間もなく、思ったことがそのまま口から出た。「よくわかったようなことが言えますね」

しん、と教室が静まりかえった。怒り出すかよけいに泣き出すかと思ったシスター・マリアは、じっと、涙に濡れたまなざしで、わたしを見た。責めるようにでも、怒るようにでもなかった。ただ、傷ついたような目をしていた。

だけど、わたしはそれで罪悪感をおぼえたりはしなかった。むしろ、よけいに腹を立てたかもしれない。

「安らかな眠り？ 勇気ある？ 彼女はあんなに苦しんでいたのに、あなたはいったい彼女の何を理解していたというんです」

そう吐き捨てながら、ああでもあの子はもう痛くはないのだなと、そんなことを思った。シスターをにらみつけていても、わたしの目は違うものを見ていた。イルマの死に顔、青ざめた唇の隙間から見えていた歯、枯れたような色の薄いブロンドを。人目をさけてひとりで苦しみ、死にたくないと繰り返した彼女の、力任せにわたしの手にすがりついておびえていたあの手の、痩せほそった指を。

荒い足音がした。

教室の後ろのほうに控えていたシスター・メリルが、とつぜん足音も高く歩み寄ってきて、乱暴にわたしの腕をつかんだ。

そのまま引きずられるように、立ち上がらせられた。ものすごい力だった。

「シスター・メリル……」

壇上のシスター・マリアが、困惑したように、彼女の名前を呼んだ。メリルは首を振って、「彼女をお借りします」

それだけをいい、わたしの腕を引いた。逆らえない力だった。ざわつく教室を後にして、シスター・メリルはわたしを引きずっていった。

反省室にたたき込まれるのかと考えたのは、初等部のころにそういう経験があったからだ。だがメリルは、いくつかある会議室のひとつに、わたしを連れていった。生徒が出入りする機会のあまりない、管理棟の片隅。空調の音が寒々しく響く、ひとけのない校舎の一部屋に。

なんなんですか、と言おうとした。

ただ言葉は喉につかえて出てこなかった。シスター・メリルは、これまで誰の表情にも見たことのないような、激しい怒りを浮かべていた。

「ショックなのはわかる。大人に、自分たちの気持ちがわかるはずがないと、あんたがそう感じるのもよくわかる」

さっきまでの勢いとは裏腹の、ひどく冷たい声で、メリルは言った。「だけど、じゃあ、シスター・マリアがどんなひとか、あんたは知っているのか」

反論、しようとした。けれどそれを許さない強さで、メリルはわたしをにらんだ。

「あの人があんなに痩せている理由を、知っているか。生徒が一人死ぬたびに、いつも苦しんでいるのを、夜も眠れずに、まともに食べられもしなくなるのを、知っているのか。一人死んでいくたびに、いつまでも自分の身を削るようにして、悲しんでいるのを、毎晩かかさず礼拝堂で、長い長い時間、死者のために祈っているのを」

聞きたくなかった。わたしはメリルの手を振り払おうとした。その手を間髪いれず掴みなおして、シスター・メリルは叫んだ。「聞きなさい！」

声が反響して、幾重にも響いた。

「シスター・マリアがこれまで彼女が見送った生徒が、どれくらいいるか、あんたに想像がつく？ 死んだ自分の生徒の名前を、あの人は、ぜんぶ覚えているんだ。そういう先生なんだよ。そういう人なんだ――」

――うるさい。

そう叫んだんだと、思う。その自分の声が自分の耳に届いたという確かな感覚がなかった。シスター・メリルが一瞬押し黙って、唇をゆがめたことだけ、なぜか切り取ったようにくっきりと記憶に残っている。

「そんなの全部、自己満足じゃない。あなたたちに何がわかるっていうの――」喉が引きつれたように痛んだ。自分の言葉が酸のようだった。

「――あなたたちは、生き延びたくせに！」

そのあとどうやって自分の部屋に戻ったのか、覚えていない。シスター・メリルがどんな顔をしたのかも。少なくとも、自室まで押しかけてきて説教の続きをしたりはしなかったのだけは確かだ。

死んでいった同級生の数を、数えていたわけではなかった。それでも、もう初等部のときからの知り合いが数えるほども残っていないことは、嫌でもわかっていた。みんな、みんな、死んでいくのだ。生きられる人間は、ほんのひとにぎり。

手に、まだイルマの指の感触が残っていた。

その夜、一睡もできなかった。消灯時刻が過ぎて照明の落とされた部屋で、壁をじっとにらみつけたまま、ベッドの上で膝を抱えて、いつまでも手の甲をさすっていた。

翌朝、どうしても部屋を出る気になれなくて、閉じこもっていた。

寮の廊下を人の気配が通り過ぎていくのを聞きながら、ベッドの中で丸まっていた。足音がしなくなったころ、朝食の時間がとくに過ぎていくことに気づいたけれど、どのみち食欲はなかった。

必須のはずの授業をひとつ、無視したことに気がついたのも、その時間がとくに終わったあとのことだった。珍しいことに、誰も連れ出しにやってこなかった。いつもなら、どこにいてもシスターの誰かがやってくるはずなのに。

その謎の答えは、昼食時を過ぎたころに向こうからやってきた。

「サーシャ。起きてる？ 食事を抜くのはよくないよ」

ドアの向こうからそう声をかけられたとき、わたしは気まずい思いをもてあました。シスター・メリルの声だった。昨日の今日で、よくもまあ、何事もなかったような声を出せるものだ。

「一夕食には出ます」

「ここを開けてくれれば、いいもの持ってきたんだけどな。一緒にお茶にしないかい？」

いたずらっぽい含み笑いで、シスター・メリルは言った。子供扱いにむっとしなかったわけではないし、食べ物につられたと思うのは癪だったけれど、昨夜の引け目が勝って、わたしは渋々ドアを開けた。

甘いおいの焼き菓子を持って、メリルはそこに立っていた。私室でものを食べることも、決まった時間以外に間食を取ることも、もちろん規則で禁じられていた。こっそり食べ物を持ち込む者はいくらでもいるけれど、少なくともシスター自ら堂々と違反を奨励するなんていうのは、彼女くらいのものだっただろう。わたしの呆れ顔など意にも介さず、メリルはまるで秘密を共有する悪童のように笑った。

「ここは食事がまずいね。健康管理を徹底するのもいいけれど、やっぱり食には楽しみがないと」

そう言いながらわたしの部屋に上がり込んだメリルは、さりげない口調で付け足した。「補講は明日の夕方だよ」

誰も呼び立てにこなかったのは、彼女が口をきいたからに違いなかった。わたしは黙ってうなずいた。

「焼きたてだよ。暖かいうちに食べよう」

返事も待たずに自分の分を口に放り込んで、シスターは頬をほころばせた。まるきり子供みたいな顔だった。

促されて、焼き菓子をつまんだ。食欲がないと思っていたけれど、食べ始めると胃が動いた。口の中で溶けた菓子は、においから想像したよりもずっと甘かった。

手回しのいいことに、メリルは飲み物まで持ち込んでいた。マグを抱えて、まだ温かいお茶を舐めるように飲むと、ほろ苦い味が口のなかに広がって、後味を流した。

おいしいと、そう感じた瞬間、鈍い痛みが胸に走った。それは罪悪感だった。あの子は死んで

しまっ、もうお菓子を食することはない。わたしは生きてる。

シスター・メリルが何か言いたげな表情をしたので、それを遮るために、興味もなかった話をつないだ。「――ここは、って、前にいたセンターでは違ったんですか」

「いや、似たり寄ったりさ。じゃなくて、家族といたころにね。妊娠中だけはうるさいこと言われたけど、あとはたいてい好きなものが食べられた。――あんたはセンター育ちだから、そんな暮らし、経験したことないだろ。結婚する楽しみがひとつ増えたね」

「楽しみなんて」

吐き捨てるように言うと、メリルは困ったように笑って、鼻を掻いた。

「シスター・マリアなんかは、自己管理が大事とか、道徳がどうか、小難しいことばかりいうけどさ。わたしに言わせりゃ、生きてるうちにせいぜい何でも楽しんだほうが勝ちだよ。好きな食べ物を味わって、好きな歌でも歌ってさ」

その言いぐさに、腹が立たなかったわけではない。だけど、昨日の続きをやらかす気力はなかった。代わりにせめてもの皮肉を込めて、わたしは囁いた。「天の国には、おいしいものがたくさんあるんじゃないんですか？」

「あんた、天の国を信じているの？ 意外だったね」

メリルは本当に意外そうに、そう言った。予想外の切り返しに、わたしは目をしばたいた。

「シスターは、信じていないんですか」

「さあ、どうかな。昔は信じていたような気がするけど……」

言いながら、メリルは首をかしげて、何かを思い出そうとするように、遠くに視線を投げた。

「うん――そうだね。あんたくらいの年のころには、神様が見守ってくださっていて、人は死んだら天の国にゆくのだと思ってた。――いまでも、信じられるなら、信じていたほうがいいと、そう思いはするんだよ。そのほうが楽になれるのなら」そこで言葉を切って、シスター・メリルは苦笑した。「でも、あんたはそうじゃないよね」

まるで、それが不幸なことであるかのように、シスターは言った。

シスター・メリルは最後の菓子を口の中に放り込んで、小さく笑った。それまでの快活な笑顔とは違う、どこか苦いような、皮肉っぽい笑い方だった。それから急に、真顔になって、

「だけどね、サーシャ。神様が必要な人もいるんだ。そこだけは、わかっていたほうがいい。あんたの目には、馬鹿馬鹿しく見えるかもしれなくても。神様にすがっていなけりゃ、つらくてとても生きていられないような人も、いるんだよ……」

わたしはうなずかなかった。言葉が無意識に、口をついて出た。

「神様がお決めになったのでないなら、なぜ生き延びられる人と、そうでない人がいるんです。シスター方と、ほかの子たちは、何が違うんです」

口にしておきながら、自分がひどく馬鹿げたことを言っている気がした。これではまるで、わたしが神様の存在を、信じたがっていたみたいじゃないか――

長い沈黙があった。

急に黙ってしまったメリルをいぶかしく思って、わたしは顔を上げた。「シスター・メリル？」

」

ああ――ため息のような返答があった。

「――黙っているのも不正直だと思うから、本当のことを言うよ、サーシャ」

彼女らしくない、歯切れの悪い言い方だった。手の中のお茶が、いつの間にかすっかり冷たくなっていくことに気がついた。もう香りも何も飛んで、飲む気にはなれなかった。同じことに気がついたのだろう、メリルはわたしの手からカップを取り上げて、作り付けのテーブルの上に置いた。それからやっと、顔を上げて、わたしの顔を見た。

「シスターたちのほとんどは、小さいころに、そういう処置を受けているんだよ」

一瞬、耳から入ってきた言葉の意味がわからなかった。

あんたたちの中に、やけに早くからいなくなった子がいただろうと、シスターは言った。真っ先にエリの顔が浮かんだ。その記憶のなかの顔が、いまのアマーリアの顔と半ば混じっておぼろげになっているのに気づいて、わたしはショックを受けた。

わたしの動揺には気づかないようすで、メリルは低い声で囁いた。

「あれはたいてい、そういうことなんだ。全員が全員ではないけれど――別の理由で、特別な施設に移る子もいるらしいから。とにかく、それに選ばれた子は、うんと小さいうちに、手術をする。そうしたら、死なないとはいわないけれど、ずいぶん死にくい体になるんだって」

その言葉をきちんと自分の中で咀嚼するには、時間が必要だった。とっさに理解できたのは、そう――

「じゃあ、エリは？ いまも生きているの？ シスターになって？」

自分の口からこぼれたのは、すがりつくような声だった。だけどメリルは静かに首を振った。

「――わたしには、わからないよ。その子がそのために連れて行かれたのかどうか、確証はないし、わたしたちにも、そういうことを調べることは、できないんだ」

メリルは目を伏せた。わたしはショックを受けて、唇を引き結んだ。どう考えていいかわからなかった。エリが活着ている可能性を喜んでいいのか――手紙の返事が来なかったということは、それはないということなのか。それとも規則だか何だかのせいで、連絡が禁じられているだけなのか。どうして他の子も、同じように生きる可能性を与えられないのか。

「その手術を受けられる人と、そうでない人を、誰が決めるんです」

とっさに尖った声が出た。

シスター・メリルは皮肉っぽく笑って、さっきまでの話と矛盾することを言った。「天の神様が」

「――神様なんて、いないんでしょう」

「そうだね」

「じゃあ、なんでそんなこと言うんです」

「自分の意思ではないということさ」

言って、メリルは笑みを消した。「もちろん、その子を受け持つシスターの決定でもない。最初から決まっいて、わたしたちはそれをあとで知らされる。わたしが知っているのは、その手術を受けたら、もう子供を産むことはできなくなるってことと、手術をしても必ず生きられるわけじゃなくて、その手術のせいで死んでしまう子もいるらしいってことだけだ」

誰も、自分から望んでその手術を受けたわけではないんだよと、メリルは繰り返した。それはわたしの耳には、言い訳にしか聞こえなかった。のうのうと自分が生きていることを正当化するための言葉としか。はじめから、選ばれた人たち――

そういうことか、と思った。シスター方の態度の多くが、腑に落ちたように思えた。そういうことなら、さぞ生徒たちを哀れみの目で見たくもなるだろう。

幼い頃、シスターたちは、自分たちとは別の生き物のようだと思っていた。メリルの言葉がその感覚を裏付けた。

彼女らは、ほんとうに別の生き物なのだ。

アマーリア＝ルーにその話を打ち明けようと思ったのは、どうしてだっただろう。

初等部のときを最後に、わたしは人に関わることをやめたはずだった。彼女のこともずっと、できるだけ意識しないように努めてきた。

それだというのに、わたしは彼女を呼び出した。おかしな話なのだけれど、そのときは、そうせずにいられなかった。

授業中の、寮のロビー。イルマが息を引き取ったのと同じベンチに、わたしはアマーリアを呼び出した。ほかの生徒のいないところで話をしたかったし、そのためにはここがいちばん好都合だった。

例の事件以来、ますますここからは人の足が遠のいていた。みな教室との行き帰りに足早に通り過ぎるばかりで、自由時間にさえ、この場所で話し込む生徒はほとんどいない。

アマーリアはなぜ、律儀にやってきたのだろう。入学直後、誰かの落とし物を手に話しかけてきたあのとき以来、わたしたちはほとんど言葉を交わしたことさえなかったはずなのに。

わたしはほかの子に対してそうする以上に、あからさまに彼女を避けていたし、彼女もそれを察しているようだった。なのに、彼女はすぐにやってきた。単純に彼女がお人好しだということなのか、あるいは授業に嫌気がさしていたのかもしれないけれど……

「どうかしたの？　なんだか顔色が悪いわ」

姿を見せるなり、そんなふう顔をのぞき込んできたアマーリアに、わたしはすべてを打ち明けた。

七つのときに居なくなったエリのこと。返事の帰ってこなかった手紙のこと。メリルから聞いた話。死にたくないと呼んだイルマのこと。

順序よく冷静に話すことなどできなかった。口から飛び出す言葉は、自分でそうとわかるほど混乱していた。

アマーリアはわたしの隣に、寄り添うように座って、ときおり相づちを挟むほかは、ただ黙ってその話を聞いていた。苛立つ様子もなく、かといって、同調するでもなく。彼女の態度があまりにも穏やかで、平然としていたことが、わたしを打ちのめした。

「どうして、あなたは、あなたたちは、平気でいられるの――」

話の終わりに、わたしはアマーリアにそう言った。ほとんどくっつかかかるといえるような調子だった。

「あなたは死ぬのが怖くはないの？」

アマーリアはすぐには答えず、黙ったまま、小さく首をかしげた。そのしぐさは言葉を探しているというよりも、自分の胸の内をのぞき込もうとしているように、わたしの目にはうつった。

いっときして、彼女はようやく、ぽつりと答えた。「――どうかしら。あんまり考えないようにしているもの」

わたしは彼女に、どんな返事を期待していたのだろうか？ どうして、あのときのアマーリアの態度に、あんなにショックを受けたのだろうか。

「サーシャ、あなた、怒っているのね」

アマーリアは急に顔を上げて、そんなことを言った。

そのときの彼女は、不思議な目をしていて、呆れているとか、迷惑がっているとか、そういうわかりやすい感情は、そこには見あたらなかった。といって、まったくの無表情というのでもない。強いていうなら――そう、わたしのことを、うらやんでいるように見えた。

だけどそれはおかしい話だった。いったい彼女が、わたしの何をうらやましがるというのだろうか。

「あなたは、腹が立たないの？ 悔しくはないの――」

わたしは震える声で問いただした。彼女が、ほかの皆が、どうして怒らずにいられるのか、理解しがたかった。シスターたちの勝手な理屈に、嘘に。自分たちの置かれた運命に。

アマーリアはふっと視線を外して、どこか遠くを見るような目をした。

「さあ。ずっと前には、怒っていたような気もするけれど。怒ったって、結局、何も変わらないし……」

なぜだかちょっと微笑んで、アマーリアは続けた。「それに、怒ったら、悲しくなるじゃない」

「悲しく……？」

思わず問い返した。言われたことの意味が理解できなかった。アマーリアはうなずいて、そっと囁いた。「あなた、いま、とても悲しそうよ」

急に、息が苦しくなった。

とつぜん突き上げてきた感情に、喉を詰まらせて、わたしは泣いた。

アマーリアは黙って隣に座っていた。ときどきわたしの背中をさすりながら、わたしが泣き止むまで、ずっとそこにいた。

彼女の本心がどこにあるのかなんて、相変わらずわからなかった。ただ、その手つきは優しく、彼女の手のはらは温かくて、それがどうしようもなく、わたしにエリを思い出させた。

じきにやってくるはずだった自分の番は、なかなか迫ってこなかった。

十五歳になったら――

期日が迫ってくるにつれて、恐怖はじりじりと増していった。あんなに死ぬことが怖かったというのに、おかしいもので、今度は自分がなかなか死なないことが怖かった。

見知らぬ部屋に怪物と一緒に閉じ込められて、おびえながら逃げ回る夢を見た。自分の腹を食い破って、小さな怪物が飛び出してくる夢を見た。眠りはつねに浅く、睡眠不足のためにいつも頭が重かった。

反対に皆は、そわそわと落ち着かないようすを見せ始めた。浮かれたようにはしゃぐ子もいた――新しい生活に想像を膨らませて、まだ見ぬ夫や我が子のことを、ああでもないこうでもないと言合子たちも。どうやら生きてその日を迎えられるそうだとすることを、彼女らは喜んでいた。

どうして彼女らがそんなふうになつて楽天的になれるのか、わたしにはわからなかった。クラスメイトたちは相変わらず、言葉の通じない異様な存在にしか思えなかった。

卒業のその朝がやってきたとき、どうしてもその事実が信じられなかった。

この日まで生き延びたということに、何の喜びもなかった。こんなはずはなかったのにという、裏切られたような感情だけが胸を占めていた。

生き残ったクラスメイトたちは、卒業セレモニーに列席して、その足でそれぞれの新しい暮らしに向かってゆくはずだった。シスター方がいうところの、定められた伴侶の元に。

部屋に立てこもったのは、ほとんど発作的な行動だった。

電子鍵なんか簡単に開けられてしまうから、衣装だんすだの寝台だのを動かせるかぎり強引に動かして、ドアを内側からふさいだ。無理に寝台を引きずった痕が、床にひっかいたような傷を残した。その反抗の爪痕が、いかにもささやかな悪あがきに思えて、忌々しかった。

いつまでも姿を見せないことで、しびれを切らしたのだろう、シスター・マリアから端末に連絡が入ったけれど、それも無視した。

部屋にはシャワーもトイレもあるから水の心配はないけれど、食べるものがない。たんすに手をかけたあたりでそのことに気づきはしたけれど、思いとどまるつもりはなかった。

飢えれば人は死ぬのだということを、知識としては知っていたけれど、それでもいいと思っていた。

動かせるものがなくなってしまうと、ドアから少し距離を置いて、床の上に座り込んだ。そのままいつか、ぼんやりと膝を抱えていた。疲れていたけれど、目は冴えていて、眠気はちっともおとずれなかった。

卒業式のはじまる一時間ほど前になって、次から次に通信が入った。それがあまりにうっとうしかったので、いっそドアに隙間をあけて端末を部屋の外に放り出そうかと思ったけれど、実行する直前で思いとどまった。これを手放してしまえば、本を読めなくなる。死んでもいいと言いながら、いまさらそんなことに未練があるというのも、おかしい話なのだけれど。

通信機能をすべて切ってしまうと、今度は端末ではなく網膜表示のほうに、緊急通信の赤い表示が浮かび上がった。これもオフに出来たらいいのにと考えたけれど、やり方が判らなかった。それでも、自分の目をめぐりだしてやりたいと思うほどわずらわしかったのは最初の三十分ばかりのことで、あとはほとんど気にならなくなった。

やがて足音が近づいてくるのがわかった。誰かがやってくる。

シスター・マリアの声がした。

「サーシャ？ 中にいるの？」

白々しい、と思った。居場所はどうせモニタしているのだろうに。これまでだって、どこに隠れていても、いざとなったら誰かしら嗅ぎつけてやってきたのだ。

「もう卒業式が始まりますよ。具合が悪いの？ ねえ、声が出せるなら返事をして」

「わたしのことは、放っておいていただけませんか。シスターこそ、急いでお戻りにならないといけないのでは？」

皮肉まじりの声で、そう答えた。安堵の気配が、ドア越しに伝わってくる。強攻策に出るのは、ひとまず待つつもりになったらしい。

「お式が終わったら、みんな、もう出発してしまうのよ。会えるのは今日が最後なのよ、あなた、わかっていて？」

「承知しておりますとも、シスター。誰とも会いたくなんかないんです。クラスの皆とも、もちろん花婿なんていうものにも」

言いながら、アマーリアの顔が一瞬頭をよぎった。彼女はどんな表情をしているだろう——今日の日を喜んでいるだろうか。それともあの日のように、自分が嬉しいのかどうかもよくわからないような顔をしているだろうか。

わたしは首を振って、それ以上彼女のことを考えるのをやめた。どのみち顔を見たところで、話すことなどなにもない。

「サーシャ……」

何か言いかけるシスターの口をふさぎたくて、わたしは叫んだ。「結婚なんてごめんだわ。子供を産むのもまっぴらよ。それくらいなら、もう、ここで死んでしまったほうがましだわ」

「——そんなことを言うものではありません。サーシャ、みんな悲しみます」

その声は、まるで本当に悲しんでいるように聞こえたけれど、わたしは笑って取り合わなかった。「みんな？ みんなって誰？」

「わたしや、ほかのシスター方や、クラスの皆です」

シスター・マリアの言葉はいかにも空々しく響いた。いつも生徒思いのふりをして、恩着せがましい顔をしておきながら、この人はいったい生徒たちの何を見てきたのだろうと思った。わたしとの別れを惜しんでくれる子が、ひとりでもいるとは思えなかった。皆の様子を注意して見ていたのなら、そんなことは明らかだっただろうに。

自分の善良さをつゆほども疑っていないシスター・マリアは、誠実そのものの口調で続けた。

「——それから、あなたを待っている伴侶も」

あまりにも白々しい言い分に、わたしは失笑した。「顔さえ見たことがないのに？」

「サーシャ、困らせないで——そうじゃないと」

「そうじゃないと、どうなんです。警備ロボットか係官が大挙してやってきて、わたしの首に縄でもつけて引きずってゆくのかしら」

言っているうちに、怒りが腹の底から突き上げてきて、わたしは声を張り上げた。「それとも言うことを聞かない子供ひとりなんか、どこかにやってしまう？ ジョゼのように！」

はじけるように、悲しみがあふれた。ジョゼ——可哀想なジョゼ。どうしてだろう、わたしはちっともあの子のことが好きではなかったのに。彼女は本当に、天命とやらによって死んだのだろうか？ それとも——

「ジョゼ？ 何のことをいっているんです、サーシャ。それに、縄なんて、とんでもない」

「そうかしら」

気がついたときには、涙が頬を伝っていた。「どうにでも、お好きなようになさるといいわ。どうせそこにも警備ロボットがいるんでしょう。それが規則ですものね」

「サーシャ……」

途方に暮れたようなシスターの声に、足音が重なった。また誰かがやってきたらしかった。

「シスター・マリア。あなたは式典のほうへ。大事なお役目があるのでしょうか」

メリルの声だった。焦りも苦々しさもない、いつもの快活な調子だった——場違いなほど明るい、気楽な声。

「ええ、だけど……」

「わたしなら、抜けたところで進行に支障ありませんから」

ひとしきりやりとりがあって、やがて、ひとつの足音が遠ざかっていった。「さて、聞いているかい、サーシャ、気むずかし屋のお姫様？」

「——そのふざけた話し方はよしていただけます？」

たっぷり棘をはらんだ言葉にも、メリルは動じなかった。笑い含みの声が出た。「わたしもよく意固地だと言われるが、サーシャ、あんたの根性まがりもたいしたもんだ」

むっとしたけれど、それについて言い返す気はなかった。自分の性格がねじ曲がっていることは、いやになるほどわかっている。

「——いいのかい。このまま二時間もしたら、皆、行ってしまうよ。セレモニーなんかどうだっていいが、お別れを言っておきたい子が、いるんじゃないのか」

「お別れなんて！」

吐き捨てるように言って、わたしは頬の涙を乱暴にぬぐった。「何をどう言っても無駄です。わたしは結婚なんてまっぴらだし、これ以上あなた方の都合に振り回されるのは、もういやなの。どうしてもというなら、力づくで引きずっていったらいいがです。これまでそうしてきたように」

「いや、まあ、その話はあとにしよう。そんなことのために来たわけじゃないよ」

メリルの言葉に、わたしは眉をひそめた。だけどシスターは気にしないようすで、あっさりとした。続けた。「わたしは、あんたと話がしたくて来たんだよ。大丈夫、隙を見てドアをこじ開けたりはしないから」

「話なんて、何をいまさら――」

「まあ、そう言わない。あんた、言いたいこと、あるんだろ。ずっと怒ってるんだろ。――聞くよ」

シスターの声の位置が、心なしか低くなった。ドアの前に座ったのかもしれない。

その見透かすようなものの言い方が癪に障った。けれど、そのままじっと黙り込んだシスター・メリルに、わたしは結局のところ根負けした。

「――わたしにはわかりません。結婚だの、子供を産むだの、そんなことに、何の意味があるんです？ 次の世代を残すことが使命だなんて――シスター方はみんなそう仰るけれど、そんなこと、いったいどこの誰が決めたっていうんです。あなたがたの自己満足に、どうしてわたしが付き合わされなくてはならないんです？」

「子供ができてみりゃわかる――たって、納得しないんだらうね」

頭を掻くような気配があって、少しの間後に、シスターは低い声を出した。「サーシャ。あんた、生まれてきてよかったと思うことはあるかい。生きてきてよかったと、そう感じたことは？」

「――何です、急に」

「いいから答えな」

そう言われても、とっさに何も浮かばなかった。そんなことをまともに考えたことが、これまでにたったの一度でもあったらうか？

わたしが答えないでいると、シスター・メリルは低い声で続けた。「これから先でもいい。そういう日が、死ぬまでに一日でもあったなら、あんたが生まれてきたことに、意味はあるさ。いつか生まれてくるあんたの子供にも、きっとそういう日があると、わたしは思う……」

「すぐに死んでしまっても？」

「そうと決まったわけじゃない」

「決まっているも同然じゃありませんか。最初にわたしと同じクラスだった子たちが、今日のセレモニーに、どれだけ出ていると思うんです」

「だけどあんたは、生きている」

その言葉に、かっとなった。好きでここにいるわけではなかった。

どうしてわたしだったのだろう。

エリではなく、ジョゼでもなく、あんなに死ぬのを怖がっていたイルマでもなく。いつか出会う伴侶とやらを、楽しみにしたはずのみんなではなく、なぜわたしが生き残らなくてはならなかったのか。

「ええ。まだ、いまは。だけどそれだって――」

「先のことは、誰にもわからない。誰にもだ、サーシャ」

メリルは言った。心にもないことを――そう声を上げかけたわたしを制するように、シスターは疲れた声を出した。

「男の子たちのことについて、どんなふうに聞いているかい。――いや、どうせわたしが学生だったところと同じだろう。わたしたち女とは、体のつくりが違って、子供を産めるようにはで

きていない。頑丈で、たいていはわたしたちよりももう少しばかり長生きする。それくらいのことしか教わっていない、あとは当たりさわりのない恋愛小説に書かれているようなことばかりだ。そうだね？」

彼女が何を言おうとしているのかわからなくて、わたしは眉をひそめた。メリルはわたしの返事を待たずに続けた。

「あんたが怒るのも、わかるんだ。大人はいつだって、肝心なことを隠す。嘘をつくか、そうでなければ黙っている」

自分自身が怒っているような口調で、メリルは言った。「わたしたちの多くが短命で死ぬのは、病気のせいだっていうのは、もうわかっているだろう、サーシャ。そいつはね、女だけが罹る、病気なんだ」

メリルの言葉の意味を理解するのに、時間がかかった。

世界が遠のいたように、あらゆる物音が遠くに聞こえた――空調の音も、部屋の隅の固定端末が立てる唸るような電子音も、どこかで清掃ロボットが行き交う音も。わたしが思考停止しているあいだ、シスター・メリルは扉の向こうで押し黙っていた。間の抜けた沈黙。

ある瞬間、殴られたように、理解が訪れた。男たちは、死なないのだ。絶対に死なないわけではないけれど、わたしたちのように、あっけなく次から次に死んでいったりはしないのだ。いつ時間が尽きるのかとおびえながら暮らす必要を、彼らは持たない。

「そんなのって、」

声が掠れて、その先は言葉にならなかった。

「不公平だと思うかい」

当たり前だ――わたしが声を張り上げるよりも早く、シスター・メリルは続けた。「そうだよ。この世は不平等に出来ている。いまわたしが生きていて、わたしの同級生たちのほとんどが、すでに天に召されているように。だけどね、だからこそ、サーシャ。ちゃんと目を開いてほしいんだ」

もどかしく苛立つ声で、シスター・メリルは叫んだ。

「あんたや、あんたの死んだ友達が生まれながらに与えられたものは、ほかの誰かのよりも、見劣りがするように思えるかもしれない。だけど、サーシャ。それでも、その価値を決めるのは、あんたたちだ。ほかの誰でもない。判ったような顔で、遠くから哀れんでくる大人なんかじゃない。あんた自身なんだよ」

息を切らして、メリルは言葉を切った。

長い間があった。わたしは口を開けなかった。ドアの向こうでメリルが息を整えるのを、じっと待っていた。

「――お説教をするつもりじゃなかったのにな。ごめん。だけど、サーシャ。あんたの人生を、大事にしてほしいと思ってる。結婚や、子供を持つことだけがそうだとはいわない。だけど、こんなふうに関心もって、ひとりぼっちで死んでいったほうがましだなんて、そんなのは――」

納得がいくはずがなかった。そんなのは詭弁だと思った。メリルはまだ話を続けようとしていたけれど、わたしはさえぎって声を張り上げた。「あなたは多くを持っているから、そう言えるんです」

今度は彼女が押し黙る番だった。ずいぶん経ってから、やっぱり疲れた声で、シスター・メリルは囁いた。「――そうかもしれない」

また来るよと言って、メリルは引き下がっていった。力のない足音が遠ざかっていくのを、わたしは膝を抱えたまま、じっと聞いていた。

目を閉じてまぶたを膝に押しつけると、眼球の奥がちかちかと瞬いた。ひどく喉が渇いていたけれど、水を飲みにも立ち上がる気力がなかった。

どれほどの時間が経っただろう。とっくに式典が終わっただろうという頃になって、ほかのシスターが、代わる代わるやってきた。

彼女らの説得の文句は、なかなかのバリエーションに満ちていた。

いいかげんになさい、小さな子供みたいにわがままをいうものじゃありません。気の毒な花婿が待ちぼうけをくらって、困っていますよ。さきほど係官に伺ってきたけれど、あなたの伴侶になる方は、とてもいい青年だそうよ。ほんとうにいやかどうか、会ってみてから決めてもいいんじゃない？

最後のひとつは、少し面白かった。わたしは声を立てて笑った。「会って、その上でわたしがいやだといったら、どうするんです？ わたしの気に入る相手が見つかるまで、次から次に取り替えてでもくださるんですか？」

だけど対する返事は、特に面白いものではなかった。「なんてことを――サーシャ、神様のおさだめになった伴侶ですよ。あなたにふさわしい、りっぱな方なのよ。会えばちゃんと、そのことがわかります」

どの言葉も上滑りするばかりで、ちっとも心に染みてはこなかったけれど、シスター・マリアの一言だけが、わたしを逆上させた。

彼女はこう言ったのだ――「この日を迎えられなかった子たちに、悪いとは思わないの？」

思わないか？ 悪いと思わないかですって？

腹が立ちすぎて、言葉も出なかった。頭に血が上るところか、すうっと血の気が引くような気さえした。

このひとたちには、ほんとうに何一つ、わかってはいないのだと思った。わたしは精一杯の皮肉を込めて笑った。「そうお思いになるなら、シスター、いっそわたしの代わりに、ウエンディやコニーを行かせたらどうなんです」

それは、同級生たちの中でも、運悪く居残り組となったふたりの名前だった。神様の思し召しで、という言い方をシスター方はしたけれど、要は何らかの理由で相手にあぶれた子たちということだ。卒業したあとも別のセンターに移って、お呼びがかかるまで何か月だか待たされるという彼女らは、そのことにコンプレックスと焦りを抱いていたように見えた。

「何度でも言うけれど、サーシャ、神様のお決めになった、あなたの伴侶なのですよ」

ため息を吐いて、それからためらいがちに、シスター・マリアは続けた。「彼女たちでは、駄目なのです。――遺伝上の問題があるとかで」

「遺伝？」

いぶかしく、わたしは声を上げた。初めて耳にする単語だった。

「ええ」あいまいな響きの相づちを打って、シスター・マリアは口ごもった。「巧く説明できるかしら――とにかく、ウエンディやコニーでは、あなたのかわりにはならないのです。それに、ふたりにはふたりの伴侶が、いずれきちんと示されます。そのときがまだいまではないだけで。それを、あなたの勝手にどうこうするなんていうことは……」

「勝手ですって？」

思わず遮って声を上げていた。ずいぶんたちの悪い冗談だと思った。「あなた方はほんとうに

いつだって、ご自分の都合ばかり！ わたしたちの都合は、ぜんぶ我が儘のひとことでお済ませになるくせに！」

ドアの向こうで、シスター・マリアは黙りこくった。彼女のことだから、また泣いているのかもしれない。けどわたしの良心はちっとも痛まなかった。

腹を立てるだけ立てたら、思い出したように空腹が襲いかかってきて、わたしは部屋の隅に丸くなって毛布を被った。

やがてシスター・マリアが立ち去る足音が、遠ざかっていった。

しょせんは小娘の我が儘で、腹が減ればいずれ自分から出てくるだろうと、シスターたちがそう考えるのは当然のことだっただろう。

けれどわたしは粘った。丸二日が経つころには、空腹を通り過ぎて、飢餓感はすっかり麻痺してしまっていた。ただ、体がだるくて、ときどき変な寒気がした。

人間は水だけでどれくらい生きられるのだろうと、そんなことを考えた。それくらいのことなら、ライブラリを調べればすぐにわかるのかもしれないけれど、それだけの動作もおっくうだった。

あの人たちのいいなりになるくらいなら、いっそのまま死んでもいいかと思っていたけれど、その一方で、わたしは心のどこかであきらめてもいた。わたしがほんとうに衰弱して死んでしまうよりも先に、警備ロボットが押し入ってきて、わたしを引きずってゆくだろう。その先は、待ちぼうけを食らっている気の毒な花婿のところだろうか？ それとももっと別の場所だろうか。

だけど予想外なことに、そういう事態はなかなかやってこなかった。シスターたちもどうしていいのかわからなかったのかもしれない。そうでなければ彼女らにも、少しばかり良心の呵責があったのか。

いや、この言い方はフェアではないだろう。シスターたちはいつだって良心的で、善意に満ちているのだ。いささか無神経で、自分たちの正しさを疑うことを知らないだけで。

それでも、わたしは半分以上、あきらめていた。認めたくないことだが、シスターたちの叱責は、必ずしも的外れなことばかりではなかった。結局のところ、わたしは小さな子供のように自分から折れるのがいやで、精一杯の反抗をしていただけだった。

死んでもいいと思っていたのは、本当のことだ。けどその一方で、わたしは死ぬのが怖かった。どちらも本心だった。思い出したように飢餓感が胃を締め付けるたびに、イルマの手の感触がよみがえって、何度となくわたしを脅かした。まだ彼女のささやきが、耳の奥に残っていた。死にたくない――

朝から代わる代わる誰かがやってきて、夜には根負けして引き下がっていった。また来るよと言ったくせに、メリルはあれから来ていなかった。

三日目の夜更けだった。おかしい時間に足音が近づいてきて、ドアの前で止まった。用があるにしては、それきりいつまでも声がかからない。怪訝に思ったわたしが目をこらしてドアを見つめていると、ずいぶん経ってから、シスター・マリアのうち沈んだ声が出た。

「サーシャ。起きている？」

「――こんな時間にどうしたんです？」

答える声は不機嫌になったけれど、それはただのポーズであって、べつに、眠りを妨げられて腹を立てたというわけではなかった。籠城を始めてからは、あまり眠くなかった。ときどきうつらうつらして浅い夢を見るほかは、たいてい起きてじっとうずくまっていた。

またしても、いつとき沈黙があった。それから、すすり泣くような気配がした。今度は泣き落としかと思ったけれど、それにしても様子がおかしかった。

いぶかしく眉をひそめるわたしに、鉄槌は下ろされた。

「シスター・メリルが亡くなりました」

もうじき係官が来て、彼女を連れて行ってしまいうから、その前にせめて最後のお別れを。シスター・マリアはそう言った。

だまされたような気分のまま、シスター・メリルの遺体の前に立った。

用意された担架の上、それこそ眠っているかのように、シスター・メリルは横たわっていた。最後に顔を見てから、そう長い日数が経ったわけでもないのに、やけにやつれて見えた。唇は青ざめて、胸の上で組まされた指先が、ひどく白かった。

シスター・メリルがこんなところで冷たくなっているのは、彼女が大人だからですかと、わたしはそんな場違いなことを、シスター・マリアに訊ねた。生徒たちの場合と違って、シスター一方が死ぬときには、みなこのようにお別れをするのかと。

これまで死んだ子たちはみな、いつの間にかどこかに連れてゆかれるのが常だった。その日が近いことを予感して、前もって別れをほのめかす子はいたけれど、本当に命の尽きる間際まで残っていた子は、イルマくらいのものであった。

例によってぼろぼろと涙をこぼしながら、シスターは首を振った。「いいえ。彼女がそう望んだのです」

「イルマのように、連れてゆかれるのが怖くて？」

いいえ——シスター・マリアはわたしの目を見て、はっきりと答えた。「あなたのためにです、サーシャ」

言われていることの意味が分からなかった。口をつぐんだわたしに、シスターは何かをあきらめたような口調で、言って聞かせた。

「彼女はあなたのことを、とても心配していて……あなたが卒業するまでは、黙っていてくれと。本来であれば、わたしたちには係官に通報する義務があるのです——彼女はもっと早く、症状が進んだ時点で、しかるべき場所に移るはずでした。そのための、特別なセンターがあるのです。病による苦痛を取り除き、安らかに天の国へと向かうための……」

苦痛を長引かせてまで、メリルはここに留まりたがったのだと、彼女は言った。

その言葉は、わたしを責めていた。いや——シスター・マリアにそのつもりがあったかどうかは、わからない。けれど少なくともわたしの耳には、そのように聞こえた。

——あなたがたは、生き延びたくせに。

すぐ耳元で、聞き覚えのある声がしたように思った。ぎょっとして、とっさにあたりを見回したけれど、その場にいたシスター方は、怪訝そうにわたしを見るばかりだった。誰にも聞こえていなかった——当たり前だ。それはわたしの胸の中で響いた声だった。記憶の中から立ち上ってきた、自分自身の言葉。

メリルは、生き延びたのではなかった。

例の手術——生きられるための処置の話をしたとき、メリルは、シスターの多くはという言い方をした。そこに彼女自身が含まれていないことに、愚かなことに、わたしはこのときまで気づいていなかった。

だがそれは、当然察せられるべきことだったのだ。わたしは何を聞いていたのだろうか――彼女は結婚して子供を産んだと言っていたではないか。手術はたいてい小さいころに行われるとも、それを受けた女は、子供を望めない体になるとも。

どうしてそのことに一瞬たりとも思いがいたらなかったのか、自分で自分が信じられなかった。態度にせよ、体格にせよ、その若さにせよ、シスター・メリルはほかのシスターたちとは違っていた。その意味を、わたしはこのときまで考えたことがなかった。

シスターなのだから、向こう側の人間なのだから――大人になるまで生き延びたのだから、もう彼女は死の恐怖とは無縁なのだと、わけもなく、そう、なんの根拠もなく、ただ思い込んでいた。

なぜあのとき、メリルは言ってくれなかったのだろうか？ わたしの思い違いを正そうとしなかったのだろうか。

「――大人はいつも、嘘と、隠し事ばかり」

とっさにそんな言葉が口からこぼれた。

それは、いま目の前で冷たくなって横たわっているメリル自身が口にした台詞でもあった。

わたしの動揺をどう受け取ったのか、シスター・マリアが、沈んだ表情でうなずいた。「ええ、そうです」

シスターは涙を拭きながら、震える声で続けた。「わたしたちは、いくつも嘘を吐いてきました。嘘は悪いことだと、あなたがたに教える一方で……そのことについては、いつだって、申し訳なく思っています。だけど、それはあなた方のためを思っただけ、せめてもの――」

「――誰がそんなことを、一度でも望んだというの？」

自分で思っていたほどには、強い口調にはならなかった。それでもその場は、しんと静まりかえった。泣き濡れたシスター方が、皆、わたしのほうを見ていた。その顔という顔の上にあったのは、非難や叱責の色ではなかった。彼女たちは傷ついていた。

目の前で死んでいるメリルが、起き出してきて、前のようにわたしを叱りつけるのではないかと。そんなことを考えている自分に気がついた。何という愚かな期待！

死者は帰らない。シスター方はあれだけたくさんの嘘をついてきたというのに、皮肉なことに、それだけは真実だった。

天の国へと旅だった者と話すことは、誰にもできない。

メリルの遺体は搬送されていった。係官は、小さな声で形ばかり、シスター方をねぎらうようなことを言ったけれど、それきり口をきかず、淡々と彼女の遺体を布のようなもので包んで、搬送用の機械に積み込んだ。

「サーシャ。あなたを待っている人がいます」

シスター・マリアからあらためてそう言われたとき、わたしにはもう、逆らう気力は残ってなかった。

言われるがままに栄養食のチューブを啜り、眠った。あいかわらず眠りは浅かった。それだというのに、目が覚めるたびにわたしは混乱した。この数日に起こったことが、何もかも嘘のよう

に思えた。

本当にそうだったらよかったのに。

三日後の朝、着替えてわずかな私物をまとめた。そのあいだ、一言も口をきかなかった。指示を出すシスター・マリアも、もうよけいなことは何一つ言おうとせず、必要最低限のことを、淡々と説明した。ただ、最後にトラムに乗り込む直前になって、

「サーシャ、あなたはわたくしの授業は嫌っていても、本を読むことは好きでしたね」

そんなことを言い出した。

いぶかしく視線を上げると、シスター・マリアはいまにも泣き出しそうな顔をしていた。口をきくのがおっくうで、視線で問いかけると、シスターは掠れた声で言った。

「あなたが、よい文学との出会いに、恵まれますように」

「なぜ——」

言いかけて、咳き込んだ。ひさしぶりに声を出すような気がした。「なぜいまさら、そんなことを？」

「それがあなたの、救いになるかもしれないと、そう思うからです。できることならば、たくさんの豊かな物語に触れてほしいと……」

定刻になって、トラムの自動扉が閉じ、シスター・マリアの言葉は途中で遮られた。樹脂の窓の向こう、文学教師は祈りのしぐさをして、小さく微笑んだ。

なぜ彼女がそんなことを言い出したのか、理解できなかった。

いつかメリルの口から、同じような言葉を聞いたと思った。彼女はわたしに歌について学べといい、それがわたしの救いになると思うからだと言った。

彼女たちの言葉は、耳にしたその瞬間には、ひどく空疎にしか響かなかった。けれど、どういふわけか後になって、ことあるごとに耳の奥によみがえった。繰り返し——繰り返し。

いつか手放すものに思い入れを持つのは、馬鹿げたことだと思っていた。

花嫁の到着が遅れるという知らせが入ったのは、本来ならば結婚生活初日となるはずだった、まさにその日の朝だった。

予定では、俺が新居に到着したときには、すでに相手の女がそこにいるはずだった。空っぽの家のドアをくぐり、消毒薬のにおいに顔をしかめて空調の設定をいじっているときに、その通信は入った。

『あー、突然失礼しました。ラルフさん？』

ディスプレイに映った中年の係官は、俺がうなずくのを待ってから話を切り出した。どうせ向こうが持っているパーソナルデータに、こちらの顔写真くらいは入っているに違いないのに、いかにもお役所的なことだ。

『いや、急な話で申し訳ないのですがね。ちょっとした行き違いがありまして』

ちっとも申し訳なさそうには聞こえない口調で、係官は言った。なぜ遅れるのかという理由や、いつごろに到着する見込みだとかというような、詳しい説明は一切なされなかった。面倒くさげな響きさえ混じるその声を聞きながら、あれこれと余計な想像を巡らせた。

トラムの運行が乱れたというアナウンスは、特に耳に入っていない。もちろん、隕石でセンターが半壊したというようなニュースもだ。それならこの状況は、相手の個人的な問題によるものだろう。

花嫁の名前は、まだ知らされていなかった。直前にならなければ顔写真どころか名前さえ知らされないことに、ずっと不満を抱いていたが、なるほど、こういう事態に備えているわけかと思った。つまりは、直前になって急な差し替えがあっても、無用な混乱を招かずに済むシステムというわけだ。

もちろん俺の考えすぎで、ただ単に、花嫁のちょっとした体調不良や何かで出発を遅らせただけのことかもしれないが。

通信が切れて、一人きりに戻ると、リビングはいかにも広々として感じられた。使い慣れない機器を操作しながら水をコップに汲んでソファに腰を下ろすと、朝からたかだか小一時間ばかりトラムに揺られただけだというのに、あんがい疲れている自分に気がついた。

壁のスクリーンが勝手に立ち上がり、聞き慣れた声のAIが、家電製品の操作方法と注意事項をアナウンスしはじめる。食事のこと、洗濯物のこと、医薬品の請求の仕方、医官へのダイレクトコールの手段……いわずもがなの説明を、右から左に聞き流しながら、まったく違うことを考えていた。

女だけが罹患する、ウイルス性の特定疾病。罹患率百パーセント。十五歳までの死亡率が、昨年の統計で八十四・三パーセント。

ため息を飲み込んで、わずかばかりの私物の整理をはじめた。考えても仕方の無いことだ。

空調を最大に設定しても、薬品のにおいはなかなか取れなかった。

月社会がいまの形になったのは、たかだかこの二百年ばかりのことだという。かつて授業で習ったとき、少しばかり意外な気がしたのを覚えている。

それまでは男も女も、同じエリアに暮らしていたという。結婚も、それぞれの意思で自由に相手を選んだらしい。

「だけど、それで混乱は起きなかったんですか」

生徒の質問に、教師は笑って、まるで当時を自分の目で見てきたかのように語った。「もちろん、混乱はあったんだよ。相手を得られないままに死んでゆく男は、いまより遥かに多かった。諍いもあった」

それをきっかけに興味を持って、少しばかり、自分でも調べてみることにした。

教師の話はおおむね正確だった。もちろん、文献をそのまま信じていいならばの話だが。

スクールに在籍するうちに自由に見られるテキストなんか、たかだか知れているが、年齢制限によるフィルターさえどうにかうまいことすり抜けてしまえば、ライブラリの蔵書量はあんがい多い。

こういう調べ物をしたいときには、歴史書なんかを引くよりも、当時のニュース記事を参照するほうがいいと、経験上知っていた。二百年ばかり前の報道記事を発掘するには時間がかかった上に、古めかしい文章は拾い読みするだけでも一苦勞だったが、苦勞の甲斐あって、おおよその当時の経緯くらいは掴めた。

もともと当時は、自由恋愛のほうが主流だったようだ。育児についても、いまのような全寮制のスクールは、多数派ではなかった。子どもの世話は、おおむね子供が成人するまで一貫して親が受け持つのが一般的だったという。

ところが月面移住の第一世代は、男の割合が圧倒的に多かった。

その結果、当然のこととして、トラブルが頻発した。数少ない女の取り合いになったというわけだ。そういう、まるで原始時代のような野蛮な光景が、たかだか二百年前まで当然のように広がっていたのかと思うと、ひどく不思議な気がした。

男女の居住ブロックを分けてはどうかという案自体は、早いうちから浮上していたらしい。だがそのアイデアは、反対意見が根強く、なかなか実現のめどは立たなかった。

だがそこに、件のウイルスが発生した。

女だけが発症する、死に至る病。

人類の滅亡を予期しなかったものが、その時代、ひとりでもいただろうか？

月人類に手段を選ぶ余地はなかっただろう——そう思うのは、しょせん後世の人間の考えで、そんな状況下でさえ、かなりの反発はあったらしい。だが結局のところ、その政策は通された。

正直に言えば、そういう過去の歴史そのものには、たいして興味があったというわけでもなかった。ただ、その話は俺にひとつの理解をもたらした。つまり常識などというものは、その枠組みの外側から見れば何の役にも立たない滑稽な鎖だということだ。

一週間遅れでやってきた花嫁は、顔色の悪い、陰気な女だった。

淡いブルーアイと、褪せたような色味の金髪が、疲れ切ったような表情とあいまって、ますますその印象を強めていた。リビングに入る一歩手前で立ち止まった女は、色のうすい唇を引き結んで、いつまでも突っ立っていた。

転んだだけでも骨が折れるのではないかと思うくらい、がりがりに痩せた女だった。

到着の、ほんとうに間際になってやっと知らされた彼女の名は、サーシャというらしかった。もっとも、彼女がそう名乗ったわけではない。こちらの問いかけに、彼女は答えなかった。ただ網膜表示の個人識別コードが、直前に渡されたファイルと一致していたというだけの理由で、俺は彼女をそう呼ばざるを得なくなった。

「あー、聞いているかと思うが」

かける言葉に迷ったあげく、気の利いた言葉も思い当たらず、そう切り出した。「ラルフだ。今日から、よろしく」

自分では、精一杯愛想よく笑ったつもりだった。けれど、やはり女はうなずかなかった。それどころか、苛立たしげに顔を顰めて、小声で何事かを呟いた。

それがあまりに小さい声だったので、はじめは聞き取れなかった。こちらの怪訝な表情に気づくと、彼女は鼻の頭に皺を寄せて、

「――よろしく？ 何をよろしくしろっていうの？」

そうははっきりと吐き捨てた。

その目には、見まがいのような軽蔑の色があった。そんな目で見られることなど久しくなかった俺は、鼻白んだ。

女は壁の端末を叩くように操作して、さっさと寝室に立てこもってしまった。

閉ざされたドアをあっけにとられて見つめているうちに、じわじわと怒りがこみ上げてきた。外れをつかまされた、というのが、最初に浮かんできた思いだった。

何だ、あの態度は。何がそんなに気に入らないのか知らないが、まるで子供じゃないか。

最初にその姿を見た瞬間の同情めいた感情は、きれいに吹き飛んでいた。八つ当たりをされたという不快感だけが残った。

そう、八つ当たりだとしか思えなかった。彼女が好きでここに来たわけではないのと同じように、俺だって、別にいまの状況を望んだわけではない。ただ結婚というのが逃れようのない義務だというだけだ。

だが考えようによっては、幸いなのもしれなかった。

卒業前、まだ見ぬ花嫁に、期待まじりの想像を巡らせなかったといえは嘘になる。女に興味がなかったわけではないが、体外受精が一般的な現代、子供を持つのに必ずしも性交渉は必要ない。

そりの合わない相手をあてがわれたことは、お互いにとって不運なことには違いなかつたろうが、考えてもみれば、たかだかほんの数年をともにするだけの人間だ。親しくなったところでたいした利はない。

むしろ情が移れば、あとがつらいだけだ。俺は、父のようになりたくはなかった。

俺の父親は、母が死んでから、少しばかりおかしくなった。

本格的に精神に異常をきたしたのであれば――たとえば俺や妹に暴力を振るうだとか、育児放棄してどこかに行ってしまうだとか、そういう事態が起きたのであれば、行政の介入があってもおかしくなかったのかもしれない。だが幸か不幸か、そういうことはなかった。

だから俺は、七歳になって強制的に親元から引き離されるまで、父親と暮らしつつけた。もういない母親に向かって上機嫌に話しかけたかと思えば、何の前触れもなくとつぜん泣き叫んだり、端末に向かって作業に没頭したまま、何日でも寝食を忘れたりする男と。

通常ならば、五歳になってすぐ学寮に入れられる。どういうふうに申し出たものか知らないが、とにかく父が望んだ結果、俺には特例が適用されて、七歳になるまでは父の元からスクールに通った。

その期間も終わって、いざ家を出なくてはならないとなったとき、父は俺を力任せに抱きすくめて離そうとせず、身も世もなく大声で泣き続けた。定刻を過ぎて苛立った係官が同僚を呼びあつめ、何人がかりかでその父の手から俺を引きはがすまで。

幼いころには、父のことが好きだった。それだけに、成長するにつれて押し寄せる幻滅は、いっそう大きかった。父は俺にとって、友人に話すことのできない恥、汚点になった。

その経験が、俺の人生にひとつの教訓を与えた。手放すことに耐えられないようなものは、はじめから持つべきではない。

父と同じ轍を踏むのは御免だった。

名ばかりの妻になった女は、ほとんど自分の部屋から出てこなかった。声をかけても返事はなく、何をしているのかと思っただけのぞきにいけば、いつもつまらなさそうな顔で、何かの本を読んでいた。俺が入ってきたことに気がつくやうに、彼女はたいてい視線だけを上げて、嫌そうな顔をした。

その頑なな態度は俺をうんざりさせたが、しかし、ものは考えようというものだった。俺は、時間が与えられたと考えることにした。

なんせ、やることはいくらでもある。新しい端末の確保も、そのひとつだ。

卒業後に新しく与えられた端末は、スクール時代に貸与されていたものよりもよほど性能がよかったが、役には立たない。支給品はどれも、ライブラリに直結しているからだ。どこに監視の目（プログラム）が光っているかわかったものではない。

そうではなく、スタンドアロンで稼働するコンピュータが欲しかった。それから、ライブラリを経由せずにネットワークにアクセスする手段も。俺にはやりたいことがあった。

秘密裏に地球の衛星放送を拾って、そのログを取る。

現在の地球の状況を知りたかった。地球上の各国との国交が、事実上途絶して久しい。政府広報の、毒にも薬にもならないような中身の無いニュース文面ではなく、そこに生きている人々の、現実の生活を知りたかった。

そのためにはどうしても、安全な端末が必要だった。スクールのときに自作した小型端末も、いくつか手元に残してあったが、そちらはもう使う気にはなれない。

思い出すと、いまでも苦い思いが腹の底にわだかまる。

卒業セレモニーの日が、絶好の機会だった。窓越しに地球を望む大ホールに立ち入ることのできる、特別な日——分厚い特殊樹脂とはいえ、地球までたった窓一枚を隔てるだけのあの場所なら、うまくやれば、通信波を拾えるのではないかと思った。

もっと手っ取り早く、月行政府の管理する人工衛星に侵入する手段も考えないではなかった。だが、少なくともいまの自分の技術でそれをやるのは、とうてい無理だった。普通のコンピュータに侵入するのはわけがちがう。

だから特別なその一日のために、俺は長い時間をかけて準備をした。機会はこれを逃せば、ずっと先のことになると思ったから。

何年も前からの計画だった。必要な機器は、ほとんど一から作り上げた。わからないことはライブラリで調べたが、アクセスログは残らないように注意を払ったつもりだったし、プログラムを組むにも、ジャンクから部品を抜き出して集めるにも、いちいち慎重を期したはずだった。

それなのに、計画は漏れた。

セレモニーの始まるかという間際、前触れもなく教師に肩を叩かれた瞬間、全身が総毛立った。没収された受信機は、セレモニーのあとすぐに返却されたが、あの教師は中身をどの程度調べただろうか？

ことが露見した経路は、いくつか考えられる。ライブラリへの侵入経路のどれかが問題だった

のかもしれないし、もっと単純に、監視カメラのたぐいかもしれない。

そうでなければ、密告か。

たった一度、秘密にしたままにできず、友人の一人に計画の一部を漏らしたのは、会場に向かうトラムの中でのことだった。

セオ——あいつにだけ打ち明ける気になったのは、何も特別な理由があったからというわけではなかった。気が緩んでいたからというのが近いだろうか。たいしたきっかけがあったわけでもない。ただ、トラムでの移動中、たまたま向こうから話しかけてきた。強いて言うなら、それだけだ。

長くひそかに準備をしてきたことが、ようやく実現するというので、いまにしてみれば、俺はガキっぽく胸を弾ませていたんだろう。態度に出さないように気をつけていたつもりだったが、口外する気になったというのは、やはりどうかしていたのだ。

監視か、密告か——ひとりでいくら考えたところで答えが出るはずもなかったが、どのみち一度失敗した手段を信用する気にはならない。新しい端末が必要だった。それも、非公式に手に入るものが。

コンピュータに関する知識は、父親から教わった——と言い切ってしまうえば、嘘になるだろうか。

少なくとも教えるという意識は父にはなかっただろうし、共に暮らしたのは七歳までだったのだから、そのときの自分が父のしていることを理解していたわけではなかった。

ただ、父親が夢中になったときときおり漏らす独り言や、その操作する端末のようすが、断片的に記憶に残っていた。成長するうちに、そうした切れ切れの情報のいくつかの意味を持って、俺の頭の中でつながりはじめた。それらの知識は、当然ながらたいした情報量ではなかったが、それでもひとつの方向性を、俺に与えたと思う。

父はいわゆる、クラッカーと呼ばれる人種だった。つまり、非合法な手段でネットワークに接続し、本来はアクセスすることの許されない情報を入手する人間。

彼が何のためにそれをしていたのかは知らない。単なる趣味だったのかもしれないし、それにしても少々熱中しすぎているように見えたから、なにか目的があったのかもしれない。

その影響とっていいだろう。俺自身も、初等部の半ばを過ぎるころには、ネットワークから情報をあさることに関心を持ち始めた。自分のアカウントで閲覧することのできる範囲の外にも、情報の海が広がっていることを知っているのに、そこに興味を持つなといわれるほうが無理な話だった。

だけど、その趣味を他言することはしなかった。それ自体が違法だということもあったし、なにより父親は、世間の常識に照らし合わせて、どうかしているようなところがあったから、俺は彼の影響を受けているということをおおっぴらに語りたくなかった。

だからその趣味は秘密のもので、誰かを誘うことはしなかったし、誰にも教えなかった。あの卒業セレモニーの日、トラムの中でセオに打ち明けるまでは。

新しい端末は、ありあわせのジャンクを使って、ひとまず一台を組み上げた。花嫁に対する不満はさておき、一日の時間のほとんどすべてを自分の自由に使えるというのは、なかなか悪くなかった。

作業の合間、たまに思い出して様子を見に行くと、妻はやっぱり陰気な顔をして、本を読むか、眠っているかした。

彼女がものを食べているところを見ない、と気がついたのは、そんな生活がひと月近くも続いてからのことだ。

作業に区切りをつけて遅い夜食を摂りながら、不意にそのことに思いあたった瞬間、まさか、と思った。顔を合わせたくないから、俺がリビングにいない時間帯を見計らって、ひとりで食事をしているだけだろうと。

自分の思いつきを馬鹿げていると思いつつも、つい確認せずにいられなかったのは、いつ見ても彼女の顔色が悪かったからだ。

調理機械のログを辿って見れば、最後の食事は、前日の朝のようだった。

一日に一度か、多くともせいぜい二度、わずかばかりの量を、彼女は食べていた。体格が小さい分、食べる量も少ないのかもしれないが、それにしても限度があった。それも記録に残っているのは焼き菓子だの、砂糖菓子だのといったものが大半で、まともな食事を摂った形跡は、ここ何日もなかった。

ぞっとして、寝室に向かった。すでに飢え死にしているのではないかという、なかば妄想のような思いつきが背筋を粟だたせたが、幸い、彼女は生きていた。振り返ったその表情は、俺が無断でドアを開けたことで、気分を害しているように見えた。

「――どうして飯を食わないんだ？」

彼女はいぶかしげに顔を上げて、手にしていた端末を置いた。「食べているわ」

「あれで？」

「人の食事内容を監視するのが趣味なの？」

言って、彼女は皮肉っぽく笑った。自分もどちらかといえば、皮肉屋とっていい人種ではないかと思っていたけれど、彼女のほうが上手だった。俺が返す言葉に詰まっていると、彼女はふいに目をそらして、手元の端末に視線を落とし、

「お腹があまり空かないの」

そう気怠げに呟いた。あらためて見れば、彼女の頬はこけて、初めて見たときよりもいっそう痩せ細っていた。

「――医官にコールを、」

「必要ないわ」

間髪入れず、彼女はそう言った。端末から顔を上げさえしなかった。その態度は頑なというよりも、面倒くさそうに見えた。

理解しがたかった。もう会話を終えたつもりでいるらしい彼女に向かって、途方に暮れたまま呼びかけた。「死にたいのか？」

「いいえ」

つまらなさそうに、彼女は答えた。何を考えているのか、さっぱりわからなかった。

「なら、もう少しまともなものを食べ」

「なぜ？」

とっさに言葉を失った。まさかこの女は、食べなければ死ぬということが、わかっていないのだろうか？

目頭を揉んで、深呼吸をした。口を開く前に自分を落ち着かせたかった。

「――提案だ。ルールを決めよう」

ようやく顔を上げた彼女に向かって、なるべく平静を保とうと努力しながら言った。「食事は一緒に摂る。少なくとも日に二回」

「――意味がわからないわ」

「そうすれば、少なくとも君が活着ていることが、俺にわかる。ある日いきなりひからびた君の死体に出会うなんていうのは、できれば勘弁してもらいたい」

彼女はふっと表情を消して、いきなり黙り込んだ。何か、落ち着かない、妙な沈黙だった。俺はおかしなことを言っただろうか。

ずいぶん時間が経ってから、彼女は無表情のまま、硬い声を出した。「なぜ、あなたの言うことに従わなくてはならないの？」

「命令してるわけじゃない。提案だと言っただろう」

自分でもそれとわかるほどうんざりした声が出て、もう一度、深呼吸をした。「提案ついでだ。できれば、そういちいちけんか腰になるのをやめてくれないか」

問い返すような目線を向けられて、俺は苛立ちを押し殺しながら言った。「否が応でも、しばらくは一緒に暮らさなきゃならないんだ。進んで不愉快な思いをすることもない。違うか？」

何か、意外なことを言われたというように、彼女は目をしばたかせた。それからいつとき考えるような間のあとに、ようやくうなずいた。

「一理あるわ」

ようやくまともに話が通じた気がした。

だがほっとしたのもつかの間のこと、彼女は頭痛を堪えるように、顔をしかめてこめかみを揉んだ。「――もう休みたいわ。そのルールとかいうのは、明日からでいいんでしょう？」

その言葉は、確認というよりも、出て行けという意思表示だった。部屋を出てリビングに戻りながら、ため息が出た。何なんだと思った。いったい何なんだ、この女は。

自分の言った言葉が自分に跳ね返ってきて、気鬱が増した。否が応でもこの先数年は、このわけのわからない女と折り合ってゆかねばならないのだ。

それでも翌朝、起き出してみれば、彼女は静かに食卓について俺を待っていた。意外だったが、一度約束したことは律儀に守る性格なのかもしれない。

調理機械の表示を見れば、やはり少なすぎる気のする量のオートミールがセットされていたが、ひとまずはよしとして、自分の分を追加した。ここで口やかましいことを言えば、へそを曲げられそうな気がした。

それにしても、不味そうに飯を食う女だった。見ているこちらまで食事が不味くなるようなひどい仏頂面で、彼女はいやそうに匙を使った。

「口に合わないんなら、味付けの設定を変えられるんじゃないか」

俺がそう言って調理機械のマニュアルを呼び出そうとすると、彼女は首を振った。

「別に、味が悪いわけではないわ」

それならもう少しくらい、美味そうな顔をして食えばいいじゃないか——喉まで出かかった言葉を、結局は言わずに飲み込んだ。けんか腰になるのはやめろと言った昨日の自分の言葉を覆すような気がしたので。

そうしたら、何も話すことがなくなった。

匙と食器のふれあう音だけが、静まりかえったりリビングに響いていた。

俺はこんなに口下手だったのだろうか。

社交辞令だとか、その場の状況に合わせた適切な会話だのといったようなことが、人に比べて苦手だという意識はこれまでなかった。そもそもこうまで露骨に人から嫌われたという記憶が、物心ついてから一度もなかった。

仏頂面を付き合わせて、黙々と食事を続けた。実を言えば、もともと俺はめったに朝食を摂らないほうだったのだが、自分から言い出した手前、付き合わないわけにもいかない気がして、匙を無理矢理口に突っ込んだ。最後まで食べることには食べたが、おかげで胃もたれがした。

食事を終えて、器を食器洗浄機に放り込むなり、彼女は無言で部屋に引っ込んでいった。

遠ざかっていく足音を聞きながら、ため息を嘔み潰した。自分たちの相性が悪すぎるのだろうか。それとも皆、多かれ少なかれ似たような苦勞をしているのか。

セオに連絡を取ってみようと思ったのは、その件があってからだった。

友達といって差し支えない相手は他にいくらでもいたけれど、その中であいつの名前が真っ先に浮かんだのは、セレモニーのときのことが頭にあったからだ。

疑念は定期的に浮上ってきて、頭の隅をちらつき続けていた。卒業式のあの日、トラムの中で交わした会話——端末を取り上げた歴史教師の、いつもと変わらない穏やかな微笑。

疑うのは馬鹿げていると、自分でも思った。おそらくは自分の態度が不自然だったとか、そういう単純な理由なのだろうとも。セオとは初等部の最初のクラスからの、長いつきあいだ。たしかに真面目で融通のきかないところはあるが、教師に告げ口をするようなタイプではない。だいたい、そんなことをして、あいつに何のメリットがある？

だから、直接訊いてみたかった。あのとき誰かに話したかと。ぶつけてみて、反応を見たかった。それで、あいつではないと確信が持てたのなら、それでいい。

向こうが通信に出るまでのタイムラグに、緊張を押し隠しながら、手の汗をぬぐった。

『――やあ、委員長』

もう級長でも何でもない俺に向かって、画面越しにそう呼びかけるセオの笑顔は、何の屈託もないように見えた。

こちらから切り出すよりも先に、向こうのほうから会おうと言い出した。

二つ返事で承諾したはいいが、セオの暮らすエリアは、べらぼうに遠かった。コロニー・ガレ。はじめは向こうまで出かけてゆくつもりでいたが、路線図を見て気を変えた。お互いのエリアの中間地点でさえ、トラムを乗り継いで、二時間ばかりかかる。

この距離に何者かの意図を感じるのには、神経過敏というものだろうか？

延々とトラムに揺られてようやくたどり着いた待ち合わせの公園には、家族連れの姿が多かった。育児中の人間が暮らすための居住区なのだから、当然のことかもしれないが、手をつないで仲むつまじく歩く男女や子供連れの家族を見ていると、ひどく落ち着かない気分させられた。

世界中の夫婦という夫婦が手を取り合って仲むつまじく過ごしていて、自分だけがその輪からはじき出されているような気がした。馬鹿馬鹿しい被害妄想だというのは、自分でも判っていたのだが。

セオは時間ぴったりに待ち合わせ場所に現れた。

「よう、久しぶりだな」

ひと月ぶりに見る顔は、ちっとも変わっていなかった。当たり前かもしれない。たったの一か月だ。それだというのに、おかしいもので、ずいぶん長く会っていないような気がした。

俺を見つけて、ほっとしたように笑うその顔を見て、複雑な気分になったのは、自分の疑り深さに自分で嫌気がさしたからだった。

どのみちいきなり本題を切り出すつもりもなかったが、ベンチに陣取るなり思わずこぼれた愚痴は、本音だった。「――参るよなあ」

「なんなんだろうね」

そう返してきたセオは、まったく同感といった調子でうなずいたが、そのくせして、顔つきは明るかった。

言葉でこそ、嫁への不満を並べ立ててみせても、その口元は緩んでいた。こいつは幸福な結婚をしたのだなと思うと、癢に障るような気がした。だがそれを素直に口に出すには、プライドが邪魔をした。

つまらない見栄だと、自分でも思う。だが、幸福そうな友人を見ていると、自分が置かれている状況が、いかにも耐えがたい恥のように思えた。

俺は調子を合わせて、さものろけ半分であるかのように、彼女のことを話した。端末を出して画像を見せることまでした――新居への住人登録のために撮影した画像。自分のみっともなさに、ひどい気鬱を覚えた。俺はこんなに小さい人間だったのだろうか。

なかなか本題に触れることの出来ないまま、小一時間も話し込んだ頃だった。セオがふっと視線を陰らせて、緊張したように口元を引き締めた。「そういえば、あれ、どうなったんだ？」

その視線は、俺の手にしている端末に向いていた。

わざとやっているのかと思った。しらばっくれてみせているのかと。セオは俺のほうに向き直って、不安混じりの視線をよこした。

何の不安なのか。いくら相手の目をのぞき込んでも、その正体は知れなかった。自分がいつの間にか、半ば本気でこの友人を疑いかけていることに、遅れて気がついた。ここに来るまでは、我ながらくだらない疑心暗鬼だと、そう思っていたというのに。

セオの質問に、言葉少なく答えながら、胸のうちでは、ずっと問いかけていた。

――お前じゃないのか？

だがその問いは、別れ際までとうとう口から出るにはいたらなかった。やがて触れづらい話題に蓋をして、害のない世間話を交わし、俺たちは別れた。あとには苦い思いだけが残った。俺は何をやっているんだろう。

一人に戻って、トラムに乗り込みながら、交わした会話を思い返してみたけれど、結局、何の確信も得られなかった。

だがそれでよかったのかもしれない。

セオが密告したにしても、そうでなかったにしても、どのみち俺が甘かったということだ。誰にも打ち明けずに、一人でやろうと決めたことだったのに、それを守れなかったのだから。そう割り切ろうとした。

いずれにせよ、次はもっと慎重にやる。

毎日の食事の習慣は、いちおう根付きはしたものの、どうしようもなく不毛な時間だった。ひとりきりで過ごす時間にはちっとも苦痛を覚えないのに、同じ食卓をふたりで囲んでいて会話が無いのが苦痛だというのは、どういう心理だろう？

それでもとにかく、日々は過ぎていった。彼女は変わらず本を読んでばかりで、会話は必要最小限にしか交わさなかった。そのせいで、ときどき自分が言葉を話せるということを忘れそうになることがあった。

どうかすれば日常会話よりも、プログラミング言語のほうが身近に感じられる。アドバイザーが定期的アナウンスをしてくれなかったら、言葉を忘れてしまうのではないかと思えるほどだった。

授業だの、友人たちとの悪ふざけだのといった、定期的な日課がなくなったとたん、時間の感覚はあっという間に麻痺してしまった。たまに顔を上げてカレンダーを見て、日付に驚く。それでも、ともかく食事の習慣のおかげで、案外規則正しい生活を送れているのが、不幸中の幸いだろうか。

寝室を彼女に明け渡していたから、リビングのソファが俺の寝床だった。上等の品で、大きさも充分だったから、それに不自由を感じはしなかったが、ときおり我に返って、忌々しい思いがすることもあった。ずいぶん情けない状況に置かれたものだ。

たまに、妙に人恋しいような気がする時もあった。友人たちの誰かに連絡でも取ればよかったのだろうが、俺はそうしなかった。気軽に通信をつなげる相手がいなかったわけではないが、いまの状況を悟られるのがいやだった――妻との仲がうまくゆかず、会話に飢えているというのを、友人たちに知られるのは、みじめなことのように思えた。

食事を摂ったあと、彼女は寝室に戻るが多かったが、それがおっくうに思えるのか、そのままリビングのソファで本を読んでいることもあった。いいほうに考えれば、それだけいづらか俺の存在に慣れてきたということなのかもしれない。だが彼女は顔を上げることもさへしなかった。距離が縮まったという気はまるでしなかった。

何気なく眺めていると、彼女はしょっちゅう同じ本を読んでいるようだった。

「よっぽど好きな本なのか」

何度目かに見覚えのある図を目にしたとき、つい魔が差したというのか、ぽろりとそんな言葉が口からこぼれた。彼女はびくりと肩をふるわせて、慌てて手の中の端末を抱き込むように隠した。

「――何？」

棘のある声が帰ってきて、ばつの悪い思いで鼻を掻いた。「いや、いつも同じのを読んでもみただったから」

「悪い？」

「いや。――悪かったな、のぞき見なんかして」

彼女はいつか、警戒するようにこちらの様子をうかがっていたが、ずいぶん経ってから、早口に呟いた。「別に好きなわけじゃないわ。他に読むものがないだけ」

それは彼女なりの譲歩だったのだろう。つっけんどんな言い方には違いなかったが、そこにはいづらか言い訳のような響きが混じっていた。

「ライブラリから新しい本を拾ってくればいいじゃないか」

「もう全部、読んでしまったもの」

まさか、と思った。だが、つまらなさそうな彼女の表情を見ているうちに、思い当たるところがあった。

「――その端末、見せてもらっても？」

彼女はぎょっとしたように目を瞠った。当然の反応だったかもしれない。ふつう、よほど親しい人間にでも、自分の端末の中身など見せない。

気まずい思いをもてあまして、つい言い訳がましく弁解した。「おかしなところは触らない。ライブラリを確認したいだけだ」

彼女はいつか怪訝そうに俺をにらんでいたが、それでもやがて面倒くさくなったのだろう、黙って画面を開いてみせた。

彼女にも作業が見えるようにディスプレイを傾けながら、ライブラリに接続すると、俺の推測は当たっていた。「――ああ、やっぱり」

彼女のアカウントで見られる範囲は、えらく制限されていた。俺たちのスクール時代の端末だ

って、フィルタリングはまあひどいものだったが、それ以上だった。

「ありがとう。もういい」

詳しい説明はせずに端末を返すと、彼女は不審げな表情を隠しもせずにひったくって、寝室に引っ込んでしまった。

ひどく苦い思いが胃の底にわだかまった。考えてもみれば、それはいかにも合理的な話だった。女には、なるだけ余計な知恵はつけないほうがいいというわけだ。

リビングや寝室には共用の端末があるが、確かめてみれば、彼女のもの以上の閲覧制限がかかっていた。子どもが三、四歳にもなれば、勝手にパネルを触ってみるかもしれないから、という建前だろう。小さな子どもの閲覧に適さないものは、表示されない設定というわけだ。

その夜、自分の作業の片手間に、あまり使っていない予備の小型端末に、ライブラリから適当に拾ってきたテキストをどんどん放り込んだ。翌日にでも、彼女に渡すつもりだった。

その思いつきに、たいして深い意味はなかった。機嫌取りのつもりといえそうかもしれないが、俺にとってはたいした手間でもなかったし、言ってみれば、気まぐれと親切心の、ちょうど真ん中くらいの感覚だった。

だが、いざ翌朝になって彼女の顔を見るなり、躊躇した。これを渡すことは簡単だ。結果、彼女は退屈からいつとき解放されるかもしれない。だが、それでいったいなんになるというのだ？

どういう本が制限されているのか、詳しく調べたわけではなかったが、おおよその想像はついた。

どれほど自分たちが狭い場所に押し込められて生きているのか、いかに不自由な暮らしを送っているのか——自分が一年後に生きていられる可能性が何パーセントあるのか。そんなことを知って、どうするというのか。

結局、俺はその端末を彼女に渡さなかった。

その一件がきっかけだったというわけでもないが、プログラムが行き詰まったときの息抜きをかねて、ライブラリからテキストを拾ってきて読むことが増えた。本でも読んでいないことには、いよいよ言葉を忘れそうだった。

もともと読書が趣味だというわけではない。文芸書にはたいして興味がないのだが、ライブラリの中でも閉架と呼ばれる領域に格納された古いテキストには、なかなか興味深いものが混じっていた。

閉架にあるものは、発禁図書とは違う。通常の本検索画面には表示されないというだけで、請求すればすぐに開示される。一応の基準は設けられているが、それは年齢だったり、犯罪歴がないことだったりという、ごく緩やかな制限にすぎない。そうした条件をクリアしさえすれば、誰でも読むことができる。ただ、アクセスした人間が公式の記録に残るというだけだ。

うまいやり方だ、と思う。その気になればほとんど誰でも読めるのだから、不当な情報統制とまでは言えないし、やましいことがないのなら、堂々と名前を出して読めばいいというわけだ。だが、その心理的抵抗を乗り越えてまで、積極的に閉架の中を漁る人間は多くない。

閉架に置かれているものは、単純に暴力や性に関する過激な描写があるといったような理由に

よるものが多いのだが、中には、なぜ閲覧制限の必要があるのか、一見しただけではわからないようなものが混じっている。

特に、二百年ばかり前の文学には、そうした傾向があった。

たとえば『動物園』という短編小説がそうだ。百五十年ばかり前の作家が書いたフィクション——地球時代を知っている最後の世代、例のウイルスが蔓延する直前に月に移住してきた男の、晩年に残した遺作。

動物園というのは、地球上ではありふれた娯楽施設だったらしい。遠く離れた地域の動物をひとつところに集めて、市民が鑑賞するための設備。

さっと一読したところではごく平和的な、何気ない日常を描いた小説とも読める。ストーリーらしいストーリーもない、平凡な家族の一場面を切り取ったというような作品。それがなぜ、一般に公開されないのか。

この短編を最後まで注意して読めば、答えは見えてくる。『動物園』は、人間に飼育される動物たちの、屈辱と悲哀を描いた小説なのだった。

小説の最後の場面は檻の中、尻尾を丸めてうづくまる狼の描写で終わる。決まった時間に餌を与えられ、狭い檻から出ることを許されず、飼育員と獣医によって繁殖を管理された動物たち。牙を抜かれ、爪を失った獣——

彼らの姿は、皮肉なほどいまの月人類と重なって感じられる。

月は厳密には国家ではない。

月面において、過去にいかなる種類の独立宣言も出されたことはないし、月面のあらゆる土地は、地球上のどの国家の領有下にも置かれていない。

このことには何百年だか前に地球上の諸国家のあいだで結ばれた条約が関係しているらしい。まだ人類が宇宙への進出をずっと未来のことと考えていた時代の名残り。

だが法の上での取り扱いがどうであれ、月面に定住する人間が増えれば、社会を運営するための組織とルールが必要になる。法という名前ではない法、協力金と呼ばれる事実上の税、軍と呼ばれることのない防衛組織。

月行政府と俺たちはいうが、それはあくまで俗称で、正式には月面特定居住区域都市運営機構という。国家ではないから、議会がない。機構の構成員が選挙を経て入れ替わるということもない。そこにはただ登用試験があるだけだ。

市民の犯罪を取り締まる警察組織と、隕石や架空の外敵に備える防衛組織を、それぞれ分けて管理できるほど、月面社会に余裕はない。都市内部および上空への警戒は、その大部分がコンピュータ管理に任されていて、それらを統括しているのは、そのまま行政府内に設置された委員会だ。

その監視の目が、具体的にどのように張り巡らされているのかは、市民には知らされない。機密情報というわけだ。大抵の文書や書籍は、ライブラリに制限を掛けた上で保存されるのが常だが、保安に関する情報は分離され、行政府内の独立したシステムに保存されているという。そこに電子的な手段で侵入するのは不可能に近い。

では、行政府の監視網をすり抜けて何かをしたいときには、どうするか。伏せられたカードはそのままに、入手できるだけの情報から推測して、手探りで動くしかない。

卒業セレモニーのときの一件は、苦い教訓になったが、それでも俺は、まだ諦めるつもりはなかった。あの青い星、遙かな宇宙空間にぽっかりと浮かぶ母なる惑星と、そこに暮らす人々に、どうにかしてアクセスしたかった。

月とは比べものにならない圧倒的な人口と、おそらくはそれに支えられて、いまま発展を続けているはずの技術を持つ、豊かな星――

とはいえ、次のチャンスは進学してからのことになる。志望は物理学部で出してあった。できれば月面でのフィールドワークが避けられないような課程を取りたかった。希望が通るかわからないが、それが駄目でも何らかの方法はあるだろう。

カレッジに進むだけでも、行動範囲の自由度はぐっと上がる。いまはそのときに備えて、態勢を整える時期だった。

傍受のためのプログラムは、順調に改良を重ねていた。もっとも、実際に試してみられたわけではないから、あくまで理論上の話にすぎないのだが。

俺が機械いじりに夢中になっている間に、彼女の妊娠がわかった。

その検査結果が届いても、彼女は少しも喜ぶ気配をみせなかった。そんなものかもしれない。母親は無条件に我が子を待ち望むなんていうのは、男の思い込み、願望に過ぎないのだろう。

おぼろげな記憶の中の俺の母親は、子供好きだった。俺や妹のことをしょっちゅう抱きしめて、頬にキスをした。愛しているというのが母の口癖だった。だが、だからといって、彼女に同じような愛情を求めるのは、はじめから無理なことなのだろう。他人事のように、そう考えた。

自分が父親になるという実感も、実を言えば、あまり湧かなかった。積極的に自分の子供が欲しいと思ったことさえ、一度もなかったかもしれない。

妊娠中に彼女が服用する薬と、その副作用については、あらかじめアドバイザーから説明を受けていた。かなりの個人差があるという話も。それで、一応は注意を払っていたつもりだったが、見ている範囲では、異変には気がつかなかった。彼女の顔色は相変わらず悪かったけれど、それが副作用で気分が悪いためなのか、もともとのものなのかは、区別がつけがたかった。

彼女はそれまでと変わらず、一日のほとんどを寝室に籠もって本を読んで過ごし、食事の時間が来れば出てきて、不味そうに食べ物を口に押し込んだ。妊娠中ということで追加された栄養食のチューブは、どう見ても美味そうには見えなかったが、それにも文句ひとつつけなかった。やせ我慢をしているというよりは、何もかもどうでもよさそうに見えた。

一緒に暮し始めて何か月経っても、彼女のことが理解できる気がしなかった。だが、それでいいと思っていた。余計なことにわずらわされたくはなかった。

セオから連絡があったのは、その頃だった。

またのろけ話でも聞かされるのかと、いくらか気鬱な思いで通信に出ると、しばらくぶりに見る友人は、ひどい顔色をしていた。

「どうした？」

訊ねても、セオはすぐには話し出さなかった。その様子は、普通ではなかった。青ざめた唇を、どうやら怒りに震わせながら、何度も話しかけては言葉を飲み込んだあとで、ようやく話しはじめた。

『彼女の副作用が――ひどくて』

正直に言えば、拍子抜けした。なんだ、そんなことかとさえ思った。

聞けばセオはどうやら、アドバイザーのマニュアルどおりの対応について、腹を立てているようだった。

A Iなのだから紋切り型の対応しか帰ってこないのは当たり前なことだ。たしかに、そうとわかっていても苛立つようなときはあるが、それにしても、馬鹿馬鹿しい話だった。機械を相手に、本気で腹を立てるやつがあるものか。

だがそれは、この友人が身重の妻を、真剣に案じている証拠だとも言えた。それだけ動揺しているのだ。

自分のほうが倒れそうな顔色をして、セオは何度も言葉を詰ませながら、怒りを吐き出した。

同情半分、呆れるのが半分で、俺はその話を聞いた。

薬に副作用があることも、それが避けては通れないことも、あらかじめ説明されていたのだし、女がいつ死ぬかわかりゃしないのは、そもそも妊娠中に限ったことではない。情を移せば移しただけ、あとが辛いのは、最初からわかっていただろうに。

それともこいつは、わかっていなかったのだろうか。そういうことを、少しも考えていなかったとでもいうのか。

こいつはこんなに、馬鹿だっただろうかと、俺は考えた。どちらかという、賢い部類だと思っていたが。

いやーそうだ。セオはそういうやつだった。頭は回るが、性格的なものというか、根っこのところが単純なのだ。

醒めているふりをしていても、誰かが困っているところに行き会えば、けして放ってはおけないし、自分の納得のいかないことには、割り切って従うということができない。必要以上に自分の女に感情移入してしまったところで、無理もなかった。

そう思い至った瞬間、自分の心理に訪れた変化を、どう説明したものだろう。

無性に、意地の悪い気持ちが湧きあがってきて、俺はそのことにまず自分で驚いた。だが心のもう半分では、たしかに目の前の事態を面白がってもいた。

「まあ、落ち着けよ」

俺は何気ないふうをよそおって、友をなだめるように、苦笑した。それからいかにも同情を滲ませた口調で続けた。「はじめから、わかっていたことだろう？」

その瞬間のセオの表情の変化こそ、見物だった。

一瞬で血の気の失せたその白い顔を見て、ああ、人は逆上すると本当に顔の色が変わるのだなどと、そんなことを思った。

しっかりしろよと、まるで励ますかのような言葉を投げかけながら、やけに気味が良かった。だが自分がそんなことはおくびにもださず、さも心配そうな顔をしているだろことも、自分でわかっていた。

真っ白な顔色をしたまま、言葉もなく、友は通信を打ち切った。

何も映さなくなった画面をぼんやりと眺めているうちに、さっきまで感じていた小気味よさが、嘘のようにすっと引いてゆくのを感じた。

いったん冷静になれば、つまらない腹いせに喜んでいる自分がいかにもみっともなく思えた。ひどくみじめな気分だった。

俺はいったい、何をやっているんだろう。

何回目かの往診の際に、医官から指示が出された。少し運動をするようにと、命令の口調で告げられたその言葉に従って、俺は彼女を連れ出した。

外を連れだって歩く間、彼女はひとことも口をきこうとしなかった。うつむいて、自分の足元だけを見るようにしながら、黙々と歩く。それなら一人で散歩をしたって同じことだろうにと、そう思わなかったわけではないのだが、身重の妻を一人で出歩かせるというのは、どうやら世間的には、考えがたい非常識らしかった。

広々とした公園は、それでも五分も歩けば一周してしまう。三周、ただ無意味に外周を回ったところで、どうにも耐えがなくなった。ベンチに座ろうと手振りで示すと、特に逆らうでもなく、彼女は腰を下ろした。そうしてうつむいて、膝の上に置いた自分の手を、じっと見た。それきり、一度も視線を上げようとはしなかった。

公園では夫婦者や家族連れの人々が、いかにも幸福そうに語らいながら、仲むつまじく散策していた。三、四歳くらいの子供たちが、危なっかしい足取りで駆け回り、それをいさめる親の声も、どこか楽しげだった。公園は、明るい光に満ちていた。

その中で、不機嫌に黙りこくっている俺たちの姿は、周囲からどんなふうに見えただろう。そんなつまらないことが気にかかった。

沈黙が気詰まりで、何か話そうとしたが、口にするべき話題はひとつも思いつかなかった。

当たり前だが、ただ座っていることにもすぐに飽きた。立ち上がり、義務感だけに動かされてもう一度だけ外周を回ると、まだ消毒薬のにおいの残っているような気がする家に、まっすぐ帰った。彼女はやっぱりその間、黙り込んで、俺の後をついて歩いた。

彼女が部屋に引っ込むのを待って、ため息を漏らした。たいした距離を歩いたわけでもないのに、いやにぐったりと疲れていた。こんなことが健康にいいとは思えなかった。

それでも振り返ってみれば、その頃までは、平穩に日々が過ぎていたのだ。うんざりするようなことや気の滅入ることもあったが、ともかく彼女が部屋に籠もっている間、俺は彼女のことを忘れて、自分の作業に没頭していられた。

変化が訪れたのは、さらに数ヶ月が過ぎたころだった。

久しぶりにアドバイザーからではなく、係官から通信が入ったとき、他人と口をきくのがずいぶん久しぶりのような気がして、ひどく戸惑った。

『奥様も、ご一緒に』

画面の向こうの相手が、挨拶もそこそこにそんなふう切り出したので、用件はすぐに見当がついた。

通信だけをつないでも良かったのだが、それがいかにも不仲を喧伝するように思えて、俺は通話を保留し、寢室に移動した。そちらにも端末は設置されていたし、彼女を呼びつけるよりも手っ取り早そうに思えた。

子供はとっくに彼女の体から取り出されて、センターの『揺り籠』と呼ばれる施設に移って

いた。生まれてくるまで、あとひと月かそこらというところ。通常の検診結果については、定期的にレポートが送られてきていたが、これまでのところ、問題はなかった。この時期に、レポートでもアドバイザー経由の連絡でもなく、人の口からわざわざ伝えなければならないような重要なことがあるとしたら、思い当たる内容はひとつしかない。

廊下を歩く間、緊張を紛らせようとして、何度か手のひらの汗をぬぐった。なるようにしかならないのだからと、自分に言い聞かせながら。とっくに覚悟は出来ているつもりだったのに、いざそのときがやってきてみれば、胃が縮むような思いがした。

彼女はうたた寝をしていたようだった。何か夢でも見ていたものか、珍しくぼんやりした表情で目を擦る彼女の顔つきには、いつもの険がなかった。

椅子を運び、彼女の横に腰掛けて、モニタを切り替えた。画面の向こうで忍耐強く待っていたらしい老年の係官は、苛立つようすひとつ見せず、おもむろにうなずいた。

『お子さんの生育は順調です』

子供の成長を示すいくつかの指数を上げるあいだ、老いた男は、皺ぶかい顔の上に終始、人の好さそうな微笑を浮かべていた。すでに送られてきていたレポートと、代わり映えのしない内容だった。彼女は反応らしい反応もなく、ただぼんやりと聞き流しているように見えた。

さりげない口調を保ったまま、係官は続けた。『それから、ようやく性別をお伝えできる段階になりました。――女の子です』

ああ、という声が漏れたのは、無意識のことだった。自分が落胆しているという、はっきりした自覚はなかった。もとより可能性としては、いつも考えていたことだ。できれば男の子であってくれたらという気持ちは、なかったといえば嘘になるが、こればかりはどうしようもない。

お気の毒にと、口に出してそう言いこそしなかったが、ともかく画面の向こうの係官は、同情に満ちた目をしていた。それが、その場に適切な表情だったのかどうかはわからないが、少なくとも俺は、腹を立てたりはしなかった。おおむね自分も同感だったからかもしれない。

可哀想にと、漠然と、そんなことを思った。生まれてくる子供に対する、それが最初の感情だった。

彼女の様子がおかしいのに気づいたのは、そのあとだ。

何気なく隣を振り返ると、妻は真っ白な顔をしていた。

「大丈夫か？」

声をかけても、反応がなかった。青い瞳が、何かにおびえるように見開かれて、宙の一点を見つめていた。彼女がそんな顔をしているのを見るのは、もちろん初めてのことだった。

「――嘘」

叫び声は、そんなふうには聞き取れた。

いったいどうしたんだ、というのが、最初に思ったことだった。ショックを受けるのはわからないでもないが、それにしても、あまりの驚きようだった。

いつ死んでしまうかわからない子供を、育てなくてはならないということ。それを思えば、気が重いのは間違いなかった。だけど、それは、はじめから予想できた範疇のことははずだ。

それとも彼女はそのことを、まったく考えていなかったのだろうか？ 子供の性別が女かもし

れないという可能性を、ちっとも？

困惑する俺を置き去りに、彼女は青ざめた唇を震わせて、短くきれぎれに、ひきつれた悲鳴を上げつづけた。

『どうか、落ち着いて』

ディスプレイの向こうから、係官が声を掛けてきたが、彼女はそれを聞いてはいなかった。その痩せすぎて節くれだった指が、ほとんど力任せに自身の腕をかきむしっているのを見て、俺は初めて焦った。

「何をしてる、よせ」

彼女は俺のほうを見なかった。その爪が、腕ばかりでなく顔まで傷つけるのを見て、慌ててその手を掴んだ。そのとたん、彼女は本格的にパニックを起こした。俺の手をふりほどこうとして、彼女は必死でもがいた。爪が、俺の頬を掠って、鈍い痛みが走った。

この細い体のどこから出るのかというような、異様な力だった。乱れた髪――青ざめた顔、不規則な呼吸音、遠くから響く係官の制止の声――

なんなんだ、と思った。一体なんなのだ、この状況は。

ほかにどうしていいかわからなくて、とにかく暴れるのを止めさせようと、彼女を強引に抱きすくめた。

そのとき初めて、俺は、彼女の体にまともに触れたのだった。

腕の中でもがく痩せこけた体は、熱かった。力任せに抱きすくめれば、折れて碎けてしまいそうな、頼りない背中――その体温と、薄い皮膚ごしに骨のあたる生々しい感触は、俺を動揺させた。

生きているのだ。

その当たり前の事実が、唐突に俺を打ちのめした。彼女は生きていて、そして、何かに苦しんでいる。

いつの間にか暴れるのをやめた彼女は、やっぱり俺の方を見てはいなかった。どこでもない空に呆然と視線を投げたまま、彼女はいつからか涙を流していた。嗚咽もなく、自分が泣いていることに気づいているかどうかもわからない、茫洋としたまなざしで。

すぐに人を遣ります、鎮静剤の安ぷルをと、係官が繰り返しているのにようやく気がついて、俺は首を振った。「必要ありません。お騒がせしました」

係官は迷うような目つきをしたが、結局はすぐに引きさがった。

『何かあったら、すぐにコールをください』

こうした場面にも慣れているのだろうか、その落ちつきが有り難かった。形ばかりでもなく感謝の言葉を返しながら、俺は通信が切れるのを待った。

サーシャは腕の中で、まだ泣いていた。ほとんど無意識に、その頭を抱き寄せて、自分の胸に押しつけた。涙が一粒、俺の手に落ちて、一瞬の熱を残してすぐに冷えた。

彼女はときおり肩を震わせて、意味の取りづらい言葉を、きれぎれに呟いた。その中でただひとつ、

「――報いななの？」

その言葉だけが、やけにはっきりと聞き取れた。

その日から、サーシャはひどく不安定になった。食事の時間になっても出てこず、何度か呼べば、かろうじて危うげな足取りで出てはきたものの、ともすれば匙を使うことも忘れて、いつまでもぼんやりと手元を見つめていた。始終ふさぎ込んで、ときには前触れもなく叫び出すようなことさえあった。

夜中、うなされているのに気づいてようすを見に行くと、眠ったまま、泣きながら誰かに謝っていた。

気晴らしになるものを与えるようにと、アドヴァイザーは言ったが、いったい何が彼女の気を晴らすのか、見当もつかなかった。ものを食べることは、あいかわらず彼女にとって苦痛でしかないようだったし、あれだけ一日中読んでいた本も、一切読まなくなった。

仕方なく、俺は彼女を、以前より頻繁に外に連れ出した。あいかわらずの、無言の散歩。以前と違うのは、彼女が時折いつの間にか立ち止まって、ぼんやりしていることがあるという点だった。そのたびに俺は彼女の手を引いた。

あのときに抱きしめた体の熱とは裏腹の、冷たい指。それでもしばらく手を握っていれば、やがて俺の体温が伝わって、いくらかその手のひらは温もり、薄く汗が滲んだ。

生きているのだ。その言葉がときおり腹の底からわき上がってきて、俺を責めた。

こんなことで大丈夫なのだろうかと思う気持ちはあった。赤ん坊がやってくるまでに、あと何か月もない。彼女はこんなようすで、子供の世話なんかできるのだろうか？

だがそれは、はっきりいって、俺の甘えだった。たとえばひと月後、彼女がまだ生きていと保証するものは何もないのだから。何かあれば当然、俺がひとりで子供を育てるのだ。それははじめから、想定しうることのはずだった。

彼女のようすがおかしいのは、傍目にも明らかだっただろう。道行く人々が、ときおりもの言いたげな視線を向けてくることがあった。

たとえばその中の誰かにでも、相談できればよかったのだろうか。俺では駄目でも、同じ女なら、いくらか彼女の心理に察しがついたのかもしれない。

だが俺は、そうしようとしなかった。他人を頼るという発想が、自分の中になかった。

俺は父のようにはなりたくなかった。できることなら何があっても動じず、問題が起きても冷静にひとりで対処できるのが、理想の生き方だと思っていた。だがそう思うのならば、彼女を自分と同じひとりの人間だと思ふことは、してはならないことだったのだ――少なくとも、いまこの状況においては。

それでも、俺はなるべく彼女に話しかけるようになった。食事の内容だとか、散歩中に見かけたものだとか、中身の無い話ばかりを。

それもアドヴァイザーの指示だった。彼女は気のないふうに反応をかえすときもあったし、ぼんやりとどこかを見ていて、聞いているのかどうかもわからないときもあった。前のように、皮肉が返ってくることはほとんどなくなった。

そんな相手に一方的に話しかけることには、いつもひどい徒労感が付きまとった。ときには腹立たしく感じることもあった。どうして俺が、この女のためにいらぬ気苦労を背負い込まなくてはならないのかと。

だが大抵は、哀れみのほうが勝った。可哀想な女だった。いつまで生きられるかわからない短い人生の中で、何だかわからないが、どうやら何かにおびえ、罪の意識に苦しんでいる。

「名前、どうしょうか」

ある朝、食事の最中に思い立ってそう話しかけると、サーシャはぼんやりした表情のまま、顔を上げた。彼女が自分でつけた頬の傷は、なかなか消えず、まだ痛々しいかさぶたを残していた。

「名前……？」

その茫洋としたまなざしに、不安を覚えた。この女の心は、現実を生きていない。

俺は無理に微笑んだ。「子供の名前だよ。何か考えはあるか？」

名前、ともう一度つぶやいて、彼女はふっと暗い目をした。

「なんだっていいわ。あなたが考えて」

投げやりな、自棄のにじんだ口調だった。とっさに何かを言おうとして、自分が口に出そうとしていた言葉がわからなくなった。俺は彼女に怒ろうとしたのだろうか、それとも諭そうとしたのだろうか。子供が可哀想じゃないかと？

それを言う資格が、俺にあったらうか。

セオからふたたび連絡があったのは、もう子供が生まれるまで間もない時期だった。

もう二度と、連絡してこないのではないかと思っていたから、驚いたというか、拍子抜けした。画面の向こうの友は、ばつの悪いような表情で身じろぎをして、片手を上げてみせた。努力して何でも無いふりをしているのが目に見えてわかる、ぎこちない笑みを浮かべながら。それで俺も、何事もなかったようにふるまった。

近況を報告しあいながら、嘘はやはり自然に口から滑り出た。本当のところを打ち明ける気には、どうしてもなれなかった。少しばかり喧嘩の多い、けれどそれなりに仲むつまじい夫婦—そんな作り物のイメージ。喋っているうちに、本当に、そうだったらよかったのにと思えて、苦いものがこみ上げてきた。

セオのところは、男の子だったらしい。

それを聞いた瞬間、自分の胸がざわつくのを感じた。自分だけが貧乏くじを引かされたという、あの感情が胸をよぎって、いやな後味を残した。

だがそれを顔に出すのは、プライドが許さなかった。俺はせいぜい明るく笑った。

「おめでとう……ってのは気が早いかな」

ありがとう、と言って照れくさそうに笑うセオは、幸せそうだった。

この違いは何だ。一度そう思ってしまったら、もう駄目だった。暗く、深い穴の底に、ひとりきりで落ちたような気がした。だが胸の内とは裏腹に、俺の顔は微笑みを浮かべ続けた。

「うちももうじきだ。あと半月くらいかな」

そのまま表情を変えず、さりげない口調を装って、言った。「うちは女だったよ」

その瞬間、セオの表情が曇るのがわかった。やはり精一杯努力して、それを押し隠そうとしていることも。

相変わらず、わかりやすいやつだった。他人に興味は無いというような、いかにもすました顔をしてみせるけれど、そんなものはポーズだけだ。愚直なまでに真面目で、隠し事に向かない――

俺はなぜ、こんな馬鹿を疑ったんだろう。

その思いは、唐突にどこかから降って落ちてきて、俺の頭を殴りつけた。

俺は、はじめから知っていたはずではなかったのか。こいつは友人を裏切っておいて、その相手に平然と接することのできるような、器用なやつではなかった。

ああ、そうかと、ようやく腑に落ちた。

そうだ。あのとき、トラムに乗って顔を見に行くまで、俺はこの男を本気で疑ってはいなかった。その心境が変わったのは、セオの話を聞いてからだった。口では文句を並べ立てながら、幸せそうに女の話をする、友のにやけ面を見たときから。

つまるところ最初から、俺はこいつに、自分で思うよりもずっと、嫉妬していたのだ。幸せな結婚をした友人に。ただそれだけの話だった。

だがそんな俺の内心などつゆ知らず、飲み込んだ、おそらくは同情の言葉のかわりに、セオは言った。

『そうか。――おめでとう』

その一言に、ひどく胸が詰まったのは、なぜだっただろう。

「ああ――ありがとう」

答える声が掠れた。

祝福の言葉を、残酷だと思ったわけではなかった――その逆だった。生まれてくることを、祝福してくれる人間がいるということ。それがまだ見ぬ娘にとって、ささやかな救いのように思えた。

つまらない嫉妬に振り回されていたことよりも、子供が生まれてくることを、ちっとも喜べないでいた自分に対して、とつぜん耐えがたいほど嫌気がさした。生まれてくることを誰にも喜ばれない子供は、哀れだ。

「……ありがとう」

もう一度言って、無理に笑った。声が震えなかったかどうかなんていう小さなことが気にかかった。俺はさりげない態度を保てていただろうか。

通信が切れたあと、俺はその場にうずくまって、感情の波が静まるのを待った。羞恥、自己嫌悪、不安――交互に押し寄せてくる感情は、ひどく混乱していた。

胸の中で、自分の声がしきりに釘を刺していた。手放すことに耐えられないものは、はじめから持つべきではない――

赤ん坊が我が家にやってきたとき、サーシャは硬直したように立ち尽くしていた。

はじめ彼女のほうに赤ん坊を手渡そうとしていた係官は、迷うように視線を揺らしたあげく、結局、俺のほうに差し出した。小太りの、温厚そうな係官。いつもそうであるように、初めて見る顔だった。

同じ人間が二度接触してくることは、ほとんどないようだった。そのことについて、説明を受けたためしはなかったが、理由には察しがつくような気がした。特定の個人に親近感を抱くようでは、彼らの仕事は、やりづらいのだろう。あるいはその推測は無用のかんぐりというもので、単に公的機関の人間らしく、彼らの役割分担がやたらに細分化されているというくらいの、単純な理由なのかもしれなかったが。

娘はよく眠っているように見えたが、手渡されるときには、もぞもぞと動いた。

赤ん坊というのは、こんなに小さかったらうか。ミニチュアのような、小さな服から、それこそおもちゃのような手足が飛び出していた。

見た目の割に、その小さな体にはずっしりとした重みがあった。丸々と太った、健康的な赤ん坊——妹のときもこうだったらうかと、遠い記憶を呼び寄せようとしてみたが、巧くいかなかった。それもそのはずだ。妹が生まれたとき、まだ俺は二歳だった。

やがて異変に気づいたようすで、赤ん坊は一丁前に生えそろった短いまつげをぴくぴくと震わせた。

開いた目は、俺とおなじ鳶色をしていた。

ああ、本当に俺の子供なんだなと、臍な実感がようやく追いかけてきた。嬉しいというよりは、どこか落ち着かない、そわそわした気分だった。

赤ん坊の視線は、頼りなくさまよった。このくらいのうちは、まだよく目が見えていないというのは本当なのだろうか。

こちらが身構えるより早く、子供は鼻をひくつかせて、泣き出した。

しわくちやの顔を真っ赤に染めて、赤ん坊は声を張り上げた。この小さな体の、いったいどこから出るのかというような、大音声だった。

立ち尽くしているサーシャと、どうしていいかわからないでいる俺を見比べて、係官はどう思ったものか、励ますように笑いかけてきた。

「みんな最初はこんなものですよ。大丈夫、根気強くあやしてあげたら、じきに泣き止みます」

その言葉は嘘ではなかったが、子供が泣き止むまでには、ずいぶんと時間がかかった。

係官は赤ん坊が泣き疲れて眠るまで待ってから、検診の日程を言い残して去った。

残された俺は、手の中の赤ん坊をひとしきり眺めて、サーシャのほうを振り向いた。彼女は息を呑んで、顔を引きつらせた。

「抱いてみないか？」

わずかばかりの期待を込めて、そう声を掛けると、彼女はうろたえるように視線を揺らした。

長いこと、彼女はためらっていた。それでも辛抱強く待っていると、その手をいかにもおっか

なびっくりといった調子で、ゆっくりと伸ばしてきた。

赤ん坊の、小さな指に触れかけて、サーシャはびくりと手を引っ込めた。まるで触れたら火傷するともいうように。

「噛みつきゃしないよ」

わざと軽い口調で言ってから、無理強いはずに、リビングに戻った。据え付けたベビーベッドに子供を寝かせる間、彼女はやはりおそるおそるというようすで、赤ん坊を遠巻きに見ていた。

結局、その日、サーシャは一度も赤ん坊に触れなかった。その目に怯えの色が滲んでいることに、俺は気がつかないふりをした。

娘の名前はクローディアにした。

それは母の名前だった。ほかに女の名前を、ろくに知らなかったのだから。もしかしたらいまどこかで生きているかもしれない妹と同じ名前にするよりは、死んだ母の名をもらう方が、まだしも悪趣味ではないような気がした。

赤ん坊は、とにかくよく泣いた。

泣いているときと眠っているとき以外は、クローディアはいつもじっと俺を見上げていた。俺が動くと、視線が追いかけてくる。はっきり笑ったりするのはまだ先のことらしく、そこに何の感情が読みとれるというわけでもないのだが、かといって、完全な無表情というのとも違う。澄んだ鶯色の瞳で、無心に、あるいは一心に、娘はただひたすらこちらの目を見つめかえしてきた。

こいつはいったい、何を見極めようとしているんだろうと思った。まだ何も知らないくせに。

赤ん坊の世話というのは、想像以上にやっかひだったが、それでも新しい生活は、あんがい悪くはなかった。おかげでプログラムの改良についてはほとんど止まってしまっていたが、どのみち現状のまま一人でやれる作業には、限度がある。

誰かに計画を打ち明ける気はないが、せめて進学して、もう少し自由に動き回れる口実が手に入れば、足の着かない手段での部品調達も、いまより楽になるだろう。未成年が、スクールエリアでも育児期間用の住居エリアでもない場所をうろうろするのは、案外目立つ。俺は予定を繰り延べることにして、ほとんど一日中、赤ん坊の世話にかまけて過ごした。

アドバイザーが、赤ん坊にはなるべくこまめに話しかけろというので、俺はせっせと娘に語りかけた。どうせ言葉の意味もわかってはいない相手に向かって話すのは、独り言のようで気恥ずかしかったが、それが言語の発達を促すといわれれば、そういうものかという気がした。

気がつくと、クローディアに話しかける俺を、サーシャが離れたところから、じっと見ていることがあった。

彼女は相変わらず、赤ん坊を遠巻きにしていた。それでも、その存在を無視して寝室に引きこもってばかりいることもできないようで、よくリビングにやってきては、少し離れたところから、赤ん坊の顔をおっかなびっくりのぞきこんだ。その表情は、いつも何かにおびえているように、不安の色を隠せずにいた。

そのうち慣れるさと、意味もなく、俺は繰り返した。楽観的に考えでもしなければ、やっつけられない気がしたから。

ある日の夜中、何の拍子にかふいに目が覚めた。

たいていは、クローディアが泣き出してたたき起こされるので、そうでないときには疲れてぐっすり眠っていることが多かった。何も無いのに急に目が覚めるというのは、近頃では珍しかった。

気がつけば、サーシャがベビーベッドのそばに、立ち尽くしていた。深夜のことで、照明は足元の常夜灯だけだったから、そのかすかな青白い明かりに照らし出された彼女の横顔は、真っ白に見えた。

おかしな話だが、俺はその張り詰めた横顔に、一瞬、吸い込まれるように見とれた。正直に言えば、その瞬間まで彼女の顔を、美しいと感じたことはなかった。痩せすぎて陰気に見えていたし、いつも顰めっ面ばかりしていたから。

サーシャは眠る赤ん坊に、迷い迷い、手を伸ばしてはやめた。

最初はいつものように、触れるのをためらっているのかと思った。抱き上げてみようかと考えて、けれど決心がつかずにいるのだと。

だが、違っていた。その手がゆっくりと、赤ん坊の首に向かって降りてゆくことに気がついた瞬間、いっぺんに眠気がふきとんだ。

胸の中に氷をさし込まれたようだった。サーシャの張り詰めた表情の意味を考えるまでもなく、その手が何をしようとしているかは、あきらかだった。

ソファから跳ね起きて、駆け寄った。サーシャがはっとしたように振り返った。だがその手は、赤ん坊の首にかかったままだった。

「――よせ」

極力、冷静な声を出そうとしたが、その努力はうまくいったとは言いがたかった。彼女はびくりと身をすくませた。その手を掴んで、強引にベビーベッドから引き離した。サーシャは抵抗するでもなく、俺の勢いによるめきながら、床にへたり込んだ。

心臓が跳ねていた。いま、何をしようとしていた？ 口から出かかった詰問を、かろうじて飲み込んだ。わかりきった問いかけだ。

赤ん坊を殺そうとしていたのだ。首を絞めて。

視線だけで振り返って、ベビーベッドを確かめた。クローディアがあまりに静かにしているので、不安になったのだ。だがそれは心配のしすぎというもので、赤ん坊は、静かに寝息を立てていた。

彼女が何か言うのを、俺は待った。その口から抗議か、言い訳か、あるいはそれに類した言葉が出てくるのを。だがサーシャはなかなか口を開こうとしなかった。真っ白な顔のまま、顔を伏せて、座り込んでいた。

「どうせ、抵抗しても無駄だって、そう思ってたの」

長い沈黙のあとで、ようやく彼女はかすれた声を出した。「何をどう言っても、結局は決めら

れたとおりにするしかないんだからって。だから、考えないようにしてた。わたしが馬鹿だった――誰に何を命令されたって、子供なんて、つくるべきじゃなかったのに」

ようやく顔を上げたサーシャの青い瞳は、暗闇の中で爛々と光っていた。「生まれてこないほうが、この子のためだった」

目眩がした。

手に余る、と思った。こういうことは、俺のような素人ではなくて、そう、たとえば精神病理学者だとか、心療内科医だとか、そういうプロの手に任せられるべきことだと。

だが――愚かしいことかもしれなかったが、どうしても、医官にコールする気にはなれなかった。夜中だったからではない。連中を信用することが、俺にはできなかった。

じきに寿命を終えるだろう女ひとりのために、懇切丁寧に難しい治療をこなすような良心の持ち合わせが連中にあると、そう仮定することは、難しかった。行政府というものを、俺は信用していなかった。

ネットワークの海に漂う膨大な情報の中には、荒唐無稽な噂話が混じっている。センターに関する黒い噂は、いつでも絶えなかった。たとえば、そう、助からないとわかった女たちに対する処遇だったりだとか、障害の程度のひどい赤ん坊にたいする処置だとか、そういう話だ。

それらの噂話には、隠されたものを疑いたくなる人間心理に由来する、根も葉もない憶測も混じっていたかもしれない。だが、あながちすべてがでたらめだと言い切れなかったところがあった。

情報統制は、一見したところ緩やかで、行政府を批判する声そのまま寛容に放置されているかと思えば、誰も気づかないうちにさりげなく削除されていることがある。そして、そうやって消されるデータの中に、そうした噂話が混じっていた。

ひとつだけ確かなのは、月政府には余裕がないということだ。社会の役に立たない人間を生かし続けるために、膨大な投資を続けるだけの資源は、おそらく、どこにもない。

目の前が暗くなるような錯覚を覚えながら、言葉を探した。サーシャは赤ん坊から目をそらして、肩をふるわせていた。

何度も口を開きかけてはためらい、ためらいしてから、ようやく俺は声を振り絞った。

「どうして、そんなふうにするんだ――」

非難の調子を完全に押しかくすのは、難しかった。サーシャはすぐには答えなかった。その顔をのぞき込もうとして膝をつく、彼女の震える息が、じかに頬に触れた。

「――生きていたって」

やっとのことで、彼女は口を開いた。「いいことなんて、ひとつもなかったわ」

その言葉は、俺にではなく、どこか遠い場所に向かって投げつけられたように聞こえた。

その瞬間、こみ上げてきた激情は、何だったんだろう。

言葉にならない感情が、胸を焼いた。どうにか平常心を取り戻したくて、息を吸おうとすると、喉がひきつれるような音を立てた。

彼女をいさめるべき言葉は、なかなか思いつかなかった。だが、何かを言わなければならなかった。少なくとも、彼女の言い分を、黙って認めるわけにはいかなかった。焼け付くようなその

焦りに押されて、ろくな考えもないまま、口を開いた。

「それは、この子が、決めることだ——そうだろう？」

口に出す端から、自分の胸のうちには否定の言葉が飛び交っていた。それを決められる年齢まで、クローディアが生きられるという約束などどこにもない。言いながら自分でわかっていた。だからサーシャが反論する前に、俺は言葉を重ねた。「この子にだって、生きられるうちは、生きる権利がある——」

どこかで聞いたような、あきれほど陳腐な台詞だった。

薄っぺらい言葉しか持たない自分を、これほど腹立たしく思ったことはなかった。だがそれでも、サーシャは視線を揺らして、ためらいを見せた。「だけど——」

「君だって、死にたくない、言ったじゃないか」

俺はほとんどすがりつくような調子で、そう叫んだ。「この子も同じだ。違うか？」

言う端から言葉は裏返って、俺自身を刺した。

彼女の言うように、この子の人生に、これから辛いことばかりが待っているのだとしても、俺は同じことを言えるだろうか？

たとえばこの子がいまのサーシャのように、いつかひどく苦しんで、我が子を手に掛けようと思いつめるような、そんな未来が待っているかもしれなくても、それでも俺は、この子に死んで欲しくはないと、迷わずに言えるのだろうか。

そうではなかった。俺の中にあるのは、ただ目の前でこの子が死ぬところを見たくはないという、それだけの臆病さに過ぎなかった。自分でそれがわかっていた。俺は、逃げているだけだった。

「——もしかしたら、いつか」

言葉はいかにも無力だった。それでも俺は、かろうじて彼女の目を見たまま、話し続けた。「いつか、ひとつくらいは、生きていてよかったと思えることが、あるかもしれないじゃないか。その可能性まで、この子から奪う権利は、俺たちにはない。そうだろう？」

サーシャは打たれたように顔を上げた。俺の空疎な言葉の、いったい何があんなに彼女を動揺させたのだろうか——だがとにかく、彼女は目に見えてうろたえた。

「この子が、決める……？」

頼りない声だった。サーシャは俺に、すがるような目を向けていた。彼女がそんな顔をしたことが、いままで一度でもあっただろうか？

俺は、せいぜい確信に満ちた顔を作って、うなずいた。その努力が成功したかどうかはわからなかった。

青い瞳が何度も揺れて、俺と赤ん坊の間をさまよった。その様子を見ていて、思いついたことがあった。俺は立ち上がって、ベビーベッドをのぞき込んだ。話し声がうるさかったのか、むずがりはじめたクローディアを、抱き上げた。

「——抱いてやれよ」

ようやく、自分の言葉で喋ったような気がした。

ひとしきり赤ん坊をあやして、その小さな体温の高い体を、彼女のほうに、ゆっくりと差し出

した。

赤ん坊の体の重みを、手応えを、その手に直に感じたなら、それがいくらかでも、彼女の気を変えさせるのではないかと思った。俺がはじめて、サーシャが生身の人間であることを思い知らされた、あの日のように。

彼女は長いことためらっていた。だが俺が引き下がらないのを見て、何度かの逡巡のうちに、おそろおそろ、手を出した。そのやせ細った腕に、俺は、クローディアの体を預けた。

彼女は何も言わなかった。張り詰めた表情で、いかにも肩に力の入ったようすで、ただ赤ん坊を抱いていた。その緊張が伝わるのか、いったんは泣き止んでいたクローディアが、またむずがりだした。

それにつられるように、サーシャも泣き出した。子供のような、手放しの泣き方で。その肩を抱き寄せながら、つられて自分まで泣きたくなった。

何が正しくて、自分がどうすべきなのか、わからなかった。手に余ることをしようとしているという、うっすらとした自覚だけが、胸の端に居座っていた。

泣き疲れて、サーシャは眠った。寝室に戻ることもできず、ソファで、ぐったりと横たわって。

その横で一睡もできずに、俺は朝を迎えた。時間になって照明が明るさを増すと、昨夜の出来事が嘘のように、穏やかな空気が部屋を満たした。

ベビーベッドの中で赤ん坊は健やかな寝息を立てていた。

ふたりの寝顔を見比べていて、いまさらのように、赤ん坊の顔立ちが彼女にも似ていることに気が付かされた。それはあたりまえのことだったはずなのに、どういうわけか、このときまで意識したことがなかった。

サーシャの泣き腫らしたまぶたを見るときもなしに見ながら、生きていていいことなどひとつもなかったと言い切った彼女の、これまでの暮らしを思った。

センターでの女たちの生活というのは、機密事項に属するというので、たとえ妻から聞き知ったことがあっても、それを口外するのは禁じられている。もちろん人の口に戸はたてられないから、几帳面にそんな決まりを守る者ばかりではないだろうが、少なくともネットワーク上にそうした話題を書き込むことはしない。書き込んでも削除されてしまう。

建前としては、女たちの安全のためということになっている。前時代的な――たとえば女に飢えた男がどうにか策を弄してセンターに侵入するだとか、そうした心配を、まさかこのご時世に本気でしているわけでもなかろうが、とにかくセンターのある場所は、俺たちが普通のときに乗る ترامからは接続できないようになっているし、そもそも正確な位置情報さえ公開されていない。

建前も、まるきりの嘘ということもなかろうが、その嚴重さは別のことを意味していた。つまりは、一般人に知られてはまずいことがあるということだ。

分厚い月の岩盤と、何重にも設けられた隔壁の向こうで、女たちが何を思いどう暮らしているのか、その正確なところを知る男はほとんどいない。

よほど疲れたのか、サーシャはうなされもせず、ぐっすりと眠りこんでいた。眠気覚ましのコーヒーを淹れに俺が立ち上がっても、ぴくりともしない。その寝顔を眺めながら、自己嫌悪とむなしさが交互に押し寄せてくるのに、じっと耐えていた。

俺はいったい、何をしているのだろう。

サーシャは相変わらず口数も少なく、ぼんやりしていることも多かったが、それでもその夜を境に、少しずつ変わりはじめた。少なくとも、クローディアに触れることができるようになった。

それは、良い傾向のように感じられた。かすかな希望に縋るように、俺のほうでも意識して、赤ん坊の世話を彼女に頼むようになった。たとえばミルクの用意をしている間、ちょっと抱いていてくれないかというように。

戸惑いながらも、サーシャは赤ん坊の世話をするようになった。だがその手つきは危なっか

しかった。それが怖いのか、あるいは彼女の緊張が伝わるのか、たいていの場合、彼女が抱くと、クローディアはかえってひどく泣いた。

「悪い、待たせた」

彼女の手から、少しずつ体重の増しつある体を受け取って、話しかけながらあやすと、赤ん坊の機嫌は目に見えてよくなった。ミルクを飲ませている間、サーシャは隣に座って、赤ん坊の顔をじっと見ていたが、そろそろ飲み終わろうかというころになって、急にふっと目を伏せた。

「あなたが抱くと、泣き止むのね」

見ればその眼には、切迫した色があった。なにかよくない風に思いつめているように、俺の目には映った。

それで、無理に軽い口調を作って言った。「なんだ、妬いてるのか？」

「そんなんじゃ……」

むっとした様子の彼女に笑いかけながら、どうか自分が自然に笑えているようにと願った。

無理をして笑顔を作ることが、このころ、癖になりつつあった。

いやーもともと俺は、愛想よくふるまうことが、苦手なほうではなかった。あまり好きにはなれないタイプの同級生とも、そこそこ当たりさわりなくうまく付き合っていた。だが、なぜだろうークラスメイトや教師に対して作り笑いを向けることには、ちっとも抵抗がなかったのに、彼女に同じことをするのは、なぜだか妙に、気が咎めるような気がした。

「俺はまあ、慣れてるからな。妹がいたからさ」

それは半分がた嘘だった。二歳のときのことなんてほとんど覚えてもいないし、覚えていたとしても、自分で世話をしたはずがなかった。だがいまは、嘘が必要だった。

つとめて軽く、たいしたことではないという調子を作って、俺は言った。「君が不安そうにしているから、この子もつられちゃうんだよ」

サーシャは無言でそっぽを向いた。その横顔は不機嫌そうではあったが、ともかくさっきまでの張り詰めたような気配がいくらかは和らいだのを見て、俺は自分のふるまいが間違いではないことを、無理にでも信じようとした。

「笑いかけてやったらいいーほら」

クローディアを差し出すと、サーシャはその体を受け取りこそしたものの、そのまま押し黙って、固まってしまった。

笑い方を知らないわけでもあるまいに。

ほんの少しばかり、演技でも笑顔を作ってやるという、ただそれだけのことも満足にできないでいる、その強ばった横顔を見ているうちに、突然、こみ上げてきた思いがあった。

この不器用な女がやってきたのが、ほかの誰かでなく、俺のところによかった。

それは唐突で、理不尽な感情だった。

自分の心の動きが理解しがたかった。手間ばかりかけさせられる、それも自分のことを嫌っている人間に対して、そんな風を感じる意味が、まるでわからなかった。いつも不機嫌そうにしている、話しかけてもまともな返事も帰ってこない相手、情緒不安定で、何をしでかすかわからない、この女に。

一旦は泣き止んだはずのクローディアが、不穏げに表情を曇らせた。いまにも大声で泣き出しそうだった。

追い詰められたような顔をしているサーシャに向かって、助け舟のつもりで口を挟んだ。「でなけりゃ、歌でも歌ってやるとか」

「――歌？」

聞き返してきたサーシャの声には、なにか頼りない、不安げな響きがあった。

「そう。赤ん坊には子守歌だ」

サーシャは困惑したように、目をしばたかせた。「子守歌なんて、知らないわ」

その生真面目さが可笑しくて、俺はつい微笑んだ。今度は作り笑いではなかった。「なんだっていいさ。君の好きな歌で」

それでもサーシャはいつとき困ったように、腕の中の赤ん坊を見下ろしていたが、やがて、ためらいがちに、そっと歌い始めた。

それは、ずいぶん前に流行った歌だった。十年近く前に、よく公共放送で使われていた歌。陽気なメロディーが覚えやすかったというだけで、そんなにいい曲だと思ったことはなかった。だがありふれた歌詞が、サーシャが歌うと、何か、違うものに聞こえた。

思いがけずやわらかなその歌声に、知らず、耳を傾けていた。普段の話し声には、まるで甘やかなところなどなくせに、サーシャの歌声は甘く、耳に心地よかった。普段の彼女を知らなければ、だまされそうだと思った。

クローディアは、ついさっきまで泣き出しそうだったのも忘れて、不思議そうに、ぽかんと母親を見上げていた。鳶色の瞳をまん丸にして。

やがてサーシャが歌い止んで、俺は我に返った。いつの間にか、赤ん坊と同じようにぽかんと口を開けていた自分に気がついて、慌てて表情を取り繕った。

「――泣き止んだな」

サーシャはまばたきをして、戸惑ったように、腕の中の娘を見下ろした。

クローディアの小さな手が、母親の服の胸元をしっかりと握りしめているのを見て、どうしたわけか、胸がつまった。

クローディアが熱を出したのは、それから数日後のことだった。

まだ抵抗力のない小さい子どもは、しばしば他愛のない病気で高熱を出す。事前に説明を受けていたが、だからといって動じずにいられるものではなかった。

画面の向こうでアドバイザーは、作り物の顔に温厚そうな笑みを浮かべて、医官を向かわせるような深刻な症状ではないと、ただそれだけを繰り返した。

人口の減りつつある月面社会に、医官の数が圧倒的に足りていないこと、誰かが病気をするたびに人を派遣するほど、医療機関には余力がないこと――そのことを俺は、ずっと前から知っていた。だがこのときまで、そのことに腹を立てたことも、危機意識を感じたこともなかった。他人事だと思っていた――自分が健康で、めったに病気をすることもなかったから。

一時間おきに体温を測りなおし、何度か汗に濡れた服を着替えさせたほかは、ほとんどできる

こともなく、娘の小さな体が病氣と闘っているのを、ただ見守っていた。

毒にも薬にもならないようなアドヴァイザーの慰めを、苛立ちとともに聞き流しながら、いつかの通信を思い出した。セオ——A Iに対して怒りを見せていた友のことを、あのとき俺は、愚かしいと思っていた。

——はじめから、わかっていたことだろう。

自分がかつて友に向けた言葉が、そのまま裏返って、俺を刺した。クローディアが、手元を離れるまで無事に育ち上がるかどうかさえわからないということ——そんなことは、はじめからわかっていたはずのことだった。娘を死なせるのが例のウイルスか、それとは他の要因なのか、そんな違いは重要ではない。

クローディアがむずがるようにばたつかせた小さな手を、俺は握った。熱い手だった。手に汗を掻きはじめていた。

かつての月面は、ほとんど無菌に近い状態だったという。生物が存在しなかったのだから、当然のことだ。人類が月面に本格的に移住することが決まったとき、風邪の原因となるようなウイルスや病原菌のたぐいは、意図的に持ち込まれたようだ。

厳重な防疫体制を敷いて、病原体を持ち込まない方法についても、おそらく検討はされただろう。だが当時の人間にとって、いずれ月と地球の往来が完全に断絶することなど、予測できたはずもない。実際に、当初の数十年ほどは、そもそも月の自給率はまだ低く、地球から輸送される物資に頼る面が多かった。

人だけではなく、家畜や作物のたぐいも運ばなければならない中で、あらゆる病原体を完全に遮断することは難しい。生き物の体を助ける細菌だってあるのだし、ウイルスや細菌というものは、当初無害であっても、変異を起こすことがある。

それならばいっそ、いずれ月面上で生まれてくる次世代の子供たちに免疫力をつけさせるためにもというので、一部の法定伝染病以外の病原体は、あえてそのままに持ち込まれたのだそうだと。

結果的に、それが裏目に出たとも言える。人類を滅亡寸前にまで追い込んで、いまなお女たちを殺し続けている例のウイルスも、もとはといえば地球上に存在したものが、月の環境に持ち込まれたことで、変異したのだから。当時のその判断を、いまさら恨んだところで、何になるわけでもないが……

苦しいのか、クローディアは眠っては目覚めて、しつこくぐずった。いつもの、体一杯で何かを主張するような泣き方とはかけ離れた、弱々しい泣き声で。

その声が、あるとき急に強まったかと思ったら、その自分の声に自分でむせかえるようにして、クローディアは吐いた。

息を詰まらせないよう、体をひっくりかえして口の中に指を突っ込みながら、手が震えた。アドヴァイザーから事前に聞かされていた処置は、耳で聞いているうちは簡単なことのように思えたのに、いざとなると俺の手足は、ひどくもたもたとしか動かなかった。

隣でサーシャが泣いていた。苦しいのはこの子だ、君がしっかりしなくてどうすると、そう怒鳴ってしまってから、彼女に負けず劣らず動転している自分に気がついた。

コールから三十分ばかりも経ってから、ようやく医官がやってきて、感情の読めない声で、大丈夫ですよと告げた。医療機関に連れてゆくのかと思いきや、医官はその場で簡単な検査をして、注射一本打っただけだった。たったそれだけで、説明らしい説明もなく、若い医官はさっさと帰って行った。アドヴァイザーが、いやになるほど穏やかな口調で、そろそろ子供の服を着替えさせるようにと告げた。

「人が神様に祈るのを、」サーシャが、掠れた声で呟いた。「馬鹿げたことだと思ってた」  
何を言い出すのかと思った。思わず振り向くと、彼女は床にへたりこんだまま、髪を乱してうつむいていた。

「神様なんて、信じてなかったわ——だけど、でも」  
神様が何だって？ だが口に出して問い返すよりも早く、彼女の瘦せた肩が、小刻みに震えているのが目に入った。泣いているのだ。

「ほんとうは、ちゃんとどこかにいて、どこかで、わたしたちを見ているんじゃないのかって——願い事なんて、叶えてくれやしないくせに、罰だけは、きっちり与えてゆくのじゃないかって」

顔を上げないまま、サーシャは震える声で続けた。「わたしが、生まれてこないほうがよかったなんて言ったから——だから、だからこの子が、」

「関係ない」  
言葉を遮ったのは、とっさのことだった。やっと顔を上げて、サーシャは俺のほうを見た。信じていいのかどうか、迷うようなまなざしで。

「——関係ない」  
もう一度繰り返して、サーシャの手を握った。青く血管の透ける、骨張った手——冷たい指。彼女は何か言いたげに、唇を震わせて、けれど結局は言葉を飲み込んだ。

それでも夜が明けるころになると、クローディアの熱は下がった。  
何か、ひとつの奇跡のように、クローディアは穏やかになった寝息を立てていた。小さな手は、母親の指を握りしめていた。まだ油断すべきでないことは判っていたが、それでも安堵するのを押さえられなかった。とにかく、この子は生き延びたのだ。

徹夜明けでぐったりと重い体を引きずって、ソファに倒れ込んだ。こんなことが、この先何度もあっては身がもたないと思いながら。

二人目の子供を、俺は望んだが、サーシャは拒んだ。

俺もあえて強く食い下がることはしなかった。どのみち妊娠によって負担を被るのは、彼女のほうだ。サーシャが嫌がるのなら、無理強いする権利は、俺にはない。

もしものことを考えておかずにいられないのは性分だが、だからといって、もうひとりいればその子がクロードディアの代わりになるとは思っていなかった。

俺がやたらにクロードディアの写真を撮りたがるのに、彼女はいやな顔をした。口に出して咎めこそしなかったが、その目は俺を責めていた。

だけど俺は、写真が欲しかった。いつまでも持っておける、何か、形に残るものが。クロードディアが無事に育ったとしても、ともに暮らせるのは、どのみちこの子が五歳になるまでなのだから。

それでときおりサーシャの目を盗んで、幼いクロードディアの写真を撮っていた。だがそれも、じきにやめてしまった。

彼女のほうが正しかったのだと思った。写真を撮るたびに、俺は娘の持つ残り時間のことを、意識しないではいられなかった。いま撮っているこれは、いったい何のための写真なのかと。

娘が初めて笑ったのは、生後五ヶ月近くになってからのことだ。

サーシャの膝に抱えられて、端末に表示された絵本を眺めながら、クロードディアは急に、声を上げて笑い出した。

何がそんなに可笑しかったのだろう。サーシャが読んできかせた台詞だろうか。絵本には、子供だましの仕掛けがあったから――デフォルメされた動物のイラストが、画面上を元気よく飛び跳ねるようになっていて――それが楽しかったのかもしれない。

それまでにも、微笑めいた表情を浮かべることはあったが、はっきり声を立てて笑ったのは、そのときが最初だった。小さな両手を不器用に振り回して、クロードディアは笑った。

日に日に体重の増してきた娘の体を支えながら、サーシャはぱっとこちらを振り向いた。子供のように目を輝かせて、いまのを聞いたかというように。

娘のことよりも、彼女が笑っていることのほうに、俺は気をとられた。とっさに言葉が出てこずに、まじまじと見つめかえしていると、サーシャは怪訝そうに眉をひそめた。

「――どうかした？」

「いや……」

君が、そんな顔をするのを初めて見たと、正直に言いかけて、言葉を飲み込んだ。言えば、もう笑ってくれなくなるのではないかという気がしたので。それで、代わりの言葉を探した。「その本、気に入ったみたいだな」

「そうね」

微笑して、サーシャは端末に視線を落とし、ディスプレイを指でなぞった。相変わらず痩せて骨張ったその白い手の甲――そこに青い血管の透けているのを、見るともなしに見ながら、いつ

かの日のことを考えた。彼女が俺の目の前から居なくなる日のことを。

それは、確実にやってくる未来のはずなのに、こうして穏やかな午後の光の下で想像しようとしてみると、信じられないほど現実感のない話だった。

わかっていたはずのことだろう。

その言葉は、俺自身の声でもって、くりかえし俺を嘲笑した。いまさら何を言っているんだ。最初からわかりきっていたことだろうに。

クローディアはおとなしく母親の膝に抱えられて、内容がわかっているとも思えないのに、絵本をじっと見つめていた。そうして、サーシャが同じ箇所をもう一度読み上げると、やはり高い笑い声を立てた。

クローディアが体調を崩したり急に熱を出したりすることは、一度や二度ではなかったし、やがて床の上を這って動けるようになると、気をつけて見ているつもりでも、何かにぶつかってあざをこしらえるようなことが度々あった。

そうした事態のひとつひとつに、冷静に対処するというのは、相変わらず難しかったが、それでも赤ん坊との暮らしに、俺たちは徐々に慣れていった。

ずっと家の中だけに籠もっているのは、子供の情緒の発達を考えると望ましくないと、アドヴァイザーがやかましくいうので、数日おきに散歩に出かけた。

そうはいつても、女子供を連れて自由に出歩ける場所というのは限られている。金も無い。行政サービスの一環で、無償で利用できる遊技施設や運動場のたぐいがないわけではなかったが、そうした場所に連れてゆくには、まだクローディアは幼すぎた。

公園では、近所の子供らが仲良くなって転げ回っているのをよく見かけたが、月齢的なものもあるのか、クローディアはひどく人見知りをした。知らない人が通りかかるたびに緊張したようすをみせて、俺やサーシャの胸元にしがみつこうとする。ほかの子供が駆け寄ってきた日には、大声で泣き出す始末だった。

社会性を育てるといふなら、他人の存在に慣れさせるべきなのかもしれないが、まだあまりに小さな娘に無理強いするのも気が引けた。それでたいていは散歩を早めに切り上げて、家の中で絵本を読み聞かせてみたり、図鑑から呼び出したホログラムをリビングに投影してみたりしながら、機嫌を取ることが多かった。

教育という観点でいふなら、ライブラリには子供の年齢別に用意された映像がいくらでもあったし、あるいはアニメーション映画のたぐいを流して見せるのでも、同じことかもしれないが、だが同じような内容の映像を見るのでも、録音されたナレーションよりも、俺たちのどちらかが話して聞かせるほうが、クローディアは目に見えて喜んだ。親が自分に関心を向けていると感じられることが、重要なのだろう。

幼い娘は、何を見せても興味を示した。たわいのない玩具や子ども向けの図鑑も、地球上の動物の映像や精巧につくられた月球儀の立体映像も、クローディアは同じようにぽかんと口を開けて、食い入るよう見つめ、あるいはホログラムに夢中で手を伸ばした。

実際に目にする機会など生涯望むべくもないような、地球の空を舞う鳥の姿も、月面都市のど

こにでも植えられているようなありふれた街路樹に咲く花も、この子にとっては等しく未知のものなのだと思うと、何か、妙な気がした。

小さな手で端末を熱心に指さすその様子にせかされるように、俺はしょっちゅうライブラリを漁り回るはめになった。だが、不法に入手したたぐいのデータは、画像一枚でさえ、けて娘の目には触れさせなかった。いまはまだ何も判らなくても、成長してから思いがけないことを記憶に残しているかもしれないから。かつての俺がそうだったように。

そんな心配は、すべて杞憂なのかもしれないが。

まだはっきりとした言葉はもたないながら、問いかけるようにこちらを見上げて、これは何かというように声を上げる娘に、これは虹の入り江、そのクレーターはケプラーと、いちいち指さして際限なく教えてやりながら、こんなことに何の意味があるのかという思いを、胸の隅のほうに押しやって、蓋をする。それが新しい俺の日常になった。

ほんの赤ん坊だったはずの娘は、日増しに体重を増やし、手足を伸ばしていく。子供の成長は早い。その月日の流れが、そのままこの子の命の残りをカウントダウンしているかのように考えている自分に、俺は否が応でも気がつかされた。

この子だけが特別なのではない、月にいるほとんどすべての女たちが、同じ不運を背負って生まれてくるのだと、そう思おうとした。それは厳然たる事実には違いなかったが、だからといって、たいした慰めにはならなかった。

せめて手元を離れるまでは、健やかであってほしい。

その考えは、思い浮かぶ端から裏返って、俺を殴りつけた。自分の目の届くところからいなくなつたあとならば、どうなってもいいというのか？ あとは自分の責任ではどうにもならないことだから？

プログラムのほうの進展は、相変わらず止まってしまっていたが、ネットワーク上での情報収集は続けていた。それくらいなら、娘が昼寝をしている合間にでも、片手間にできたから。

ライブラリや公共報道のように、あるていど整理分類されたデータと違って、ネットワーク上に散乱するきれぎれの情報は、その半分以上がジャンクも同然だ。それこそ八割は間引いて読んだ方がいいような憶測ばかりのゴシップや、ほとんど都市伝説めいた噂話も含めて、なるべく広範に目を通すのが以前からの習慣だった。

そうした情報そのものが、直接何かの役に立つわけではない。ただ、その中には行政府の監視網に引っかかって、削除されるものがある。

何が見逃されて、何が検閲を受けるのかということにこそ意味があった。まさか人力でネットワークの隅々まで監視できるわけもなからうし、ほとんどは監視プログラムが何かの基準に乗っ取って、自動的に判別しているに違いなかったが、それでもおぼろげながら、行政府が何を問題視し、何を隠したがつているのかということくらいは、察しをつけることができる。

いまの社会の原型が出来上がったのは、ここ二百年ばかりのことだという。たとえばいま俺たちが無償で供与を受けている衣食住や、学費のたぐいは、すべて月行政府の管理する公金でまかなわれている。その借り分は、将来、協力金の納付という形で返す。そういう、当然のように感

じている世の中の仕組みというものは、あんがい歴史の浅いものだということだ。

いまの社会形態を維持できているのは、月面が外部から閉鎖されていることや、月がまかなえる人口限界が少ないことによるのだと、歴史の教師はかつて語った。もっと大きな集団、たとえば地球上の諸国家のように、人口コントロールの困難な環境では、なかなかそのバランスを取ることができないのだと。

バランスがとれなければ、何が起るのか？

その答えのひとつが戦争であり、内乱だと、歴史のテキストは語る。

俺たちの暮らすこの月面が、資源に乏しく、大きな人口を養う余裕がないがために、かえってそれが社会の安定をもたらしているのだと。

それと同時期に生物の授業で習った、閉鎖環境に置かれた生物群の話が、ひどく印象に残っている。地球上の、他から離れた離島において、天敵のいないままに長年のあいだ暮らしてきた生物群が、たったひとつのバランスの崩壊が原因で、容易に絶滅に追い込まれたという話。

月行政府がもっとも恐れているものは、おそらくそれだ。例のウイルスが蔓延していることで、皮肉なことに、月は地球の諸国家による干渉を免れてきた。この二百年、奇跡的に保たれてきた安定を、突き崩すかもしれないバランスの変化――外からの干渉。

サーシャがしょっちゅう絵本だの図鑑だのを読み聞かせていたにも関わらず、クローディアは少し、言葉が遅いようだった。

何かの拍子に声を発することはあるのだが、そこから先に進まないというか、なかなか単語にならない。アドヴァイザーは、そうしたことにはかなり個人差があるものだと言ったし、育児書のたぐいを探してみても同じようなことしか書かれていないのだが、たまに散歩に出てみれば、同じ年頃の子供を見かけるたびに、どうしても比べないではいられなかった。

それで、クローディアが一歳をすぎたころから、俺は意識して娘に言葉を教えようとした。そのあたりにあるものを指さして、何度も名前を言って聞かせる。小さな手を取って指ささせ、同じように言ってごらんと促してみても、娘はきょとんとした顔をして、俺を見上げた。あるいは何かの新しい遊びだと思うのか、俺の手をぶんぶんと振り回して、明るい笑い声を立てた。そのようすは愛らしかったが、胸の内で焦りがくすぶるのを、自分ではどうしようもなかった。

十五歳まで生きられる子のほうが稀だというのに、その心配をさておいて、他の子よりいくらか成長が遅いくらいのことでいちいち騒ぎ立てるのも、考えてみれば不毛なことなのかもしれないが、やはりどうしても気になった。

生きられるうちは、この子にも生きる権利があると、俺はいつかサーシャにそう言った。だが、果たしてセンターの連中は、同じ考えを持っているのだろうか。

五歳になって手元から取り上げられたとき、もしまだ言葉を話すこともできなかつたら、そのあとこの子は、どうなるのだろう。

強迫観念じみた不安が、ときおり発作的にこみ上げてくる。センターの連中にとって、大きな先天的欠陥のある子供を、生かし続ける意味はあるのだろうか。健康な女兒のクローンならば、いくらでも作り出せる環境があるというのに？

それは俺の思いつきではなかった。ネットワークの隅に埋もれがちな、センターに関する根も葉もない噂話のたぐいだ。馬鹿げたゴシップだと、笑い飛ばしてしまえばいい。頭ではわかっていた。だができなかった。

知的障害を持って生まれた女兒の「使い道」について、殺してしまうよりもなお胸の悪くなるような、いやな噂もあった。

まさかそんなことがまかり通っているはずがないだろう——センターの係官だって人間だ。そこまで冷酷でいられるわけではない——そんなふうに考えようとする自分と、そういう自分自身に向かって、お前は人間の良心などというものを本気で信じているのかと冷笑する、もうひとりの俺がいた。

そんな父親の心境など知るよしもないクローディアは、あいかわらずあーとかうーとか、きゃっきゃだとか、言葉にならない声ばかりをよく立てていたが、ある日の午後、言葉を口にするよりも先に、とつぜん歌い出したのだった。

もちろん歌詞も何もなく、わずかばかり音程らしきものがあるだけの、歌というよりも短いう

なり声のようなものだったのだが、それでもサーシャはすぐに、娘が歌っているのだと理解して、キッチンで離乳食の準備をしていた俺を呼びつけた。

半信半疑で耳を傾けていれば、たしかにクローディアは、母親の真似をしようとして、歌っているのだった。前からよく歌ってきかせていたあの古い歌を、サーシャがためしに口ずさんでみせると、長すぎて覚えきれないのだろう、娘は最初のほうの短いフレーズだけを、くりかえして唸ってみせた。

調子のはずれた歌を、妙に真剣な表情をしながら一生懸命歌っているのが、なんともいえず可笑しかった。思わず吹き出すと、クローディアは歌い止んで、ぽかんと俺の方を振り向いた。その様子が、なぜ笑うのかと言っているかのようで、ごめんごめんと、抱き上げて揺さぶると、娘の機嫌はすぐになおった。

それから先は早かった。クローディアはじきに不完全ながら、母親の口まねをして、歌詞らしきものをつけた歌を口ずさむようになった。その少し後には、家の中にあるものや絵本のなかの動物を指さして、単語を口に出すようになった。もっとも歌詞については、間違えて覚えたり、覚えきれずに適当に知っている言葉をつなげたりするので、意味はほとんどでたらめだったのだが。

それでも歌っている本人は、いつも真剣そうだった。その様子があまりに可愛かったものだから、その歌を片端から録音した。今度はサーシャも嫌がらなかった。

久しぶりに係官からの通信が入ったのは、クローディアがじきに一歳半になろうかという頃だった。

やはりはじめて見る相手だった。痩せて、生白い顔色をした係官は、話しづらい話題を切り出すタイミングを計る人間がよくそうするように、当たり障りのない世間話をいつとき口にしたあとで、落ちつきなく胸の前で指を組んだり外したりした。

『ところで今日は、ひとつ、お二人に考えていただきたい問題があるんです。その、少々申し上げにくいんですがね――娘さんのことで』

どきりとした。俺たちが気づいていなかっただけで、娘の健康にかげりが見えはじめているのかと思ったのだ。冷静に考えてみれば、そうでないのは明らかだったのだが――男が着ていた制服は水色のもので、医官であることを示す白い服ではなかった。そんなことも頭に上らないほど、動揺していたのだろう。

とっさに振り返ると、娘はモニタに映った知らない人間を警戒して、母親の体のかげに隠れるようにしていた。その背中を撫でるサーシャと、目が合った。蒼白な顔――

俺たちの動揺を見透かすかのように、係官はせかせかと両手を振って、汗をぬぐうような仕草をした。『いえ、ご心配なく。娘さんの健康状態は、現在のところ良好そのものですよ――そうではなくて、これから先の話です。娘を持つ親御さん方に、考えていただいている問題があるんですよ』

肩をすくめてみせて、係官は咳払いをした。この男は見た目どおり役目に不慣れなのか、それとも計算の上でこういう態度を取っているのだろうか、余計なことを考えた。

『例の病気のことは、いまさら申し上げるまでもないでしょうが……』

そんなふう切り出した係官の説明はまどろっこしく、直截な言葉を避けようとするあまりなかなか要領を得なかったが、要約すれば、次のような内容だった。

件のウイルスがもたらす病変については、女兒の二次性徴の時期からそのリスクが急増すること。いったん発症すれば症状は急速に進行してゆき、手の施しようがなくなる。そうならないうちに早期に手術をし、投薬と併せて女性ホルモンの分泌を抑えることで、成人した後も生きられる可能性が増すこと――

それは、初めて耳にすることだった。

それだけを聞けば、夢のような話だ。だが、そこで説明が終わらないことはあきらかだった。そんなうまい話があるのなら、とっくにほとんどの人間がその手術を選択しているはずだろうし、それならば、女たちの死亡率が依然として高いままであることの説明がつかない。

『ただし――当然のことですがね、そういう処置をとれば、娘さんが将来、子供を持つことは望めなくなります。何より、そういった選択をしたからといって、残念ながら、百パーセント発症を防げるというわけではありません』

わざとらしいおおげさな渋面で、係官は続けた。『それに、そのための手術そのものにも、リスクがあるんです』

それが原因となって命を落とすケースもあるのだと、係官は言った。あるいは成長してゆくなかで、それらの処置が遠因となって、思わぬ別の障害や疾病を招くこともありうる。

曖昧で婉曲な説明のしめくりとして、係官はその数字を口にした。『手術を選択した場合の、十年後の生存率は、およそ七十二パーセントです』

言葉が出てこなかった。

俺たちに考える時間を与えようともいうのか、係官はそこでいったん口をつぐんで、視線を落とした。

その数字を、どう受け取るべきなのか、とっさに感情が追いつかなかった。

何も考えられないまま、クローディアのほうを振り向いた。サーシャの背中に張り付いて、娘は不安げなまなざしを、俺たちに交互に向けていた。その小さな丸っこい指が、サーシャの服を握りしめて皺を作っているのを、無意識にやめさせようと手を握ると、急にその体温が、胸に迫った。

何もしなければ、娘が二十歳まで生きられる可能性はわずかなものになる。

だが手術をすることによって、かえって寿命を縮めるかもしれないというのなら、何もしないほうが、まだましなのではないのか――少なくとも、ためらわずリスクを無視するには、七十二パーセントというその数字は、あまりにも小さすぎた。

まともに頭が回らないまま、サーシャの横顔を見ると、彼女はモニタに映った係官のほうを凝視していた。凍り付いたような表情だった――炎のようなまなざしをしていた。

何を言っているかわからないまま、とにかく何か、声をかけようとした。だがそれより早く、係官が視線を上げて咳払いをした。

『どちらにしても、いまずぐ決断していただきたいというような話ではないんです。手術をする

にしても、何年も先の話になりますので。ですからまずは、お二人でよく話し合っただけ  
れば』

ひとりでせかせかと何度もうなずきながら、係官はシャツの襟元を引っ張った。『もし何かご  
質問があれば――』

途中で遮って、サーシャが声を上げた。「――ほかの娘たちは、どうなるんです」

その鋭い声音に、自分が殴られたような気がした。

白状すれば、その瞬間まで、俺はそのことを、まったく考えていなかった。

いや――あえてその存在について、何も考えないようにしていた。俺が考えても、どうせ何が  
できるわけでもないと思っていたから。

頭では、知っていたのだ。娘が生まれる前に――いや、もっとずっと以前から、クローンにつ  
いての説明は受けていた。生まれてくる子供が女の子だった場合、複数のクローンが作られる。

人数は知らされていないが、数人か、あるいは十数人か――クローディアよりも少し月齢の下  
がるその女の子たちは、センター内の複数の施設に別れ別れになって、育てられているはずだ  
った。

母親の険しいようすに怯えたのか、クローディアが泣き出した。その体を抱き寄せて、背中を  
さすってやりながら、俺は言葉を探した。探して、だが、何も出てこなかった。

いつときの沈黙のあとに、係官は視線をいったん横に逸らして、かすかにうなずいたようだ  
った。カメラに映っていない隣で、彼の上司が何か指示を出したのかもしれない。中途半端な間  
の後に、係官はこちらに向き直って、口を開いた。

『手術を受けることができるのは、そちらの娘さんだけです』

その困ったような声の底には、呆れの気配がにじんでいた。なぜ相手がそんなことを言うのか  
わからない――そういう戸惑い。

反射的に、声を上げていた。

「クローンだって、俺たちの娘です」

言い終わるころには自分でも、どの口で言うのだと思った。ついさっきまで、その存在さえ意  
識から閉め出していたくせに――だが、口に出してしまえば、その言葉は妙にもっともらしい響  
きを持って、自分自身をさえ打ちつけた。

係官はまたちらりと横を見て、それから眉をひそめた。『ええと――その、そうした感情を持  
たれること自体は、無理もないことです。しかし法的には、あなたがたは、彼女たちに対して何  
かを決定する権利を、持たないんですよ――ご存じのことと思いますがね』

何かの教科書を読み上げるように、そう説明して、係官は汗を拭いた。

「クローンの人権は、法で認められているはずでしょう――それとも彼女らには、庇護される権  
利がないと？」

言わずもがなのことを、俺は言った。係官は急に余裕を取り戻したように、背筋を伸ばして苦  
笑した。それは、ひどく勘に障る表情だった。青臭いことをいう子供をたしなめる、大人の笑  
み――『そうして、月面の女のすべてを不妊にするわけですか？』

怒りで目の前が白くなるような思いがしたのは、このときがはじめてのことだった。

『今日ご説明した内容については、あとで資料を送ります。まあ、ゆっくり考えてください』

伝えるべきことは伝えたといわんばかりに、係官はそそくさと通信を切った。

画面が暗くなっても、感情が激するあまり、しばらくのあいだ身じろぎひとつできなかった。

言葉もなく激昂しながら、その一方で、あの係官に腹を立ててもしかたがないのだと、頭の隅ではわかっていた。彼はただ、決められたとおりのことを説明しただけだ。少しばかり想像力に欠け、他人事を他人事として割り切っているというだけで。だが、頭ではそう思っても、とても冷静になれそうになかった。

セオの顔が頭の隅をちらついた。いつか自分が吐いた言葉が、いまになって、俺自身をあざ笑った。落ち着けよ、腹を立ててもしかたがないだろう——あのとき、妻の身を案じてアドヴァイザーに腹を立てていたセオに向かって、俺はそんなふうに言ったのではなかったか——

腕の中でクローディアが、小さく体を丸めてぐずっていた。怖いものから隠れようとして、俺の胸に顔を伏せたまま。会話の意味がわかっているとは思えなかったが、娘にこのやりとりを聞かせたくはなかったと、いまさらなことを考えた。

震える息を吐いて、どうにか自分を落ち着かせようとした。この場で憤れば憤るほど、クローディアを怖がらせるだけだと思ったから。だがその試みは、なかなかうまくいかなかった。

ようやく強ばった手から力を抜いて、隣を振り返ると、サーシャは押し黙ったまま、暗くなったディスプレイを、いつまでも見据えていた。炎のような、あのまなざしで。

可能性というのは、悪魔のロジックだ。

手術を選択することで、逆にこの子の命を縮める結果になったとき、俺は自分を許せるだろうか。

だが何もしないで、その結果、娘が年若くして命を落としたとしたら、そのとき俺は、何もしなかった自分を責めずにいられるのか？

それは答えの出ることのない、不毛な仮定だった。問題は、どちらを選択しても俺がその結果を知ることはないという、その一点にあった。

手術を選択した場合、成長に合わせて検査を重ねてゆき、問題がなければおおむね七歳から九歳のあいだに施術をするのだという。手術が成功すれば、子供は特別な施設にうつされて教育を受け、いずれはセンター内で働くことになる。

娘はその前に、五歳になった時点で俺の手元を離れて、センターに連れてゆかれる。これが男の子であれば、俺自身がそうだったように二年間の延長を申し出るすべもあるし、就学後も子供自身がそれを望むうちは、面会時間も設けられる。だが、女の子はそうはいかない。

父親はセンターに入った娘との接触を、いっさい禁じられる。その後の消息も知らされない。

あるいはそれは、俺にとって――男親にとって、都合のいいことだったかもしれない。

どちらの選択をしたところで、自分のいいように考えておけばいいのだ。どうせ結果を知ることはないのだから。自分の決定が、きっと娘にとっては最善だったのだと、そう自分をごまかし続けられればいい。

そう思う一方で、そういう自分の考えを冷笑している自分がいた。本当にそうか？ どちらを選んでも悔いずにいられるなどということが、果たしてあるだろうか？

そんなふうには葛藤しながら、頭の隅では気づいていた。俺は娘を心配しているふりをして、結局のところ、自分のことしか考えていなかった。どうすれば自分の気が楽になるかという、ただその一点しか。

長い、気詰まりな沈黙のあいだ、サーシャは身じろぎもせず、通話の切れたディスプレイをにらみ続けていた。

彼女がほとんど動揺していなかったことに、俺は遅れて気がついた。彼女は係官の話を聞いて怒りを見せたが、驚いたり混乱したりしているようには見えなかった。

「――最初から、知っていたのか？」

「手術のこと？ ええ、知っていたわ」

サーシャは答えて、視線だけで振り向いた。出会ったばかりのころを思い出させる、冷たい目つきで。

「君は、――どっちがいいと思う」

その問いかけははっきり言って、逃げ以外の何でもなかった。一瞬のうちに、いくつもの感情が胸の中で錯綜した。情けなさ――羞恥――罪悪感。

「決まってるじゃない――ほかに選択肢がある？」

固い声だった。サーシャはようやく視線を下ろして、まだ不安げにしている娘のほうを見た。決まっていると、口では言いながら、その視線は複雑に揺れていた。

母親を心配してか、彼女のほうに行きたがるクローディアを自由にさせて、俺は髪をかきむしった。

這い寄ってきた娘を抱きしめて、サーシャは顔を伏せた。髪が流れて、その表情を隠した。「ずっと思っていたわ。どうして生きられることが保証された人間と、そうでない人間がいるのかって——だって、おかしいじゃない。どうしてそんな不平等がまかりとおるの。どうしてわたしたちだけが、こんなふうに不安な思いをしなきゃいけないの？」

その声は、かすかに震えていた。

手術を受けられる子供と、その選択肢さえ与えられなかったクローンの女の子たちのことを、彼女は言っていたのだろう。だが俺の耳には、違うように聞こえた。どうして女たちだけが、こんな目に遭わなくてはならないのかと。

どうして？ その答えは、わかっていた。そのほうが都合がいい人間がいるからだ。

例の病気が月面都市に蔓延したことそのものは、誰のせいでもなかったかもしれない。もちろん防疫体制の不備だとか、医療機関の力不足だとか、責任を問えばいくらでも問えるだろう。だが、誰かが悪意を持って女たちを殺すために、わざわざ人工的にウイルスを作り出したのだなどという陰謀論は、馬鹿馬鹿しくて信じる気にもなれない。

だがその後、二百年もの月日が経つのに、いまだに対抗策さえ掴めずにいるのは、いったいなぜだ。病気の根絶はおろか、ワクチンも対症療法もろくに目処さえ立たず、女たちをほとんどただ死ぬにまかせているのは。

いまの医療技術では手の打ちようがないと、テキストは語る。そのやけにもものわがりのいい諦観は何だ。治療法を探すために手段を選ばず、ありとあらゆる手を尽くしたといえるほどの痕跡が見当たらないのは。

「だけど——」サーシャはそこで一度、言葉を詰まらせた。それから、何かをふっきるように、彼女は囁いた。「だけど、この子だけでも助けられる可能性があるなら、わたしはそちらに賭けたい……」

娘の小さな体を抱きしめて震える、サーシャの薄い肩を見て、ほかの娘たちはどうなるのかと係官を問い詰めた、あの瞬間の彼女の剣幕を思い出した。

そうだ——彼女は、与えられなかったほうの人間なのだ。

この女はどうして、迷わずにいられるのだろう。

彼女と俺の、何がそれほど違うのだろう？ 娘の行く末を、おそらく知る術がないという点においては、彼女と俺は同じ立場にいるはずだった。それだというのに、サーシャは娘のことだけを考えて、俺は自分のことばかり気にしている。

「だがそれで、もし——」

口を開くなり、いやになるほど弱気な声が出た。「その手術をすることで、かえってこの子を、早く死なせることになったら」

だから自然の成り行きに任せるべきだなどと、本気でそんなことを思っているわけではなか

った。俺はただ、子供のようにごねているだけだった。サーシャが手術を望むと言ったから、それに反論してただけだ。どちらの選択肢を選ぶのも、怖かったから。

「私のクラスメイトが、どれだけ生きてセンターを出られたと思うの？」

帰ってきた声は、冷え冷えとしていた。彼女の目に宿る軽蔑の色を、甘んじて受けるべきだと思った。だが、それでも俺は食い下がった。

「その手術を受けた人間は――君の周りにもいたのか」

サーシャはわずかの間、返答に詰まったようだった。

「――ええ、いたわ。先生たちは、大抵そうだと聞いた」

それじゃあ、と言いかけて、自分の声がひび割れていることに気がついた。口の中がひどく乾いていた。

「その人たちは、幸せそうだったのか？」

サーシャは口をつぐんで、目を逸らした。それが答えだった。

自分が理不尽な言いがかりをつけていることは、よくわかっていた。だが、言葉は勝手に口をついて出た。

「生きていてよかったことなんか、ひとつもなかったと、いつか君は、そう言ったな」

サーシャの眉が、ぴくりと跳ねた。言葉が続けるために息を吸うと、肺のあたりがひりひりと痛んだ。

「いまでもそれは、変わらないのか？ この子がいても――」

卑怯な言い分だった。自分でそうわかっていたのに、どうして言葉を押しえられなかったのだろう。

手を伸ばして、クローディアの頬を撫でながら、この子の体にメスを入れさせることに、耐えられないと思った。そんな反射的な、感情論だけの理屈で、俺はこの子から、生きられる可能性を奪おうとしていた。

「だけど――」

サーシャが何かを言いかけて、飲み込んだ。その声は掠れて、震えていた。

クローディアが急に、俺の袖を強くつかんだ。見れば娘の鳶色の瞳が、じっと見上げてきていた。

まさか話の中身を理解していたわけがなかったが、それでも俺は、咎められたように感じた。

顔を紅潮させて、不安げに――あるいは怒ったように、見上げてくる娘の、ふっくらした頬を掌で包みながら、どうにか自分を落ち着かせようとした。だがうまくいかなかった。

「悪い――時間をくれないか。もう少し冷静になってから、考えたい」

サーシャは反論せず、白い顔でうなずいた。こんなふうには言葉の勢いだけで、感情任せに決めていい問題ではなかった。何がこの子のためなのか、もっと時間をかけて、考えるべきだった。

それからの数日、目の前の選択から逃れるように、傍受プログラムの修正に打ち込んだ。

最初の頃と違って、サーシャがちゃんと娘の面倒を見てくれているのはわかっていたから、適当な部屋に籠もってもよかった。実際に初日はそうしていたのだが、それが自分でもいかにも逃

げ出しているように思えて、結局はリビングに端末を持ち込むことにした。

娘の目に画面を触れさせないよう、いちいち注意を払いながら作業をするのは効率の悪いことには違いなかったが、少なくともサーシャが絵本を読んでやっている間、クローディアは大人しいものだった。

続けて何時間も作業をするのは久しぶりだった。ふと我に返って画面から視線を外すたびに、ひどく喉が渇いて、目が痛んだ。

何日目のことだったか、作業を一段落させて画面を閉じ、休憩のつもりでソファに体を投げ出したら、そのとたんに睡魔に引き込まれて、うっかり寝入ってしまった。

そのままきれぎれの、何かあまりよくない夢を見ていたような気がする。とつぜん胸に衝撃を感じて、咳き込みながら目を覚ましたら、クローディアが胸の上に馬乗りになって、小さな手で俺の顔を叩いていた。どうやらソファの背もたれから飛び降りてきたらしかった。

やめさせようとして手を伸ばすと、何が面白かったのか、クローディアは笑い声を上げて逃げ回った。娘は少し前からひとりで歩けるようになっていたが、まだ足取りが危なっかしい。捕まえて抱き上げると、娘は身をよじって、ソファの反対側に掛けていた母親のほうに手を伸ばした。

「見てたんなら止めてくれよ」

そんなふうに苦笑して娘を渡すと、サーシャはそっけなく首をすくめて、気のない風に謝った。「楽しそうだったから」

そのまま何となく黙り込んだ。気まずい空気になりかかったのを取り繕うように、サーシャは娘を抱いたまま調理機械の前に立って、夕食の準備をはじめた。

俺は俺で端末を立ち上げて、プログラムの続きにもどった。話し合わなくてはならないことはわかっていたのだが、いまのままではまた口論になりそうだったし、そうなればクローディアを不安がらせるということだけははっきりしていた。

サーシャがとつぜん体調を崩したのが、その少しあとのことだった。

その日の朝から、微熱があるといって、彼女は寝室から出てこなかった。

彼女が自身の体調のことで弱音を吐くことなど、それまで一度もなかつただけに、俺は動揺した。クロードディアが異変を察して不安がるので、慌てて笑顔を取り繕いはしたものの、すっかり板についたはずの作り笑いがいやに引きつっているのが、自分でもわかった。

それでもどうにか離乳食を食べさせ、満腹になった娘がうとうとするのを待って、ようやく寝室のほうに向かった。ドアを開けるために壁のパネルに伸ばした指が震えて、見当外れの場所を叩いた。手がひどく冷たくなっていた。

サーシャはまだ寝台の中にいた。

ぐったりとしたその姿をひと目見たとたん、足がすくんだ。いまさら動揺するというのは、ひどく馬鹿げたことだった――いつかそのときが、ほとんど確実にやってくるだろうことも、それがもういつであってもおかしくはないことも、俺は、知っていたはずだった。それだというのに、いまさら何を慌てる必要があるというのか。

俺の顔色は、よほどひどかったのだろう。サーシャは目を開けて俺のほうを見るなり、怪訝そうな顔をした。

「どうかしたの」

まさか、そうなのかとは、とても聞けなかった。黙り込んで立ち尽くす俺をいつとき見上げたあとで、サーシャは誤解に気がついたようだった。

「ただの風邪よ。たいしたことはないと思うけれど、クロードディアにうつるといけないから、しばらくこっこの部屋にいるわ」

引いていた血の気が戻るのが、自分ではっきりとわかった。

熱を取り戻した指先がしびれ、心臓の音がいやに耳についた。寝台のそばに歩み寄りながら、自分の足が床を踏んでいないような気がした。

床に膝をついて彼女の前髪を払い、手のひらで額に触れると、たしかに少し、熱があるようだった。

「ほんとうに――」

例の病気ではないのかとは、口に出すことができなかった。だが察したのだろう、サーシャは小さく肩をすくめて、呆れたように言った。「風邪よ。症状が違うわ」

安堵のため息が漏れるのをどうすることもできなかった。

安堵――何を安心するというのだろうか？ それは滑稽なことだった。だが、そういう自分の愚かさを笑う余裕もなかった。

いいかげん、覚悟を決めなくてはならなかった――とっくに決めていなくてはならなかったのだ。

そんなことが可能だと思っていた過去の自分が、信じられなかった。

怪訝そうな彼女の視線を振り切るように、小さく首を振って、まったく違うことを口に出した

。「薬をもらってくる。何か食べられそうか」

サーシャはいったんは首を振りかけて、思い直したように、小さくうなずいた。それからふいに、くすりと笑った。前によくそうしていたような、皮肉っぽい笑い方で。

「どうした？」

聞き返すと、彼女は首をすくめて、小声でささやいた。

「――今度こそ、わたしの番かと思ったのに」

どこか醒めたような、乾いた声だった。

食べ物と薬を取りにゆくはずが、いつまでも動こうとしない俺を見て、サーシャは眉をひそめた。

「何？」

返す言葉は、すぐには出てこなかった。

熱のせいかな、サーシャの顔色は、かえっていつもよりいいくらいだった。そのかすかに上気した顔から目をそらせないまま、ようやく俺は口を開いた。

「そうだったらよかったと、言っているように、聞こえたから」

声が掠れた。

サーシャは片眉を上げて、小さく首を振った。「別に、死にたいわけではないわ」

どうでもよさそうな声で言ってから、彼女は、ふいに気がついたように、何気なく顔を上げた。「でも、あなたには、そのほうがよかったんじゃない」

冷や水を、浴びせかけられたような気がした。

それが、彼女の皮肉だったならよかった。無関心だった俺を責めるための言葉だったのなら――だが彼女の声音には、皮肉の色はなかった。その声は、当たり前のことを言うような、淡々とした調子をしていた。

「――どうして」

それ以上続けることができなかった。我ながら白々しい、答えのわかりきった問いかけだった。

「だって、そういうものでしょう。変に情がうつる前に、さっさといなくなったほうが、気が楽――」

サーシャは途中で言葉を止めた。それから、困惑したように、二度、瞬きをした。「どうしてそんな顔をするの」

俺は、どんな顔をしていたのだろう。

とっさに片手で顔を覆って、うつむいた。表情を見られたくなかった。

「はじめのうちは――」喉につかえる声を、無理に押し出すようにして、俺は言った。「そう思っていた。君に会ったばかりの頃は」

それは、懺悔だった。だが、口に出す端から、自分で嘘だと思った。俺はつい先ほども、似たようなことを考えたばかりではなかったか。

彼女と目を合わせきれずに、俺はうつむいた。目の奥が熱かった。言葉が喉に絡んだ。

「――もう、遅い」

うつむいたまま、敷布の上に、サーシャの影が揺れるのを見た。

その手が、ためらいがちに伸ばされてきて、やがて俺の頬に触れた。かすかに汗ばんだ、細い指――とっさにその上に、自分の手を重ねてから、その頼りない感触に、俺は怯えた。

手放すことに耐えられないようなものを持つのは、愚かなことだと思っていた。

「どうして、泣くの」

わかりきったことを、彼女は聞いた。途方に暮れた、子供のような声で。

顔を見られないまま、俺はサーシャの体を引き寄せた。抱きしめたというよりも、ほとんど彼女にすがりつくように。そうしながら、震える息をかみ殺そうとした。

痩せて骨張った体は、熱かった。それで、相手が病人であることをようやく思い出して、俺は体を離れた。

「悪い。――葉、取ってくる」

サーシャの返事を待たずに、部屋を出た。振り返ることができなかった。

母が死んだのは、俺が四歳のときだった。

顔も声も、もうよく覚えてはいないが、妹といっしょくたに俺を抱き寄せる腕のやわらかさと、抱きしめられるたびに髪が頬をくすぐったその感触は、いまでも覚えている。

愛しているという言葉、口癖のように言う人だった。ささいなことでも声を立てて笑った。部屋を飾り立てるのが好きで、よく花や動物の絵を父に探させて、それをリビングの壁に映していた。

母が死んだ日のことは、はっきりと記憶に残っている。

体調を崩しがちになったのは、もっとずっと前からのことだったと思う。少なくとも、ぐったりと横たわる母を心配してそばをうろつき回ったことが、一度や二度ではなかったのは確かだ。

いつからか、俺たちを安心させるために明るく振る舞う余裕もなくして、母は硬く目をつぶり、痛みに耐えかねてうめくようになった。そんなとき、俺と妹はおびえて父親を呼びに走ったが、彼はたいてい自分の作業に没頭していて、俺たちが取りすがっても、気もそぞろの様子で、うるさそうに手を振ってみせた。

端末を使ってアドバイザーにコールする手段を、そのころ俺たちはまだ教わっていなかった。泣きながら寝室に戻ると、母は無理に笑って、大丈夫、じきに治るからと嘘を吐いた。

ある朝起きたら、母はリビングで冷たくなっていた。

父が、その体を固く抱きしめたまま、言葉もなく床に座り込んでいた。その顔には、涙の流れたあとが幾筋もついていた。

母がもう目を覚まさないということを、俺たち兄妹が理解するのには、いくらかの時間がかかったように思う。父は市民センターに通報することもせず、長いこと母の亡骸を抱えて、放心していた。俺たちが話しかけても、返事はなかった。

ずいぶん経ってから、父はようやく顔を上げて俺を見ると、壁のパネルの赤いボタンを押すようにと言った。

言われたとおりにすると、画面に係官の顔が映った。父が何か言うと、いつときして、知らな

い男たちが家に押しかけてきた。彼らは無言のまま、淡々と母の体を担架に乗せた。母がどこかに連れてゆかれるのだということを、ようやく理解した俺たちが、慌てて担架に駆け寄ると、係官は顔をしかめたが、怒鳴るようなことはしなかった。

動かない母の手にふれると、その指はひどく冷たかった。

やがて母は連れてゆかれ、あとにはまだ呆然としている父と、おびえて泣いている妹だけが残った。

「お母さん、どこ」

妹からそう聞かれたところで、俺に答えられるはずがなかった。唯一、その答えを知っていたはずの父は、口を開こうとせず、いつまでもへたり込んでいた。

あんなに悲しむのだったなら、と、後になって、よく思った。どうして母が生きているうちに、もっと彼女に優しくしてやらなかったのかと。

いつも端末にかじりついているばかりで、母が話しかけても、生返事ばかり返していた父――そのくせ、いざ母をうしなるとたん、おかしくなったあの男。

父のようになりたくないと言いながら、俺は彼と同じことをしようとしていた。

俺はひとつの決意をした。

夜、娘が眠るのを待って、話があると声をかけると、サーシャは困惑したように視線を泳がせた。

リビングのソファに並んで座って、落ち着かないふうに身じろぎをする彼女の手を握った。嫌がられるかもしれないと思ったが、サーシャは何も言わなかった。

いつまでも肉のつかないその手の、爪の形が、そっくりクロードディアに遺伝していることに、急に気がついた。そういう、毎日目にしているはずなのに気がつかないでいることが、他にもたくさんあるような気がした。

どれだけのことを見落としたまま、限られた時間を漫然と過ごしているのだろう。月日は待ってくれないというのに。

「ずっと前から、考えていることがあるんだ」

小さくひそめた声で、俺は話しはじめた。

卒業セレモニーの日の出来事が、俺を慎重にさせていた。今度こそ、決行のそのときまで、誰にも自分の計画について話すつもりはなかったし、他人に頼るつもりもなかった。自分の胸の内だけに留めて、ひとりで何もかもやり遂げるつもりだった——これまでは。

いまでも、こうしてサーシャに話しながら、自分がひどく愚かなことをしているような気がした。だが、どうしても、黙ったままではいられないと思った。

家の中が盗聴されていないと、保証するものは何もない。いちいちすべての個人住宅まで監視するほど、行政府は暇ではないだろうという、根拠というには薄弱な憶測があるだけだ。

だがその曖昧な可能性に、俺は賭けることにした。どのみちそこまで盗聴が徹底しているくらいなら、俺が書いているプログラムだって、とっくに監視カメラによって筒抜けになっているだろうから。

「いま、地球との国交は、ほぼ断絶してる。わずかな物資のやりとりがあるくらいで——それも、月では手に入らないような資源を、最低限輸入しているだけだ。地球で暮らす連中は、月に人類が暮らしていることさえ、ろくに意識していないかもしれない」

地球の状況については、まともに耳に入っていない。行政府の人間は、おそらくそれなりの情報を持っているのだろうが、そうしたことが報道されることはなかった。

歴史の教科書で、地球時代の項に乗っているような国々が、いまでもそこに形を変えずに存続しているのか。彼らがどういう技術を持ち、どの程度の水準で生活をしているのか。いまでも戦争や内乱は絶えずに起こっているのか。文化はどのていど発展しているのか。

「俺たちの先祖が月にやってきた時点で、地球の人口は、百億を超えていたらしい。それくらいの規模で、人間がいまでも暮らしているのなら、きっと彼らは月よりも進んだ技術を持っているはずなんだ——医療も、工学だって」

なぜ行政府は、そうしたことを隠したがるのか。

彼らが情報を掴んでいないとは、とても思えない。卒業前に俺が作ったような子供だましの受

信機でさえ、理論上は軌道衛星からの電波をそれなりに拾えるはずなのだ。

地上で長時間作業をする技術者や研究者の中には、好奇心から同じことをやる者もいるという。ネットワークに書き込まれても、いつの間にか消されてしまうたぐいの噂話。

なぜ行政府は、情報を秘匿したがるのか。なぜ地球との国交を頑なに閉ざしたままているのか。

変化を、恐れているからだ。彼らにとって都合のいい、いまの社会を壊すかもしれない要因――地球からの干渉を。

「確証があるわけじゃない。もしかしたら何か、俺たちの知らない大きな災害や何かがあって、それこそ文明が退行しているようなことだって、考えられないわけじゃないし――だけど、そうじゃないと確かめられたなら」

一度言葉を切って、息を吸った。ずっと自分の頭の中だけに秘めていた考えを、口に出して人に聞かせることには、自分で思っていたよりも、はるかに抵抗があった。「地球の連中の目を、月に向けさせたいんだ」

手の中で、サーシャの指がぴくりと震えるのがわかった。

「地球の医療技術がどれくらい進んでいるかわからない。だけど、もしかしたら――」

月ではこの二百年から停滞している、例のウイルスについての研究に、何かしらの進展があるかもしれない。

それは、都合のよすぎる甘い考えなのかもしれない。口に出してしまえばなおさら、自分の考えていたことが、子供の空想じみて聞こえた。

月面で発生したウイルスのことは、当時の地球でも、大きなニュースになったに違いなかった。それを考えれば、これまでの二百年に、地球側のほうから、何かしらのアクションがあってもよさそうなものだった。それが無いのは、なぜか。彼らにも、どうしようもなかったからではないのか。それも、充分にありそうな話だった。

だが――いまでもそうだろうか？ これほどの時間が経っても？

最初に出た渡航禁止令は、地球に感染力の強いウイルスを持ち込ませないための措置だっただろう。だが渡りに船とばかりに、当時の月はその動きを歓迎して、宇宙港を完全に封鎖した。その状況が続くうちに、やがて地球は月のことを忘れた――そういうことだったのではないのか。

それはテキストには載っていない、俺の憶測に過ぎなかった。だがそれでも考えなければ、説明がつかない。二百年前の当時でさえ、地球の技術は進んでいた。それこそ軍事力だって、月とは比較にもならないはずだ。彼らさえその気になれば、月に連絡を取る手段も機会も、いくらでもあったはずなのだ。それをしなかったのは、政治的な理由ではないのか。

研究者が渡航することは許可されておらず、病原体のサンプルを入手する機会もない――ウイルスを地球上に持ち帰って、万が一にもそれが漏洩すれば、見込まれる死者の数は月の比ではない。そんなリスクは犯せない。

だから双方で、都合の悪いものに蓋をしたのだ。そのうちに、遠い空の上での出来事は、地上の人々から忘れられてしまった。人間は、見たくないものを見ようとはしない生き物だから。

だが――果たしてすべての人間が、そうだろうか？

どこか遠くで苦しんでいる女たちの存在に、見て見ぬ振りをし続けることに、良心の呵責も覚えられないでいられるような人間ばかりだろうか。

地球全体に――可能な限り広い地域に、多くの人々に、月の現状を訴えて、技術協力を請う。それが俺の計画だった。

SOSは、あっけなく無視されるかもしれない。遠く離れた、これまで二百年から国交も途絶えていた見知らぬ相手のために、腰を上げる人間が、どれだけいるかわからない。仮に彼らの中のいくらかがその気になったところで、具体的に何がどうできるのかも。途中でなにがしかの横槍が入らないとは思わない。そもそも地球の医療技術は、俺が期待するほど進んではいないかもしれない――

だからこれは、ただの賭だ。それも、ひどく他力本願な。

だがそのほかに、賭けられる目を、俺は持っていない。月の人口は、年々減少し続けている。技術力も、ほとんどあらゆる分野で、ゆるやかに衰退しつづけている。

このまま何もしなかったとしても、月人類はゆっくりと数を減らし続けながら、あと何百年かを生き延びられるかもしれない。そのあいだ、それなりの技術の保たれているかぎり、女たちは量産され続け、死に続ける。

自分のやろうとしていることが、どれくらい分の悪い賭なのか、わからない。わかっているのは、行政府にはその目に賭ける意思がないということだけだ。彼女らをいまの境遇から解放できるかもしれないという曖昧な可能性よりも、自分たちの安心を選びつづけるということだけ。

俺が話し終えても、サーシャはしばらく黙っていた。ずいぶんと時間が経ってから、ようやくのことで、彼女はおぼつかないような声を出した。

「地球って、本当にあるの……？」

それは、予想しなかった反応だった。サーシャは戸惑ったような顔のまま、つないだ手を見下ろしていた。

どう答えていいかわからずにいる俺を、おそろおそろというように見上げて、サーシャは続けた。

「全部、つくり話なのかと思ってた。天の国とか、エデンの園とか、そういうものと一緒で――」

それが、聖書に出てくる言葉だということには、遅れて気がついた。

うなずきながら、そういうものかもしれないと思った。センターで彼女らが受ける教育の中身を、俺は知らない。だがいつか、サーシャの端末で見たライブラリの制限を思えば、察しはつくような気がした。

「クローディアは」

サーシャは、何度か瞬きをしたあとで、ようやくいくらかはっきりした声を出した。彼女が何を訊こうとしているのか、皆まで言わないうちに察しがついて、俺は唇を引き結んだ。

「あの子が活着ているうちに、間に合う……？」

彼女の青い瞳を見下ろしたまま、俺はためらった。

間に合わせると、俺は、そう言うべきだった。きっと間に合わせてみせる、何も心配はいらな

いと。その言葉が嘘になるかもしれない。あとどれだけの時が残されているかわからない彼女のために、嘘をつくべきだった。

「――わからない」

だが実際に口から出たのは、本音だった。

何も、わからなかった。地球がどうなっているのか――望むような技術があったとして、彼らの協力が得られるのか。そもそも計画自体、本当に実行に移すことができるのかさえ、何の確信も持っていなかった。

嘘をつき続けることのできない自分の弱さを、俺は憎んだ。だが口は勝手に動いた。

「もしうまくことが運んでも……結果が出るまでには、時間がかかるかもしれない――それが何年かの話なのか、もっと長い時間なのかも」

言いながら、俺はいったいなんのために、彼女にこの話を打ち明けているんだろうと、そんなことを思った。

無力感がどっと押し寄せてきた。あいまいな、かえって残酷な期待を持たせるだけの、何の約束も伴わない話。

俺はただ、彼女に弁解をしたかっただけなのかもしれない。あるいは懺悔を。

何の懺悔だ？ 他人事のように、見て見ぬ振りをするだけではないと――だから許してくれと？ そんな言い訳に、いったい何の意味があるというのか。

サーシャがゆっくりと、瞬きをした。その表情に失望の色が浮かび上がるのを、俺は待った。だが彼女は、かすかに唇を開いて、

「――ありがとう」

かすれた声で、それだけを言った。

言葉を失って、俺は彼女の頬を涙が伝うのを、ただ見ていた。

「何をしても、同じだと思ってた。怒っても、大人に逆らってみせても、全部無駄で、これから先も、何一つ変わらないんだって」

ありがとうと、サーシャはもう一度繰り返した。それから、かろうじて聞きとれるかどうかというような、かすかな声で囁いた――これで、希望を持って死んでゆけると。

三歳をすぎた頃からはクローディアが病気をすることも減り、時間ができた俺は、部屋に籠もって傍受プログラムの仕上げにとりかかった。

それと並行して、発信するメッセージの文案を練る。これは想定しうる地球の情勢にあわせて、何パターンでも用意しておいていい。

検討すべき要素はいくらでもあった。いま俺たちの使っている平文の英語が果たしてそのまま向こうに通じるのかということから、まず心配しなくてはならない。

どういう形で送ればより多くの人目に触れさせることができるのか、あるいはどの地域をターゲットに据えるのか。タイミングも重要になってくる。そうしたことを見極めるためには、情報収集が必要だった。月面で手に入る過去の情報から推察するには、二百年という隔絶は、あまりに大きすぎた。

メッセージを向こうに届ける手段についても考えなくてはならなかったが、こちらはそれほど悩まなくて済みそうだった。何も地球まで直接電波を届けなくてはならないわけではない——彼らの人工衛星を経由すればいいのだから。こっそりやろうと思うと難しいが、発信するだけなら、遠距離通信のための装置は身の回りにいくらでもある。

情報収集の方は、前もって何度も繰り返す必要があるし、そのためには誰にも知られず、できることなら痕跡も残さずにやらなくてはならないが、発信の方はそういう気を遣う必要はない。内容とタイミングさえ誤らなければ、最悪一度きりの、一方的なものになってしまっても用は足りる。何なら身許がばれてもかまわない。

作業を進めながら、焦りがいつも胸の底にくすぶっていた。

これまでに同じようなことを考えた男が、どれくらいいただろう。こんなことが、自分が初めて思いついたアイデアだとは思えなかった。これまでに何度も試みられて成功しなかったことなら、俺にできるという保証は、何もない。

それでも、できることをやるしかないのだ。

一日の時間の大半を、そちらの作業に割くようになって、クローディアに寂しい思いをさせているという自覚はあった。俺は自分の父親と、まるきり同じことをしていると思った。

それでせめてもの埋め合わせのように、毎朝クローディアの髪を俺が結ってやるのが、新しい習慣になった。

その頃、娘は急に女の子らしい、明るい色の服を好んで着るようになって、散歩に出かけるにも、気に入りの服でなければ駄々をこねることがあった。散歩中によその家の女の子を見かけると、その髪型をうらやましがって、自分もとせがんだりする。

ライブラリでやり方を調べながら、昔、妹がよく母親に髪を編んでもらっていたのを思い出した。

言葉が遅かった一歳のときが嘘のように、この頃クローディアはやたらに口が達者になった。ことあるごとに大人の口まねをしたがり、意味もよくわかっていない言葉を使って、俺たちを笑わせた。

間に合わせてみせる――

口では大人びたことをいうくせに、すぐに甘えて膝に乗ってくる体温の高い体を、腕の中に抱えて揺すってやりながら、何度となく胸中でそんなふうに呟いた。だが、その言葉を口に出して言うことは、どうしてもできなかった。

内心では、いつかその日がやってくることにおびえ続けていたが、幸いなことに、サーシャが大きく体調を崩すことはないまま、月日は過ぎていった。

それがどれほど奇跡のようなことだったか――娘の五歳の誕生日までの残り日数を数えながら、二人でその成長を見守ることができるということが。

統計をそのまま信じるならば、二十歳まで生きられる女性は、少ないとはいえ、何十人かに一人の割合でいるはずだった。だがその数に、例の処置を受けた女たちが含まれているのだとしたら、そうでないサーシャがいまここにいることが、いかに稀なことなのか――

だが、その日が近づくにつれて、彼女は浮かぬ顔をするが増えた。

それは当たり前と言え、当たり前のことかもしれなかった。その日がやってくることは、そのままクローディアとの別れを意味しているのだから。

だが彼女の表情や、何気ない態度からにじみ出る不安は、どうも、それだけが原因ではないように見えた。

彼女は何かを恐れているようだった。さっきまで笑っていたのに、ふと気がつけば手許の端末をじっと見つめて、何か思いにふけているということが増えた。そういうとき、娘が心配して袖を引いていることにも、サーシャはなかなか気がつかなかった。

正午すぎのことだった。

ちょうど食事を終えてクローディアを昼寝に追いやり、俺は食器を片付けているところだった。何かが落ちる音がして振り返ると、サーシャの手から離れた小型端末が、床に転がっていた。

近くにあったテーブルに、取りすぎるようにして、サーシャはかろうじて体を支えていた。

「どうした。気分が悪いのか」

駆け寄って顔をのぞき込むと、サーシャは唇を引き結んで、首を振った。血の気のうせた白い顔の中で、青い瞳だけが、爛々と輝いていた。彼女がこんな顔をするところを、前にも見たと思った。クローディアが生まれたばかりの頃――

とっさに床に落ちた端末に視線を向けると、画面には、短いメッセージが表示されていた。

NOT FOUND――

そのあとに続く文字列は、誰かのパーソナルコードらしかった。

何が起きたのか、察しはつくような気がした。おそらく彼女はセンター時代の友人に、連絡を取ろうとしたのだ。いや――実際に連絡するつもりがあったのかどうかはわからない。だが、とにかく通信画面を呼び出して、誰かのコードを検索した。

言葉もなくうずくまったまま、自分の胸をかきむしるようにして、サーシャは、嗚咽を堪えていた。何か、声をかけたいと思った。だが情けないことに、かけるべき言葉が何も思いつかなか

った。

「どうして、」

掠れた声で、きれぎれに、サーシャは叫んだ。「どうして、わたしの――」

言葉の意味を取りかねて、目で訊ねようとした。だが彼女は俺と視線を合わせようとはせず、うなだれたまま呻いた。

「おかしいじゃない――皆、死んでしまったのに、なんで、わたしだけが」

その言葉の続きを聞きたくなくて、とっさに彼女の体を抱きすくめた。

サーシャはいつか、死にたいわけではないと、そう言った。

だが、死にたくないとは一度も言わなかったのだ。そのことに、いまさらになって、俺は気がついた。

「君が――」

声が震えた。「君が、生きていてくれることが、俺には、」

腕の中で、サーシャの強ばった薄い肩が、小刻みに震えていた。

「俺には、どれだけ――」

だがそんな言葉が、彼女にとっていったい何の救いになるだろうと、そう思ったら、もうあとが続かなかった。

NOT FOUND。

その人物は存在していないと、画面は告げていた。まるではじめから居なかったもののよう

。

その一件の後、サーシャは物思いに沈むことが増えた。

以前のことがあったから、しばらくのあいだ、気がけてなるべく目を離さないようにしていたのだが、それについては俺の考えすぎだった。

少なくとも、彼女があ頃のように不安定になるようなことはなかった。ただ何かの拍子にふっと、真剣な横顔を見せて、考え事をしているようなことがよくあった。

クローディアの誕生日まで残り三ヶ月をきったあたりから、俺あてにカレッジや市民センターから、今後の手続きや進路に関する連絡が入るようになっていた。

前後して、娘の準備についての連絡も入り始めた。センターでの暮らしに向けて、いまから身につけさせるべき生活習慣が、アドバイザーから散発的に指示されるようになった。

五歳になったらセンターに移って、ほかの同い年の女の子たちと一緒に生活をするのだという話は、早いうちからたびたび言って聞かせていた。だがそこに行くのは自分ひとりで、俺もサーシャもついてはいかないのだということを娘が理解するまでには、時間がかかった。残りひと月を切るころになって、クローディアはようやくその事実を、はっきりとのみこんだらしかった。

どうして別れ別れにならなくてはならないのかということ、幼い娘に理解させることは難しかった。それも当然かもしれない——自分自身も納得していないことを誰かに信じさせようというのだから。

「センターになんて、いかない。ずっとおうちにいる」

このごろ言葉がずいぶん達者になったクローディアは、短い足をせいっぱい踏ん張って、俺たちを睨め上げた。

ずっと聞き分けのいい利口な子だったのだが、母親譲りの気の強さが、どうやらこのごろ表に出はじめていた。普段はそれもほほえましく見ていられたのだが、このときばかりは手を焼かされた。

「だけど、お父さんもお母さんも、ここから出て行くんだよ。それでもお前、ひとりで残るかい」

そう言うと、クローディアは顔を真っ赤にして両目いっぱい涙をたたえた。

「どうして、いっしょに行けないの」

どうしてなんだろうと、つい言いそうになったのを飲み込んで、どうにか言葉をすり替えた。「女の子にしか行けない場所なんだよ」

それがあまり賢い切り返し方ではなかったことには、言いながら自分でも気がついてた。案の定、クローディアは即座に切り返してきた。「じゃあ、おかあさんは？」

どう説明したものか、途方に暮れてサーシャのほうを見上げると、彼女は目を伏せて、ゆっくりと首を振った。

「——お母さんには、ほかの場所で、しなくてはならないことがあるの」

サーシャの口調は、大人に向かって話すときのような、手加減のないものだった。そのことに

気を呑まれたように、クローディアは顎を引いたが、すぐにぱっと顔を上げた。

「じゃあ、ディアも、いっしょにてつだう」

言ってから、自分で名案と思ったのだろう。期待に目を輝かせながら、クローディアは母親を見上げて返事を待った。

ふっと目元を和ませて、サーシャは笑った。屈みこんで娘と視線を合わせ、「ありがとう。だけど、お母さんがひとりでやらなくちゃいけないことなの」そんなふうにした。

納得できたはずもないだろう——それでもクローディアは黙り込んで、唇を曲げた。

泣き出す、と思った瞬間、ぱっと身を翻して、娘は子供部屋に走って行ってしまった。

サーシャは子供部屋の前まで行って、いっとき中の様子を伺っていたが、しばらくしてリビングに戻ってきて、肩を落とした。

「ほかの人たちは、どんなふうにして聞かせているのかしら——あなたの子供のときは、どうだった？」

「どうだったかな……」

実のところ、覚えていなかったわけでもないのだが、俺はとっさに言葉を濁した。

七歳のとき、早く家を出たくてしかたがなかった。家の中はいつも落ち着かなかったし、登校すればしたで、クラスメイトたちはは学寮での生活に慣れ始めていて、俺はその中でひどく浮いた。自分たちはむりやり親元から引き離されたというのに、どういうわけか特別扱いを受けている子供がいるというので、皆は面白くなかっただろう。

ほかの家ではどうしているのか——旧友の誰かに連絡して聞いてもよかったが、おそらく、参考にはならないだろうという気がした。納得がゆくまで言い聞かせることなどできないまま、その日を迎えることのほうが、多いのではないだろうか。

どのみち納得しようとしまいと、無理矢理連れてゆかれることは変わらないのだ。別れのときに心残りを少なくしたいというのは、しょせん親の勝手な都合だという気がした。

だが、彼女にそう言うのも気が進まなくて、俺は話題を変えた。「ところで、君の、やらなきゃいけないことってというのは？」

サーシャが自身のことに関して、先の話をするのは、このときが初めてのことだった。

彼女にはこの時点で、まだセンターから何の連絡も入っていなかった。結婚初日のことを、俺は思い出さずにはいられなかった。あのとき俺は花嫁の名前さえ、当日にならなければ知らされなかったのだ。

サーシャはすぐには答えなかった。しばらく迷うように視線を揺らしていたが、やがて顔を上げて、

「償い——になるのか、わからないけれど」

小さな、けれど、はっきりした声で、そんなふう切り出した。

「自分がしてきたことの、報いを、受けなくてはならないと思うの」

それから一週間ばかりが経つころ、サーシャあてに通信が入った。

彼女は少し迷って、手元の端末ではなく、リビングのディスプレイにその通話をつないだ。俺も話を聞いていいということだろう。

昼間のことで、その場にはクロードアもいた。娘はまだ機嫌をなおしてはいなかったが、お母さんの話を邪魔してはいけないよと言い聞かせると、不承不承といったふうにならずいて、ソファの上でぬいぐるみを抱きしめた。

ディスプレイに映し出された女性は、変わった格好をしていた。

尼僧服——歴史映画のなかでしか見たことのなかったような、その仰々しい服装を見て、俺はちょっと面食らった。サーシャがいつか、神様がどうのと言っていた理由が、やっとわかったような気がした。

シスターはサーシャと、それから母親の影に隠れようとするクロードアとを交互に見て、まあ、と明るい声を上げた。そのあとで俺に向かって、丁寧に頭を下げた。『突然の失礼をお許しくださませね』

「いえ」

短く答えながら、まだいくらか気を吞まれていた。ずいぶんと年老いた人物だった。目が悪いのかもしれない——年のせいか、あるいは何かの病気なのか、瞳が半ば、白く濁りかかっていた。

『久しぶりですね、サーシャ。あなたとまたこうして話せて、嬉しいわ』

ひどく感慨深げな口調だった。サーシャは困惑したように視線を揺らしたが、すぐに顔を上げた。「わたしもです——シスター・マリア」

シスターは、なぜだか驚いたように、軽く目を瞠った。それからひどく嬉しげに、相好を崩した。

『あなたがよい出会いに恵まれたようで、何よりです——こんなに嬉しいことはないわ』

画面の向こうの老女は目を閉じて、何か、祈るような仕草をした。その枯れたような皺ぶかい指を見ながら、この人も、例の措置を受けて永らえた人なのだろうか、つい考えずにはいられなかった。

ゆっくりと目を開けて、シスターは微笑んだ。

『今日は、今後のことを話したくて、連絡したのです。あなたの身の振り方を相談したくて』

シスターがみなまで言うのを待たずに、サーシャは緊張した声を出した。

「いまからでも歌を学ぶことは、許されますか」

画面の向こうで老女はかすかに息を呑み、短い沈黙が落ちた。サーシャは何かの言い訳をするように、口早に続けた。「前にシスター・メリルが、そういう話をされていたんです。わたしが希望すれば、声楽の先生をつけてもらうことも、できるかもしれないと」

シスターはまじまじとサーシャの顔を見て、それから、確認するように言った。『それは、教師として聖歌の授業を受け持つ意思があると、そう受け取っても？』

「はい——もしわたしに、それだけの時間が残されているのなら」

はっきりと、サーシャはうなずいた。

緊張に強ばったその横顔を見ながら、それが彼女の言っていた、償い、なのだろうかと思った

画面の向こうで、シスターは何かを感じ入ったように目を閉じた。再び彼女がまぶたを持ち上げたとき、濁った緑の瞳は、涙でかすかに潤んでいた。

『歓迎します、サーシャ。――あなたはきっと、いい教師になるわ』

サーシャはかすかに眉をひそめて、それから少しばかり唇の端を上げた。「わたしはいい生徒ではなかったでしょうに」

その声は皮肉の色をはらんでいたが、シスターは何もかも承知しているかのように微笑して、ゆっくりとうなずいた。

『だからこそです』

その返答がよほど予想外だったのか、サーシャは言葉を失って、いつとき黙り込んだ。やがて彼女は疑いの色を目に残したまま、慎重な口ぶりで問いをかさねた。「――神様を信じていなくても？」

『メリルもそうでしたよ』

その名前は、彼女にとってどんな意味を持っていたのだろう。

いまにも泣き出しそうに、サーシャのまつげが震えるのを、俺は口を挟むこともできず、ただ見ていた。

だがサーシャは泣くことなく、ディスプレイに向かって頭を深く下げた。

「感謝します、シスター」

その日は、あっという間にやってきた。

娘がセンターに入ったあとは、金輪際、連絡を取ることは許されない。アドバイザーから聞かされた説明によれば、パーソナルコードまで新しいものになるという念の入れようだった。電子的に接触がブロックされるだけなら、ネットワークに侵入する方法もあると、頭の隅ではそんなことを考えていたが、そう単純にはいかないようだ。

センターの機密上の問題というのが、その理由だったが、クローンの子たちのほうが多数派を占めるセンターでは、親から連絡があるというだけで特別扱いになってしまうのだという話が、言い訳のように付け足されていた。

機密保持が最大の理由だから、当然のようにサーシャに対する通信も禁じられる。こちらについては、パーソナルコードの話はなかったが、サーシャ自身が、連絡しないでほしいと言った。

彼女が何を思い浮かべているのかは、わかるような気がした。あの素っ気ないメッセージが、まだ目に焼き付いていた。――NOT FOUND。

思うところはあったが、結局、俺はうなずいた。俺自身にとっても、そうするほうがいいような気がした。少なくとも、例の計画を実行に移してしまうまでは。いつか、もしも何もかも間に合わなかったと知ったときに、自分がくじけないでいられるかどうか、わからなかったから。

何度も話し合っ、結局、クローディアの手術はしないことにした。

例の計画は、たしかな約束を出来るようなことではないと、俺は念を押したが、サーシャはそれでいいと言った。

手術を選んで、シスターになるための教育を受けさせるよりも、他の子たちの間に混じって、同じように暮らさせたいと。

迷いは最後まで消えなかったが、最終的には俺も同意した。その選択が正しかったのかどうかはわからない――後になれば、きっと悔やむだろうという気がした。自分たちが間違った判断をしたのではないかと、そう思わない日は、これから先、おそらく一日たりともないだろう。

その後悔を持ち続けることだけが、唯一この先、俺が娘にしてやれることだった。

別れの日の朝、やけに早くに目が覚めた。

サーシャはまだ眠っていた。起こさないように、つめたい頬にそっと触れて、涙のあとをぬぐった。朝の白い光の下で、相変わらず白い肌には青い血管が透けていたが、それでも出会った頃の病的な顔色に比べれば、いくらか血色がいいように見えた。

足音を立てないように寝室を出て、隣の子ども部屋のクローディアの様子を見にいくと、こちらはまだ眠っていた。泣きはらした跡のある目元にそっと触れると、枕がまだ濡れていることに気がついた。

そっと頬にキスをすると、クローディアは目を覚ましかけて、このごろ急に長く伸びた手足を

もぞもぞさせたが、すぐにまた寝入ってしまった。

子どもは眠らなけりゃいけない。ぎりぎりまで寝かせておこうと思いながら、そのことで恨まれそうな気もした。だが、それでいいとも思った。

センターへの私物の持ち込みは禁止されているというので、朝からクローディアには、前もって送られてきていた標準服を着せた。

せめて気に入りの服でも着せて送り出してやりたかったが、規則だからと、あえなく一蹴された。他の子が持っていないものを、その子だけが与えられているとなれば、喧嘩の原因になるからと。

これからこの子は、クローンのほうが多数派を占める子供たちのあいだで暮らすのだ。子供にも嫉妬はあるんですけど、そう言われれば、引き下がるほかにどうしようもなかった。

せめてと思って、この頃クローディアがいちばん気に入っていた形に、髪を編んでやった。嫌がるかとも思ったが、娘は怒った顔のまま、黙ってさせた。

もう少し大きければ、自分でもできるように教えてやれたらどうかと、考えてもしかたのないことを思った。

頑なに背中を向けてうつむいているクローディアに、笑顔を見せてくれないかと声をかけても、娘は黙ったまま、ずっと顔を背けていた。その耳が赤くなっているのを見て、俺は引き下がった。自分が無理を言っているということはわかっていた。

二人組の係官がやってきて、いよいよ家を出ないとならないとなったとき、それまでずっと黙り込んでいたクローディアが、一転、顔を真っ赤にして大泣きした。

最後だからと係官に断って、もう一度だけ、ふたりで代わる代わる娘を抱きしめた。だが、泣き止むまで待つてやることは許されなかった。

嫌がる娘を、係官は慣れた手つきで俺から引きはがして、手足をばたつかせて抵抗するのをものともせず、軽々と肩の上に担ぎ上げた。

思わず安心したのは、彼らが鎮静剤でも持ち出すのではないかと思っていたからだ。効き目の弱いものであっても、薬は怖い。思わぬ副作用が出ることもある。

係官はいくつかの連絡事項を伝えると、さっさと歩き出してしまった。その背中を追いかけて、殴り飛ばしてでも娘を連れ戻したいという衝動を、むりやり押さえ込みながら、クローディアの声が届かなくなるまで、じっと耐えていた。暴れたところで、警備ロボットがやってきて、それこそ鎮静剤でも打たれるのが関の山だというのはわかっていた。

姿の見えなくなったあとも、いつかその場に留まって、娘の連れてゆかれたほうを見ていた。サーシャがうつむいて、涙を堪えていた。

自分の父親のことを思い出した。暴れて取り押さえられ、連れてゆかれる俺に手を伸ばして半狂乱で泣きわめいていた父――いまごろ彼はどうしているのだろうと思った。

サーシャの出発のほうが、半日だけ遅かった。クローディアが連れてゆかれたその日の午後、数えるほどもないわずかばかりの私物をまとめて、彼女は俺のほうを振り返った。

その唇が何かを言おうとして迷い、言葉を探しそこなって、閉じた。

「――元気で」

ほかにどう言いようもなく、それだけを言った。

あとどれだけ生きられるかもわからない相手に向かって、それは適当な文句ではなかったかもしれないが、サーシャは怒らなかった。ふっと、目を細めて、

「あなたも」

そう囁いた。

少し考えて、手を差し出した。サーシャはわずかにためらってから、その手を握り返してきた。

この先に待ち受けている、彼女の償いとやらがどういうものなのか、詳しい話はずいぶん聞けずじまいだった。自分がひとりでやらなくてはならないことだと、そう言ったサーシャの声だけが、まだ耳に残っていた。

すでに係官がやってきて、彼女の支度が終わるのを待っていたので、よけいなことは口に出来なかった。必ず間に合わせると、とうとう口に出して言うことのできなかった言葉の代わりに、握った手に力を込めて、そっと離れた。

六年あまりを過ごした家を出て、カレッジの寮に移ると、目に見えて時間の流れが変わった。

教程をひとつずつこなしながら日々を過ごしていると、あまりにも当然のように、平穩に一日が過ぎてゆくことに、俺は気がつかされた。

妻を失った痛手からまだ立ち直れていないようすの男たちも中にはいたが、彼らの大半は一心不乱に学業に打ち込むか、あるいは人の輪を外れて殻に閉じこもることを望んだ。そして、それ以外のほとんどの人間は、おそらくそうした時期を、すでに通り過ぎつつあった。

考えてみれば、当然のことだったかもしれない。多くの男はもう何年も前に妻に先立たれているはずだったし、それからの数年間を育児に忙殺されてきたのだろうから。俺のほうかむしろ例外だったのだ――それもおそらくは、かなり幸運な部類の。

世界は、一見したところ平和だった。とりあえずの生活に不安はなく、将来はゆるやかに保証され、その気になれば学ぶべきことも、打ち込めるような趣味や娯楽のたぐいも、目の前にいくらかでも用意されていた。

そのかりそめの平穩が、俺には恐ろしかった。家族を失った痛手を癒やし、過ぎたことは忘れて、ただ提示される道を選んでいけば、これから先の人生を間違いなく穩当に歩んでゆけると、暗にそう訴えかけてくる、見えない圧力のようなものが。

進学してから、セオとはまたしばしば会う機会が増えた。学部は違っていたが、同じ講義をいくつか取っていた。

何度か連れだって出かける機会もあったが、例の計画のことは、まだ打ち明けていない。卒業セレモニーのときの一件を、セオは俺の一時的な好奇心だと思っているはずだった。あのとき、地球の通信を傍受するということは話したが、それが何のためなのかということは伝えなかった

から。

いつか時期が来たら、この友人には何もかも話そうと思っている。

セオは工学部を選択していた。いずれ医療機器の開発のほうに進みたいと、友がそう口にしたとき、その目に落ちた影と、それからその奥ににじむ決意の色に、俺は気がついた。

何をしても未来は変わらないのだと思っていたと、いつか、サーシャは言った。

そうではないと、もう一度、彼女に言って聞かせたいと思った。もしも俺の計画がうまくいかなくて、何も変わらなかったとしても、いつか他の誰かが――セオのような人間が、もっと違う手段で世界の不条理に挑みかかるだろう。たとえ、どれだけ時間がかかったとしても。

同時に恥じ入りもした。この途方もないような問題に、地道に、正面から現実と闘おうとしている友の選択に比べて、自分の考えが子供じみた、短絡的な思いつきのような気がして。

俺のしようとしていることは、ひどく愚かしいことなのかもしれない。成功するかどうかもわからない――計画自体が成功したとしても、その先どう転ぶかも、まだわからない。途中でことが露見したときは、監獄にぶち込まれるだけで済むかどうか。何もできないまま、たとえば人知れず消されることになったとしても、俺は驚かないだろう。

だが諦めるつもりはない。

教員に向かっては礼儀正しく、級友らには愛想良く振る舞って、人に付き合っただけで出歩きながら、目立たないように機材を集める。部屋で一人きりになると、違法に作った端末の画面をにらみつけて、想定する障害の対策を練り、可能性をひとつずつ潰してゆく。

ひとりで作業をしているとき、よくサーシャの横顔を思い出した。画面の向こうを鋭く睨みすえていた、あの、炎のようなまなざしを。

プログラムのデバッグを続け、発信すべきメッセージを練りながら、行政府という姿のない怪物に向かって、繰り返し胸のうちに囁きかける。

今に見ている。牙を忘れた狼ばかりではないぞと。

## クローズド・アクアリウム

<http://p.booklog.jp/book/74767>

著者：朝陽遥

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hal00/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74767>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74767>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ